

目次

0 プログラム

1日目 見学会

I ふらっとステーション・ドリーム見学会

- 1 地域でコミュニティカフェが果たす役割（島津 禮子） 1

II COCO 湘南台見学会

- 1 自立と共生の暮らし（西條 節子） 28
2 地域へ開くグループリビング（土井原 奈津江） 32
3 ワークスコープ・おり～ぶの取り組み（青木 静恵） 45
4 住人座談会 59

2日目 ワークショップ

- III 開会の挨拶（星川 光子） 70

- IV 挨拶（西條 節子） 71

V 基調講演

- 1 家族を超えるホーム作り～単身化時代の中で～（宮本 みち子） 72

VI パネルディスカッション

1 パネリスト講演

1. 地域へ開くグループリビングー「たすけ愛の家」（星川 光子） 101
2. 地域とつながる取り組みー「モーニング」（清野 恭子） . . 111
3. COCO 宮内の取り組み（原 眞澄美） 118

- 2 パネルディスカッション（大江 守之） 129

VII グループディスカッション

- 1 課題説明（小島 美里） 140

- 2 発表 141

- 2 まとめ（小島 美里） 148

- VIII 閉会のあいさつ（星川 光子） 150

- IX アンケート 151



プログラム

1日目(2月23日 土曜日) 見学会

先駆的なグループリビングCOCO湘南台を始め、グループリビングのヒントになる活動として先駆的なコミュニティカフェとして知られる「ふらっとステーション・ドリーム」を見学します。夜は交流会を開催し、ネットワークを広げます。

時間	内容	講師・コーディネーター
12:00	湘南台駅東口 プラッサムアオキ(花屋)前待合せ	
12:00~12:30	移動(バス)	
12:30~13:00	ドリームハイツにてランチ	
13:00~14:30	ふらっとステーション・ドリーム見学会 コミュニティカフェの取り組み	島津 穂子氏
14:30~15:00	移動(バス)	
15:00~17:00	COCO湘南台見学会 自立と共生の暮らし COCO湘南の取り組み ワークスコープおり〜ぶの取り組み	西條 節子氏 土井原奈津江氏 青木 静恵氏
17:00~18:00	移動(バス)	
18:30~20:30	中華街彩香にて交流パーティー	

2日目(2月24日 日曜日) ワークショップ 神奈川県民ホール大会議室

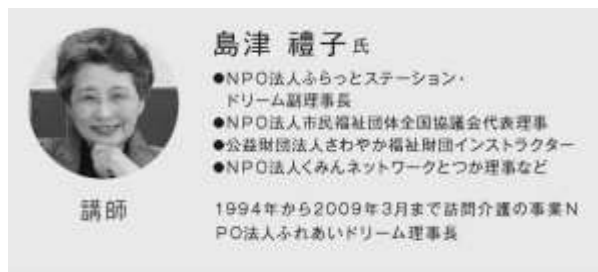
宮本みち子先生に基調講演をしていただいた後に「地域に開くグループリビング」をテーマにグループリビング運営者にご講演いただきます。今回のテーマに繋がる問題提起をもとにグループディスカッションを行います。

時間	内容	講師・コーディネーター
10:00~	開場	
10:30~10:40	開会の挨拶	星川 光子氏
10:40~10:50	挨拶	西條 節子氏
10:50~11:35	第1部 基調講演 家族を超えるホーム作りー単身化時代のなかでー	宮本 みち子氏
11:35~12:50	昼食休憩 第2部 パネルディスカッション	
12:50~13:00	メンバー紹介	大江 守之氏
13:00~13:15	講演 「たすけ愛の家」の取り組み	星川 光子氏
13:15~13:30	講演 「モーニング」の取り組み	清野 恭子氏
13:30~13:45	講演 「COCO宮内」の取り組み	原 眞澄美氏
13:45~14:50	パネルディスカッション	
14:50~15:10	休憩 第3部 グループディスカッション	
15:10~15:40	課題説明・グループディスカッション	小島 美里氏
15:40~16:15	発表	
16:15~16:25	まとめ	
16:25~16:30	閉会の挨拶	星川 光子氏
16:30	終了	

1 日目

I ふらっとステーション・ドリーム見学会

1 地域でコミュニティカフェが果たす役割―「共に暮らし、支え合うまち」



いまご紹介いただきました島津禮子と申します。よろしくお願ひいたします。ご遠方からいらしていただいて大変光栄でございます。あんまり人数多いもんですから二班に分けさせていただいて、1班の方はふらっとステーションの方でお食事をとっていただいて、2班の方はここでお話を聞いていただいた後交代いたしますので、少々お腹がお空きになるかもしれません。よろしくお願ひいたします。

このドリームハイツのエリアは、40年前に作られた集合住宅です。40年前ですから、私まだ30代後半の頃かなあって。そんな頃です。

「わたしたちのまち」このリーフレットご覧ください。ここに書いてあります通り、1970年から2年～3年かけて大規模開発で集合住宅ができました。元はドリームランドという遊園地だったんですね。ディズニーランドができるまでは割と大きな遊園地だったのですが、だんだんお客さんが来なくなって経営が成り立たなくなり、ドリームランドの半分を県の住宅供給公社と市の住宅供給公社に売ったんです。

それがいまから40年前。1970年ごろから2～3年かけて2270世帯の大規模な集合住宅ができました。低い所で8階建て、高い所で14階建てです。

その頃そのここに入居された方の年齢から言いますと、20代30代、それから40代という若いご夫婦が多く入居されました。ですから一番最初に困ったのは幼稚園なんです。幼稚園はいまこの学校の前に「たまや」というスーパーがあるんですが、あそこに幼稚園がありました。その1園しかなかったものですから、皆さん入園の申込書をいただくのにご夫婦で徹夜して並びました。そういう時代ってあったんですよ。ここだけじゃなくて、多分皆様の中には、幼稚園の申込書をもらうために徹夜したよっておっしゃる方もいらっしゃるかなと思うんですね。(数名の方うなづく)

若い方はそんなこと全然御存知無い。20年、30年前の前の前のお話ですから……。

そういうことがあったので、ここにお住みになってらっしゃるお母様方が、それだったら自分で幼稚園を作っちゃえということで、（資料を）一枚開けてください。リーフレット1番の「すぎのこ会」これが1970年にできました。このドリームハイツの中の共有地の中の一部を借りて、横浜の市バスの古いダメになったバスをもらってきて、そこで幼稚園がはじまりました。もちろん、そのお母様方が自主保育するわけですから、設備ってというのは昔ながらのどろんこ遊びとか、要するに体で色んなことを覚えるすぎの子幼稚園ができたのが、ドリームハイツの福祉のはじまりです。

それから一つひとつ住民の有志の方たちが、「これが必要だよな」というものを作り始めたんです。この（資料の）中開けていただくと、1番から5番までが、子育て支援の団体がごぞいます。4番の「つぼみの広場は」1996年にできたんですが、障害児の養護学校から帰ってきた子供たちを預かるところです。何らかの障害を持っていらっしゃる（子供の）お母様お父様は共働きをしないと障害児のお子さんたちを育てていけないということで、始まったのがつぼみの広場です。この隣の5番「おやこの広場ぽっぽの家」というのは、子育て支援の一段落したあと、新しくこの中に子供連れで入居された方々の親子の広場です。ここは全世帯が分譲住宅なんですが、最寄りの駅からすごく遠いので、東京にお勤めの方なんかは、どんどん引っ越していかなきゃならない、30代はいいけれども40代半ばを超えるとあの満員電車に乗って東京まで通えないという方がすごく多くなって、そして引っ越してしまわれた。で、その後入居されたのがその方たちです。

次開けます。高齢者障害者支援というものがあります。これは、子育てが一段落したあと、ここのドリームハイツの住宅の間取りとしたら、真ん中に水回りがあるって、こっち側とこっち側に部屋があるんですね。だから、はじめから2世帯が住めるような感じになっています。ですから、はじめから高齢者をお連れになった方なんかがお入りになったところが、たくさんあります。そのうちに20代30代の若いご夫婦の方は、転勤っていうのははじまりまして、転勤で他にお出になる。そうすると、高齢者夫婦だけが残っちゃう。というところで、その方たちのために、私たちはまだ若いから...その頃はまだ若かったんですね、若いから、お弁当を作ってお届けをして、安否確認もしましようと思って創られたのが6番の「ドリーム地域給食の会」これです。その次にできたのが、7番の「ふれあいドリーム」という訪問介護の団体です。この頃ですね、有償サービス、有償ボランティアというのが流行りまして、あちこちで有償ボランティアの組織がたくさんできました。

その頃、ボランティアっていうのは無償が基本じゃないのっていうので、有償と無償の議論が偉い先生方の中で意見を戦わせた時代ですね。1994年に出来たのが「ふれあいドリーム」という支えあいの活動の団体です。

NPO法人 ふれあいドリーム

- 1993 ふれあい活動開始
(家事・介護の助け合い)
- 1999 NPO法人化
- 2000 訪問介護事業
- 2003 居宅介護支援事業
- 2003 障害福祉サービス
事業



その頃福祉っていうのは、措置です。措置の時代です。要するに、行政が「あなたにヘルパーを派遣できるのは一週間に2度ですよ。有料老人ホームや特養に入りたかったら何々県のあっちの方に入りなさいよ」というようなことを行政が頭ごなしに言う措置の時代でした。私たち「ふれあいドリーム」というのは行政の措置の谷間を縫うようにサポートしてきました。

高齢者で一人暮らし、寝たきりの人にヘルパーは一週間に2回っていうことがあります？それでは、生きていられないですよ。そういう人たちのために、まっ〜ためにということじゃないんですけど、そのような一人の方を助けたいって思っやむにやまれず立ち上げたのがふれあい活動という、利用者も協力者もお互いに会員として支えあうサポート体制なのです。

その次にできたのが、「いこいの家夢みん」です。これは一年後にできましたが、ふれあいドリームっていう所は、協力者が相手のお家に行って、色々な生活支援や買い物支援、または、移動困難者のために移動サービスを、やって差し上げるんですけど、それだけじゃダメでしょ。要するに元気な高齢者には家にももっていないで、出てきていただきたいと思ってできたのが、8番の「いこいの家夢みん」です。そんな形で、1つひとつ主婦の力は小さいものですが、自分たちの誰かが「こういうものが欲しいな」「ドリームハイツの中にこういう事業があったらいいだろうな」と思った人が立ちあげて、この指とまれで賛

同者を集めて立ち上げたのがリーフレット全部を見渡してみると、20年の間に色々なことがありましたけれども、その15番の「地域運営協議会」「見守りネットセンター」「地域交流室」まで出来てしまった。これが、ドリームハイツの福祉の団体の日常です。

普通は、ひとつの団体が例えば訪問介護の団体があったとします、その団体がデイサービスもしましょう、小規模多機能サービスもしましょう。あれもこれもしましょうとひとつの団体がどんどん大きくなってNPOで起ちあげた団体でも、はじめはすごく細々とやっていた団体でも、いま1億3億5億稼いでいるっていうのがすごくあります。

ドリームハイツの特徴としては、一つひとつは小さいけれども、その小さい団体が、この中でネットワークを組みながら、困っている方をサポートしていくっていうのが、このドリームハイツの福祉団体の特徴なんですね。それで、より長い時間をかけて創ってまいりました。

その1つ「ふれあいドリーム」っていうのを立ち上げたのは私です。で、起ちあげて、はじめは有償ボランティアですから、利用者さん、利用したいっていう方も、行政の措置の谷間ですからね、本当に寝たきりの方のおむつの交換をいたしましたし、身体の調子を考えて食事のサービスもいたしましたし、怪我の手当...寝たきりになると褥瘡になるんですよ。血流が悪くなると指先が壊死するのです。そういうところの手当も全く素人のおばさんたちの集団なんだけれども、その時のよかったのが、お医者さんもナースも、その一人の人のサポートを一緒になってやってくれた。だから、素人のおばさんでもお医者さんの指示で、このガーゼをこうしなさいよとか、おむつはこうやって取り替えなさいよとか褥瘡になるといけないから、こういう体位交換をしなさいよとか、お医者さんとナースが全部教えてくださった。私たちの「ふれあいドリーム」は、そうやって知識、スキルをだんたん身につけてきた団体です。ですから、介護保険がはじまったときも、「お願い、介護保険が始まって来ても来てほしいわ」っていう依頼が多くあってそれで、介護保険に参入いたしました。で、ケアマネジャーの事業所も作りました。

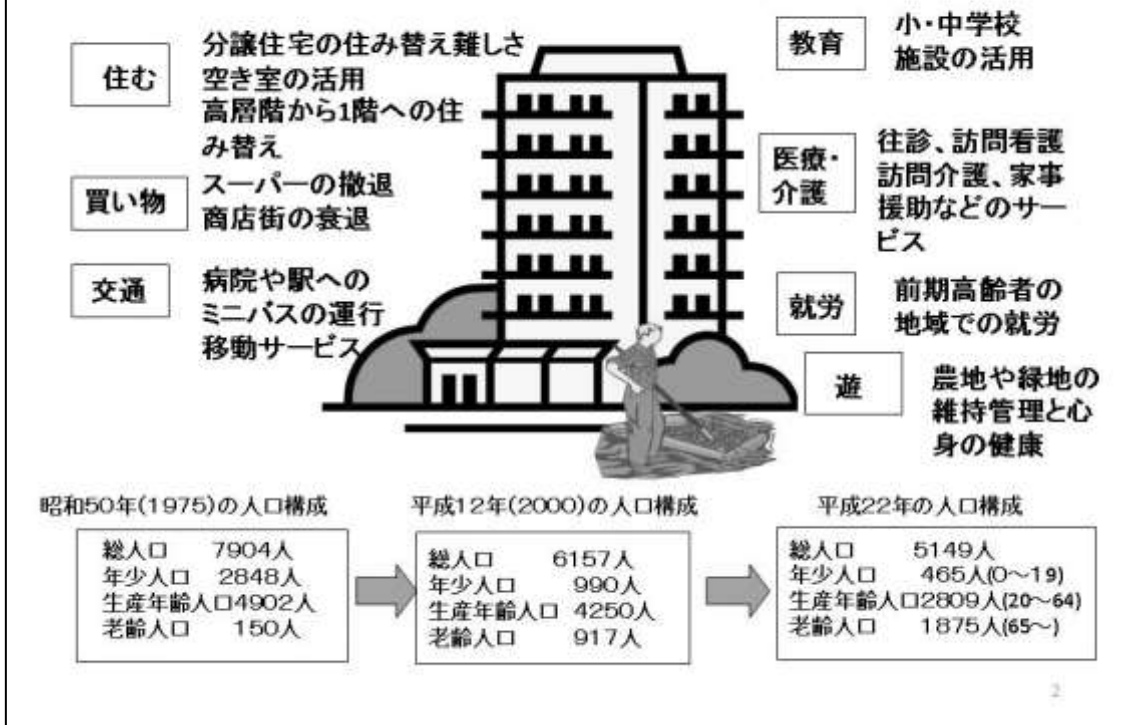
私ごとですが、4年くらいまえに、肺がんになったんです。肺がんになって、肺がんの手術をして、ふれあいドリームも事業からは手を引きました。手を引いて、いま一人暮らしなんです。退院して帰ってきた時に、皆声をかけてくれるんです。「お弁当届けましょうか」「ふらっとステーションのお昼だったら届けるよ」とか、行きたい所があったら連れて行ってあげるよとか、もう色んな人が声をかけてくださって、そして一人暮らしで、肺がんの手術をし、余命2年と言われた私が、これだけ元気になった。ということは、いまは今年79歳ですが、これだけ元気になれたということは、ドリームハイツにある団体の方たちの声ではないかというふうに思っているんです。

また、ドリームハイツで創ってきたコミュニティ・カフェというものがあましてリーフレット 10 番で名前を「ふらっとステーション・ドリーム」と言います。このコミュニティ・カフェを創ってきて 8 年になります。そのコミュニティ・カフェが、この地域どのように役に立っているか・・・今どんなふうになっているか、パワーポイントを使って、地域でコミュニティ・カフェが果たす役割―「共に暮らして支えあう」ということを、ちよっとお話させていただきます。

「ふらっとステーション・ドリーム」ができた経緯をお話すると、平成 17 年ごろに全国で福祉計画を立てることが決められました。地域の福祉計画を自分たちの手で考えなさいよという福祉計画ですけれども、ここで言いますと戸塚区ですね、横浜市は市全体の福祉計画を立てなきゃいけない、それぞれの区はそれぞれの中で福祉計画を作っていました。私はその時の策定委員の一人でした。戸塚区は、27～28 万の人口です。横浜市は 370 何万の人口ですね。その中で区は 18 区あります。18 区の一つが戸塚区でありまして、戸塚区の福祉活動計画を立てる 3 年間かかりました。横浜市ではケアプラザが人口に比例して出来ています。ケアプラザ...他の地域では違う呼び方をしていると思うんですが、そのケアプラザが戸塚区の中には 10 か所あります。その 10 か所のケアプラザで、皆さん住人の方をお呼びして、この街をどうしていったらいいですかとか、何が必要ですかというようなことを懇話会を 1 か所で 3 回くらい開きましたから全部で 30 回くらい開いたんですね。その中で一番欲しいものってなにか・・・とお聞きした時皆さん居場所って仰ったんです。居場所が欲しいと。それと次に欲しいのが情報が区役所まで行かなくても近くで手に入れたい。それともう一つは心配事や困りごとがあったときの相談室が近くに欲しいというのが 3 つの大きな希望でした。

そういうことで、区役所の担当者と相談しながら、「じゃあ戸塚区の中にいっぱい居場所を創っていきこうね」って。「名前はなにがいいでしょうか」って言ったら区役所の人...若い担当者方と話をして、「ふらっとステーションっていうのはどう？」って言われたんですね。”ふらっと”というのは、ふらっと入れる。それから床がフラット。バリアフリーである。それからもうひとつは、いらした方とそこにいるスタッフがフラットな関係、上下関係じゃなくて。その 3 つのフラットをつけて、ステーションにしよう。その次に、ドリームという地域名を付けたんです。いま、ここだけしかないけれども、これからふらっとステーション・何とかというのができるように試行錯誤しているところです。そこで、「ふらっとステーション・ドリーム」ができあがりました。

少子・高齢社会の地域課題は、総合的にあらわれる

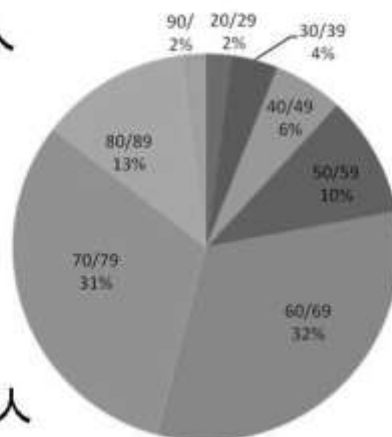


次に、ここに地域の課題のことを、ちょっと描写させていただきました。住むことから始めて、介護と医療、買い物や交通の便、教育や就労も含めて地域の課題っていうのは、たくさんあるんですね。その地域によって課題は全部違います。医療が全然整っていない地域もあるでしょうし、それから買い物難民っていう言葉から分かるように、買い物に行けない、地域もありますよね。そういう地域の課題を考えると、総合的に考える...ひとつだけじゃない。買い物難民ってなんでなるのっていうと、思うかもしれませんが、要するに高齢者ばかり住んでいて、移動手段がないから買い物に行けない、そういうふうな総合的に地域課題を捉える。それをどうしていったらいいでしょうね、ということなんです。

この下の四角に数字がございますね、ここ...これは、1975年の人口です。ドリームハイツの人口です。総人口が8000人くらいですね。さっきも申し上げましたように2270世帯を割り算すると、一つの世帯は3人~4人。そして、その次に真中、介護保険がはじまった年です。その右側、(平成)22年に国勢調査のときにわかった人口構成です。2012年ですね。そうするといま5149人となっていますが、5149人っていうのは8000人から5000人に減っています。だから、4人家族が1人家族になったね。というところが多いわけです。

独居世帯の人口構成

- 平成22年総数481人
(全世帯の21.2%)



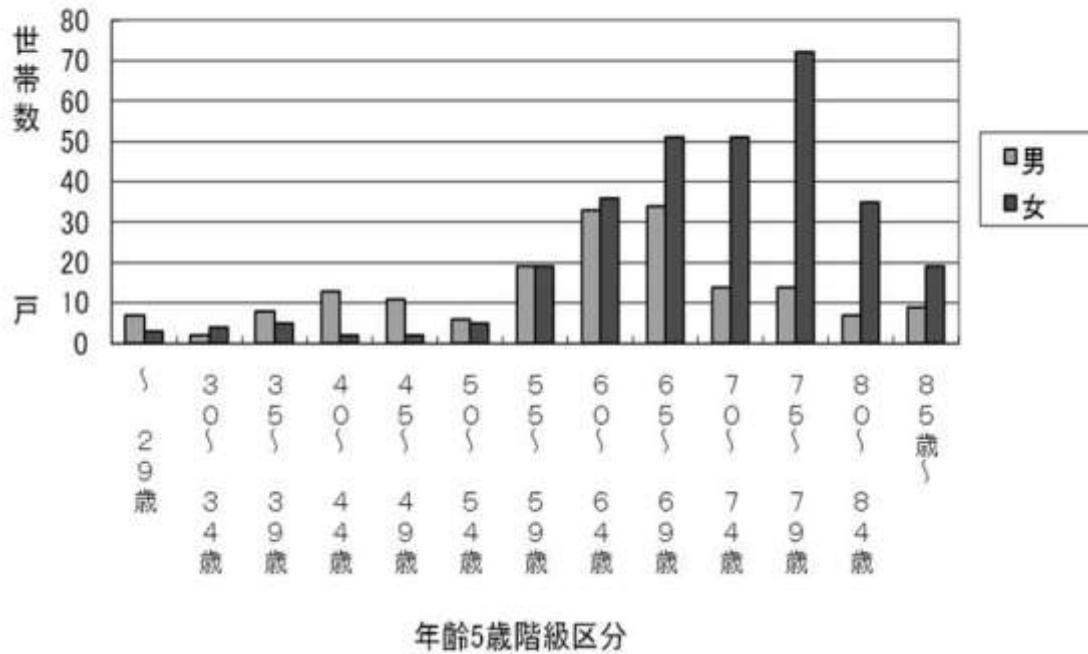
- 20歳～59歳⇒106人
- 60歳～ ⇒375人

次のページは、独居の数字です。一人暮らしの独居の方はどうなもんかという、国勢調査の数字から出しています。独居の人が489人います。いまは独居の方は元気でいい顔をしています。私も独居ですから。でも何処でどうなるかまでは分からないところで、人口の構成を出してみました。60歳以上が375人。だから、この独居の高齢者を今後、今のドリームハイツの中にある事業所だけで在宅で看取れるかっていう話が、これから出てくると思うんですね。ドリームハイツの独居世帯の年齢構成ですけれども、よくご覧くださいませ。赤いのが女性です。そしてブルーが男性です。75歳から79歳の一人暮らしの方。女性は男性の6倍おられます。女性は夫を亡くしても凶太く生きておられます。ところが、男性は妻を亡くすと、すぐ後追いをしちゃうというのが、グラフから分かるんですね。70歳でもそうでしょう。まあだいたい60歳代は、夫婦ともども同じくらい独居になっても、女性も男性も同じくらいの方が生きています。こういうところがグラフにするとよく分かってきます。

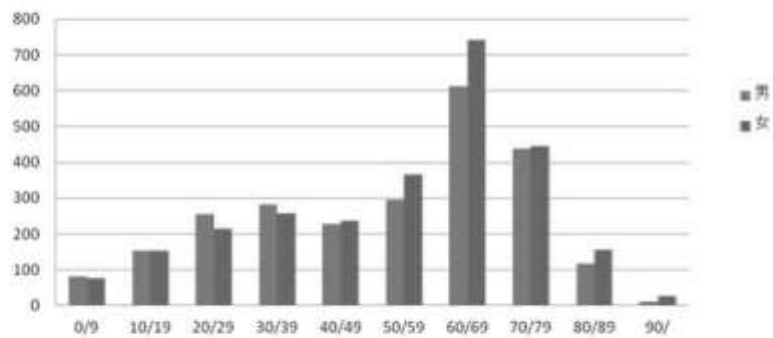
次に、これが年齢分布の男女別人口構成です。一番人数が多いのが、60歳から69歳まで1353人います。だから、団塊の世代の人が、まだまだ地域の中で活躍できる人が大勢いるということを、これは表していますね。

ただ、女性は仕事が終わってもお友達もすぐできますが、男性はなかなか地域デビューができないというところに難点があります。

ドリームハイツ独居世帯の年齢構成
H22.11.30 総数=481世帯(21.2%)



年齢区分男女別人口構成
平成22年 男⇒2477人、女⇒2672人



☆60歳~69歳⇒男612人 女741人 計1353人 ☆70歳~79歳⇒男439人 女445人 計884人
☆80歳~89歳⇒男116人 女156人 計272人 ☆90歳~ ⇒男11人 女27人 計38人

ドリーム地域給食の会



次は先ほどお話したとおり、「地域給食の会」がお弁当を作っている絵です。

NPO法人ふれあいドリーム



2008.6.19

8

次は「ふれあいドリーム」ふれあい活動の開始が1993年で、訪問介護事業でNPO法人化したあと、介護事業と居宅介護の支援事業、障害福祉...などをやっていますよという絵です。ふれあいドリームの活動の中の写真で、見学者がお勉強をしておられます。この写っている方は、当時106、107歳でお亡くなりになったんですが、呼び寄せ老人ってわかりますか？北海道にいらしたお母様を息子さんがここに呼び寄せて、ご一緒に暮らす高齢者のことです。呼び寄せられて何年間もうちから一歩も外へ出てない...結局だからこっちに呼び寄せたけれども、友達はいないし自分一人で何したらいいかわからないし、年齢は100

歳を超えているし...というような、色んなその人のマイナス部分があって、外に出なかった。で、ふれあいドリームのヘルパーが、お花見に行きましょうね～～、ようやく連れ出した絵なんです。とっても喜んでくださって、その後一年もしないで亡くなってしまったんですが、亡くなるまで、あのお花見が楽しかったって言ってらっしゃいましたね。

だから、要するにその地域でも色々な方がいらして、こういう時最後まで看取って差し上げるといのが、これからの地域の作り方かなと思います。病院には行かずに、ご自宅で眠るように最後を迎えと。



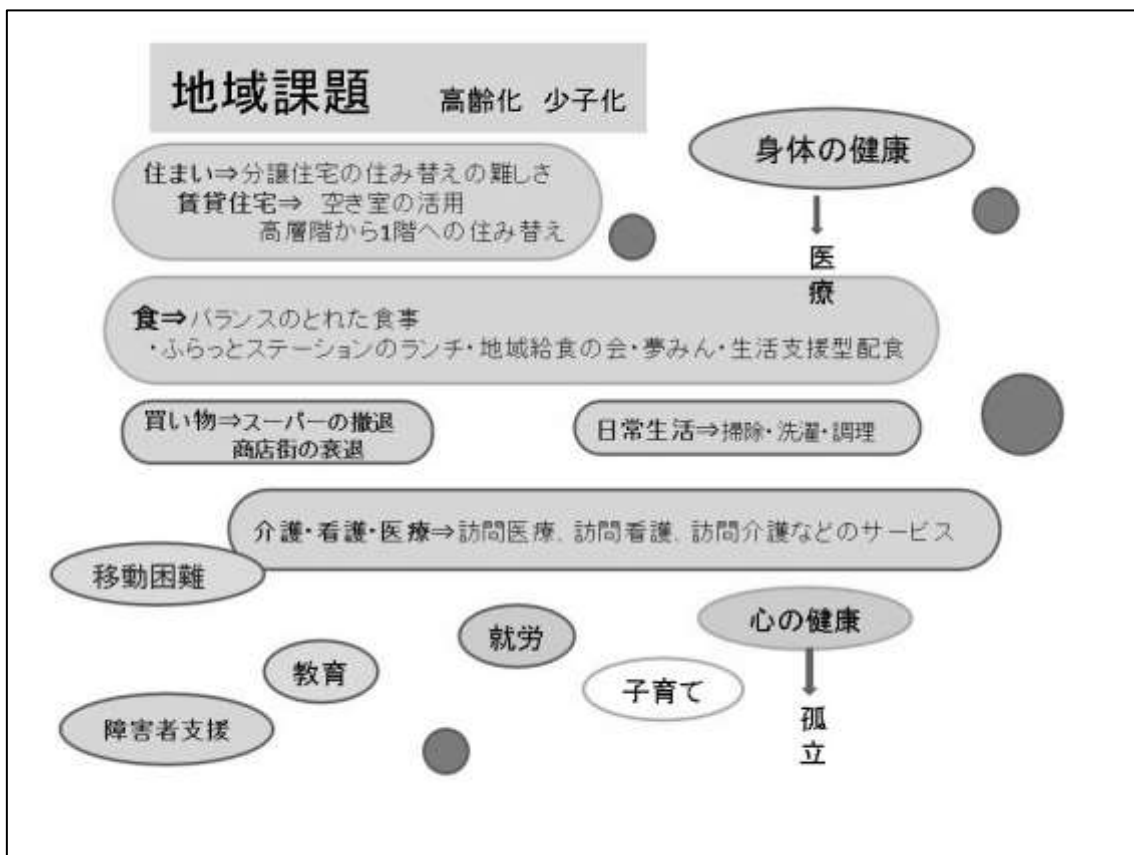
これはさっき申し上げたのと同じなんですが、外に出てきて欲しいということで「いこいの家夢みん」これはムーミンと呼びます。可愛いでしょ。夢みんと書いてムーミンと呼ぶ。

その割と出ていらっしゃられる方たちが談笑したりコーヒー飲んだり、お遊びをしてらっしゃる。

高齢化に対する不安

- ☆福祉連絡会 (地域給食の会・ふれあいドリーム・いこいの家夢みん)
 - ・人と人、団体と団体の連携
 - ・高齢化問題を共有
- ☆地域福祉保健計画策定委員
 - ・区民のニーズ
- ☆協働のこと
 - ・行政との協働⇒地域が変わると行政も変わる
 - ・情報提供⇒共有が大切
 - ・話し合う場ができる⇒理解が深まる

10



で、こういうことで高齢化に対する不安というのがたくさんございまして、このいま写真でお見せした3団体が福祉連絡会というものを作りました。何故作ったかというところ、それ以外の事業所は、自分たちの所で精一杯。ネットワークができていない。結局、ネットワークのまず1つとして福祉連絡会というものを作って、そしてお互いに情報を共有化したいというところなんです。

地域課題としては、先程申し上げましたように、色んな土地土地の地域課題は違いますから、ここの地域課題はなんだろうなっていうクエッションのところなんです。

住まいもある食事もある、色んな課題を持っている所があります。

で、そこで1つできたのが、ふらっとステーション・ドリームのランチなんです。ランチを皆さんこれから召し上がっていただくんですけども、今日は大人数なので一皿一皿出すと時間がかかるので、お弁当になっています。

で、そのスタッフがいま一生懸命朝から作っていますから、どうぞ召し上がっていただきたいと思うんですが。

まあ～～最初は戸塚区の地域福祉計画1つとしてスタートしました。このスタートするのも大変でした。地域福祉連絡会の3団体が一つになってのスタートでしたが、物も人もお金もないわけですよ。それぞれ自分たちの事業がありますから・・・それで3団体の有志が集まって、事業所ごとにお金を出しあって創っていきましょう。ということになりました。

ふらっとステーション・ドリーム

(2005年)

- 地域福祉3団体の連携してスタート
- 横浜市との協働事業を2年間続ける
- 空き店舗活用
- 地域で誰もが生き生きと豊かに過ごすスペース・交流の場として



行政との“協働”が盛んになった

12

私、先に申し上げましたように、ふれあいドリームの理事長をしていましたから、理事会にかけたんです。こういう所を地域に創りたい。3団体で計画している。3団体でお金を出しあって立ち上げたい。どうか協力してほしい。そう言いましたら、男の理事さんたちに大反対されて、「島津さん、新しい事業を作るにはね、メリット・デメリットをきちんと考えて、そして皆さんの意見を纏めるために稟議書を回して、そして、その上で1年くらいかけて、新しい事業っていいのは作り出すもの」って大反対されたのです。

男性の人のサラリーマンと企業の考え方なのです。全部。ところが、女の人はずいぶんじゃない。やらなきゃならない時はすぐにでも走りだす。本当。走りながら、駆けながら考えていくわけですよ。このようなことがあり事業所ごとにお金を出すのはダメだなあ・・・と。

ここは空き店舗だったんですよ、薬局だったんです、この店舗は。薬局だったのが、閉店にした途端に、色んな所が借りに来ていたんです。で、私たちもその一つ。だから2~3日中に返事をしなきゃいけない。切羽詰まったところで有志の人たちに、今、使わないお金を持っていたら貸してくださいませんかって頼んだの。もちろん、理解してもらえなかったら、自分で出さなきゃいけないかなっていう、そういう覚悟はしましたけれども。

でも貸していただけませんかってお願いしたら、「いいわよ」って650万円集まったの。

そんな650万なんていつ返せるかわからないお金ですよ、と。強制じゃありません。貸していただけるものがあつたら良いのです。ホントに貸していただけるの？どうしてって言ったら「それは心の問題でしょ。外国旅行でもしたらこのくらいのお金はかかるわ」そんなやり取りがあつて、もう、私、ビックリしてしまいました。

それでここで契約をすとなつたら、なかなか大家さんが「うん」と言ってくれなかったのですよ。なぜか...どこ馬の骨とも分からないボランティア団体に貸して家賃は払ってもらえるのかって。普通だったらそう思いますよね。私如果大家だったらそう思いますよ。だから、そういったボランティア団体には貸せないわ・・・っていうのがあつたんです。

でも、そこは一生懸命粘って、笑ってニコっとしたり、...女の人ニコってというのは怖いんですよ(笑)、で、出来上がったんです。で、その時650万円の借金を背負ってスタートしました。

それから、ここにも書いてありますように横浜市の協働事業を2年間続けたというのがあります。横浜市はNPO法ができた後、協働事業の基本方針を頑張って策定してくれています。とりあえず横浜市の協働の歴史というのをおさらいさせていただきたいなど。

横浜市の協働の歴史

➤ 高度経済成長期～1990代

- ・1975年すぎのこ、・1980年学童保育・1981年苗場保育園
- ・1990年地域給食の会・1994年ふれあいドリーム・1996年夢みん
- ・1996年つぼみの広場・1999年子育てネットワーク夢

➤ 1998年特定非営利活動促進法(NPO法)

➤ 1999年横浜コード

➤ 2000年市民活動推進条例

➤ 2004年協働推進の基本指針

- ・協働事業提案制度モデル事業(ふらっとステーション2006年の応募)

➤ 2006年横浜市基本構想

➤ 2009年市民活動支援センター

➤ 2011年地域で支えあう社会の構築を促進する条例

➤ 2012年横浜市市民協働条例

高度成長時代、横浜市っていうのはダダダッと人口が増えました。で、行政はその人口に比例した施設を...設備とかを創ることに懸命で、とても私たちの区民がやっている福祉事業についての関心はまるきりなかったんです。そして、その1990年くらいまでにここに書いてありますように、1975年のさっき申し上げた「すぎのこ」からはじまって、1999年子育てネットワーク夢まで、1990年代に8団体創りあげてきました。そして、その次の98年に特定非営利活動促進法というNPO法ができて、つまり非営利法人になったわけですよ。横浜市は始めて市民との協働事業の指針横浜コードっていうのを策定しました。

横浜コードっていうのは、行動するための基本の指針です。横浜市における市民活動と行政が協働して行うための基本指針ができたんです。で、その基本指針の中には、対等の原則。自主性の原則。自立化の原則。相互理解の原則。目的共有の原則。そして公開の原則があります。その6つを横浜コードとして制定された。その後色々な条例ができあがってきたんですけども、2004年に協働推進の基本指針ができて、「協働事業提案制度モデル事業」に、ふらっとステーションが応募して、採択されました。横浜市との協働事業を2006年まで続けました。

ふらっとステーション・ドリーム 場を活かした様々な活動展開

- 地域の交流サロン
- ギャラリー、ショップ
- 情報収集、相談事業
- イベント
ピアノライブ、
童謡を歌う会、
各種講座、
作品展示、販売
(サロン利用者1,200人以上/月)



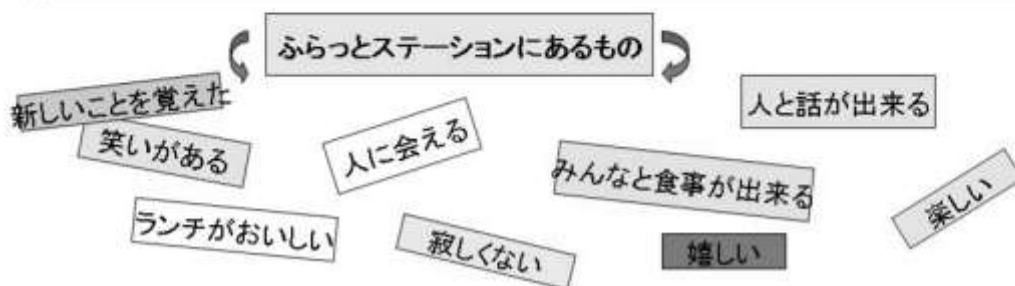
13

そのふらっとステーションでは、色んなことをしています。地域の交流サロン、ギャラリー、ショップ、情報収集・発信、相談事業、イベント、ライブ、各種講座、等々。毎月1200名以上の方々が「ふらっと」に集まってくださいます。

参加者の意識

居場所で知り合った仲間たち

- ☆顔見知り程度の友人・知人が増えた⇒88.7%
- ☆道で会い挨拶する仲の友人・知人が増えた⇒86.0%
- ☆会えば立ち話をする仲の友人・知人が増えた⇒80.4%
- ☆待ち合わせをし、おしゃべりをする仲の友人・知人が増えた⇒51.0%
- ☆お互いに誘い合って、地域活動や趣味の活動をする仲間が増えた⇒49.0%
- ☆個人的な話(悩み事や相談)をする仲の友人・知人が増えた⇒47.7%



「居場所で知り合った仲間たち」というこれはね、慶応大学の徳村くんが作ってくれたものです。要するに、ふらっとステーションがあったために、友だちが増えてよかった、顔見知りの関係が増えたよっていう、そこでお友達を作って自分の悩みを打ち明けたりするようなことができたよっていうことを彼がヒアリングやアンケートで聞き出してくださいましたのです。ふらっとステーションにあるものはこんなにたくさんあるのよ。と慶應の大学院生が、ここに住んで、そして研究して下さったんです、大江先生の下で。



NPO法人 ふらっとステーション・ドリーム



横浜市との協働事業

次は、「ふらっとステーション・ドリーム」に、中田市長が現れたときの絵です。横浜市長として中田市長。これエプロンしておられます。ふらっとのエプロンをしてコーヒーの注文に歩いているところです。こういうことを・・・ちょっとパフォーマンスをする方なんです。なぜか...、テレビが入ってきたから（笑）

で、これまでの協働の取り組みとは、色々市民と行政とともに取り組んで、市民は個別具体的なケースが把握できる、隣のおばあちゃんがこんなよとか、向かいのおじいちゃんがこんなよとか分かりますよね。そして、地域社会の小さな課題に目を置き換えることができる。行政はどうかと云うと、大きな情報網を持っている。信頼性などを利用して広く地域の協力を得られる。で、そういうことで情報をお互いに共有しあうことによって、色々なことに取り組めるんじゃないかならうかというのがありますね。そういうことで協働事業提案制度モデル事業に、私たちも「ふらっとステーション」も応募いたしましたして、最初に461万のお金を横浜市からいただくことができたということなんです。

これまでの「協働の取組」

これまでには主に、市民と行政の協働に取り組んできた。

• 市民は

個別・具体的なケースが把握できる
地域社会の小さな課題に目を配ることができる

• 行政は

大きな情報網をもっている
信頼性などを利用して広く地域の協力を得られる

例) 「横浜市協働事業提案制度モデル事業」

- 平成17年度～19年度に19事業を実施
- 「ふらっとステーションドリーム」もこのひとつ。

このような特性を生かして、
役割分担して事業を
すすめてきた！

横浜市の協働の歴史

➤ 高度経済成長期～1990代

- 1975年すぎのこ、1980年学童保育・1981年苗場保育園
- 1990年地域給食の会・1994年ふれあいドリーム・1996年夢みん
- 1996年つぼみの広場・1999年子育てネットワーク夢

➤ 1998年特定非営利活動促進法(NPO法)

➤ 1999年横浜コード

➤ 2000年市民活動推進条例

➤ 2004年協働推進の基本指針

- 協働事業提案制度モデル事業(ふらっとステーション2006年の応募)

➤ 2006年横浜市基本構想

➤ 2009年市民活動支援センター

➤ 2011年地域で支えあう社会の構築を促進する条例

➤ 2012年横浜市市民協働条例

それで、ちょっと飛ばしましたがけれども、上の画面は協働ということで、あなたとわたしと対等の立場で付き合いますよ...行政と市民が同じ立場で付き合いますよということで、ずっと進んできたんですが、横浜市でエリアマネジメントということが、色々話題になってきました。エリアマネジメントって何?...エリアっていうのは地域でしょ、マネジメントは運営していくことだから、市民主体の地域運営をこれからはじめていくほうが良からうじゃないか。市民は地域の課題を見つけ横浜市はそれを応援し、後ろから支えていくことが良いのではないかと横浜市は提案をして来ました。私たちも地域運営協議会というのを改めて創りました。

行政と市民が同じ立場で、同じ目線で、同じ地域課題を見つけていこうというのが、協働事業ですが、一歩進んで地域運営協議会は、地域の課題は市民がを見つけ、行政は後押しをしていこうという取り組みです。

ドリームハイツ地域運営協議会

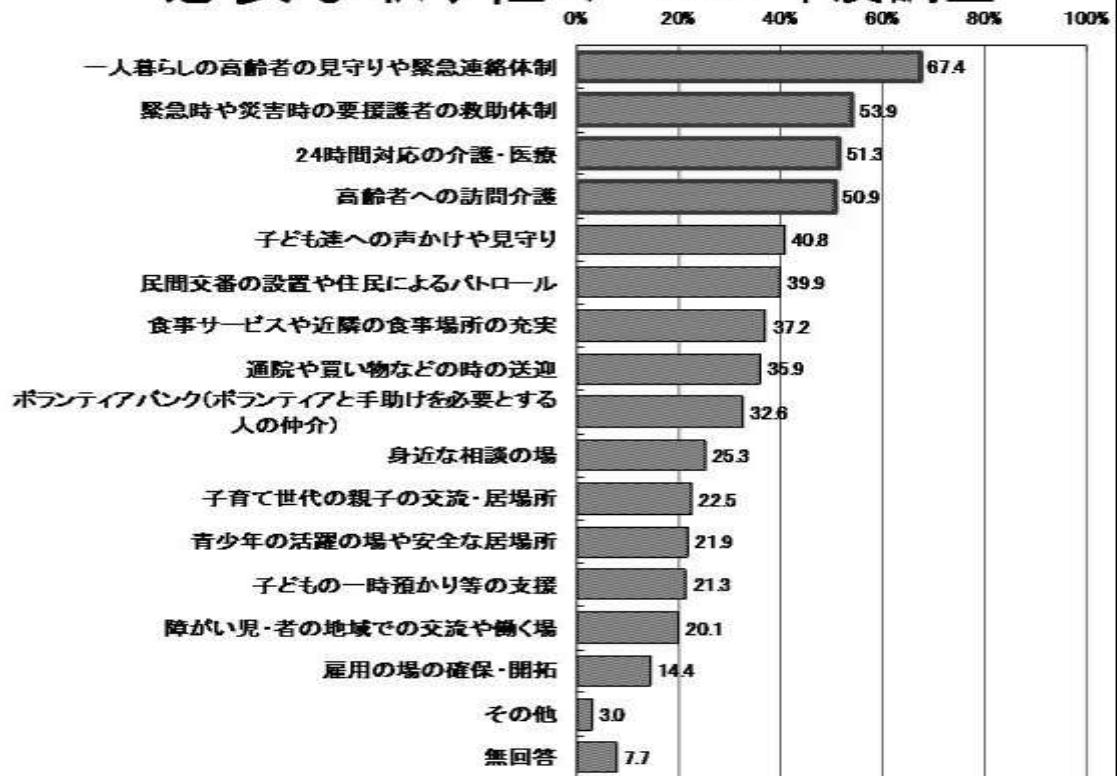
- 2007 ドリームハイツ
地域運営協議会発足
横浜市 モデル地区に
- 自治会、NPO、市民活動団体他7団体
- 地域活動の輪で
地域の「困った」を解決



協働事業から一歩進んだ
市民主体の地域運営

横浜市として初めての取組

必要な取り組み 2007年度調査 n=2,065



時代の変化

- 行政だけが公共的課題を担えばよい時代の崩壊

- ・縦割りの行政サービスでは満足できない
- ・課題の多様化
- ・財政的な変化
- ・地域の状況に応じて解決を図る必要がある

制度の代
替でない
変化

新しい公共の実現

誰でもが住みなれた地域で安心・安全な社会を創る
ためには、何が必要か・・住民と行政がどう取り組むか
地域運営協議会の役割は？

次は時代の変化です。時代が変化していった、いままでのように行政が縦割りで地域住民にサービスすることは不可能になってきています。行政だけが公共的課題を担えばよい時代は崩壊してきています。これからも縦割りの行政サービスでは満足できない人がどんどん多くなっていくでしょう。それには、地域では何が必要か、地域の課題は何かっていうことを、一つひとつ考えて、新しいサービスを作り出していかないといけないだろうということです。

地域包括ケア

介護保険等の制度上のサービス
医療・看護・介護

・ 地域ごとの課題発見



足りないサービスの創出

地域の実情に応じた課題解決のための事業

多くの人が自分の時間を割いて参加する

独居高齢者に対する見守り、
配食サービス、移動サービス、
生活援助、緊急対応、話し相
手、安否確認、障害者の雇用
支援、子育て・子育て支援



・行政からの支援
・市民と協働で
事業を進める

よくお聞きになると思いますが、地域包括ケアがこれから始まりますけれども、地域包括ケアっていうのは、全部地域をまるごと支えて、その中で色々なことをやっていきましょう、ということです。で、この絵の中の青丸の中にあるのが介護保険等の制度上のサービスです。制度上のサービスは、いま介護保険は要支援1～2、それから要介護1～5まであります。いま厚労省が考えているのは、その軽い方をカットしちゃうということを考えています。介護保険は介護度の重い人、要するに身体介護だけを介護保険にしようという、これから何年か後にはそうなると思います。で、そうなってくると、ポイされちゃう人たち。元気のように日常生活の自立ができていない人のサービスを地域でやっていかなければならない。そう思いますね。そういうことで、地域ごとの課題を発見しましょうよと。そして、足りないサービスを創出していくことです。それには多くの人達が自分の時間を割いて参加することが必要。ここにある独居高齢者に対する見守り、配食サービス、移動サービス、等々こういうサービスがこれから必要ですよということです。

地域交流室（2009年12月スタート）

深谷台小学校の空き教室の活用

1. 地域運営協議会事務スペース
2. 地域の会議室
3. 見守りネットセンター
4. 学校と地域との交流拠点

教育委員会、学校長の理解を得ること
「教育用資産」であることをわきまえて利用すること

23

で、次は地域交流のお話です。ここで何をしているかという、地域運営協議会の事務スペース、地域の会議室、学校と地域の交流拠点、見守りネットいうところを作り上げて、活動しています。初めに安心カードを作って全戸に配布しました。

見守りネットセンター

環境の整備その1

- ・ 高齢者・障害児・者の見守り
- ・ 見守りネットセンターの設立
- ・ 小学校の余裕教室の活用
- ・ 安心カードの
作成と配布

The image shows two forms. The one in the foreground is titled '安心カード' (Anshin Card) and contains fields for '氏名' (Name), '住所' (Address), '電話番号' (Phone Number), '緊急連絡先' (Emergency Contact), and '備考' (Remarks). The second form behind it is titled 'お住まいの環境整備' (Residential Environment Improvement) and contains fields for 'お住まいの状況' (Residential Situation) and '備考' (Remarks).

いざという時役に立つ「安心カード」
安心カードに記入なさいましたか！
急病の時、災害時に、
身を守るため、ぜひ
携帯してください

24

見守りネットセンター

環境の整備その2

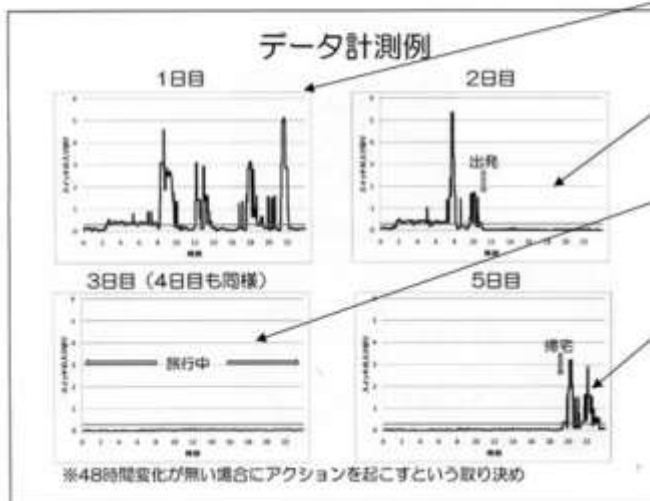
- ・ 電力消費による見守り
- ・ 緊急通報による見守り

普段は電気を点けたり消したり電気の消費の波は大きくなったり小さくなったりする

旅行や、急病などで電気を使用しないと電力消費の波は小さくなる

旅行中の電力の波は、ほとんどなし

帰宅すると電力消費の波は大きくなる



次に、見守りネットセンター環境の整備その2というのがありますが、これは消費電力による見守り制度です。消費電力...電気を使わない家庭はありませんから、電気を使う量をグラフにするとこういう山ができあがります。その山を高齢者の福祉に役立つのではないかと思っていた東京電力中央研究所、色んな電力会社の人が集まっている研究所というのがあって、そこでこのシステムを作りました。研究している方々は、皆頭の良い人が集まっているから、すぐそういうものを作りますけど、どこでそれを使えばいいかわからない。それを私たちは乗ったわけです。ここは、日頃電力を使っているところのグラフ。

で、朝起きたのが何時...これが朝起きた時間ですよ。そして、旅行に出かけちゃったら山は動かない。うちにいないと電気はこんなに動いてない。帰ってくるとまた動きましたよ、と。こういうシステムです。それをここでやっています。



お話の中で、これだったら導入しようと考えたのは、孤立死。亡くなってから6ヶ月も見つからなかったとか、骸骨になってたとか、臭いがして大変だとか、あちらこちらで聞こえてきて、ハイツの中でも孤立死というものがありました。その孤立死になった方っていうのは、50代の男性なんです。自分は元気、だから地域とは付き合わない。どことも付き合っていなかった。自治会にも入っていないし、隣近所とも付き合っていないし、そういう人って、心臓が止まっていたって誰も気にしてくれないんです。...あ、そうだ、その方新聞もとっていない。で、亡くなってから何ヶ月か経って見つかった。そういう人をここでは見たくない。



その次に、その研究所の人達との話し合いの中で、これだったら、亡くなってから何ヶ月か経って見つかるのが短くなるだけじゃないの、と。一日二日とか、そのくらい。そうじゃなくって、具合が悪かった時には、誰かを呼びたいといった時には、緊急通報ボタンをあったらもっとよいでしょう。緊急通報ボタンも作っていただきました。その緊急通報ボタンが、ここに見本がありますが、押してみてください。（...音が鳴る...）いま緊急だよって、誰か来て・・・って。このボタンは自宅にあるんですね。これは見本だからここにありますが。それぞれの手を挙げた方たちの自宅に

それをつけています。この機器の中には PHS が入っています。サーバーのところへ飛んで行って、ここに飛んできて、そして、私の携帯に飛んできます。もう少し経って鳴ると思います。（...音が鳴る...）いまなったのがこういうのです。「緊急事態の通報がありました。大至急対応をお願いします。モニターの誰々さん。電話番号はこれこれです」で、電話をかけます。電話をかけて、間違っって押すときもあるんです、（電話で確認して）間違いなら行きませんし、一人暮らしの方だなどと思った時に出なかったら、留守にしているか倒れているか・・・です。で、これをつけるときに、きちっとその方に情報をいただいています。鍵はどこに預けてある。緊急連絡先はここだとか、そういう情報を細かくいただいています。鍵を私たちが預っていることもあるんですが、鍵を預っているところに行って鍵を開けてもらって対応します。いままでに三回ありましたね。一回はね、つり戸棚の角に頭をぶつけて血が止まらないっていう通報です。結局動脈が切れていた。それで、私は移動サービスの車を頼み医療センターに同行し、手術していただきました。そのままにしていたら出血多量でしょ。危ない所でした。

救急車を呼んだこともありました。でもこれはまだテストです。実証実験をしています。もっと詳しくお話したいのですが、ランチの 20 分前には終わるよということなので、次に行きます。

エリアマネージメントのこれから

- 住宅、施設は看とりの場になるか
(特養・老健・療養型の3施設)の待機者
- 在宅での看取り(24時間365日のサービスへの期待)
- 子育ての環境、悩み、
- 障害者の日常生活、就業
- 地域支援事業……足りないサービスの創造
- 現世代から次世代へ、次世代から三世代への引き継ぎ

地域福祉の妙味

住宅や施設は看とりの場になるか、もちろんグループリビングは看とりの場になると思っています。特養、老健、療養型の待機者の多いこと。在宅での生活は心配なのですね。

これから在宅の見取りも 24 時間 365 日のサービスがあれば、またこういった研究があれば大丈夫かなと思っていますが、制度上のサービスと、インフォーマルなサービスを組み合わせればね。

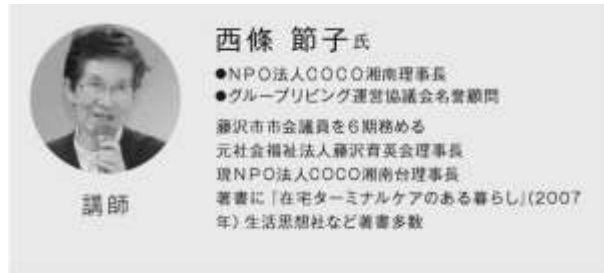
子育ての環境や悩みも色々あります。障害者のこともある。地域支援事業のこれからのこともお話ししたい。色々お話ししたいことは山ほどありますが、地域福祉っていうのは、係れば係るほど深みにはまり、すこぶる妙味かな・・・ということですね。

まあやっている本人一寸辛いことですが、やっぱり地域全体が幸せで、ここで生活できて、そして自宅で皆さん穏やかなお顔で天国に行く。人生の最後がこのようだと、それが一番幸せかなというふうに思います。20分で終わります。ありがとうございました。



II COCO 湘南台見学会

1 自立と共生の暮らし



皆さんこんにちは。顔なじみの方が多いですけれども。私は喋りだすと長くなるので、時間を見ながら話したいと思います。皆様は午前中から大変お疲れだろうと思っています。

私は今まではグループリビングをどういうふうにしたかということはずっと話してきていたわけです。いま全国で作ろうという兆しは出てきています。一方現実を見ると自殺する方が3万2千人とか孤独死とか色々問題がどんどん出てきてしまって、グループリビングの作り方なんて呑気な話をしている時代じゃない感じがしております。

私をご存知のように1990年4月にここをオープンして、私と犬と猫と一緒に入って来て14年目。その時は70歳ですから、地域の交流に大変駆けずり回ったという経験があります。ちょっと歳を言っちゃったけれども(笑)いま地域の方が大変高齢化をして家族関係も良くないとか、一人で住んでいて苦しいというお電話が夜ありまして、この頃声が出なくなるくらいあります。それくらい深刻なんだと思います。私はそういうときに、こういう協議会ができて大勢の皆さんが、そして若い皆さんが、「地域力でやっついこう」という気運を見ることができるといことは大変嬉しいし、励みになって、もう少し私も見守りながら生きるかなって思っております。

そして、COCOと同じにできなくても、空いたアパートを借りて、あるいは買って改造してもいいし、農家を買ってそれらしい風土にあった住まいを作ってもいいし、色々工夫して出来ると思います。COCOをご覧になった後、えーちょっと私たちには...っていうふうになっちゃうでしょうが、運が良くてできたのです。

最近の話ですが神奈川県では高級住宅街に高級ホームがたくさんできて、そこに男性群は年金が高いから結構入って行って、その男性が「ここに入っていたら死ぬのが早いんじゃないか。コンクリートの中で、そこが街ではたまらない」ということで五人の男性が知恵を集めて飛び出す計画をしたそうです。で、どうしたのかって私も訪ねましたらアパートは6軒空いている...五人で共同出資してアパートを借りて、一部屋をコミュニティルームにして、そして五人で組合みたいなのを作って住み始めて、5年元気でやっていらして、「こんなにいいことなかった、あんな高いお金出して素晴らしいところに入ったけれども、死ぬところだった!!」なんて喜んでます。

質素でも、どこであっても、心通った本当に元気が出る暮らし、それを私たちは狙っているわけです。そんなこともありましたけれども、とにかくこの機会に、こうやって縁があって集まって、熱意があって集まって、その皆が輪をつないで、そして助けあって知恵を出しあって、そしてどんどんと地域力で作っていく以外には国を当てにしているはいけません。そういうことで、今日は元気が出る会にしていただきたいと思います。今後ともよろしく願いいたします。



NPO法人COCO湘南

理事長 西條節子

私たちも暮らし始めて14年目、年齢の差を乗り越えた学び合い、支えあいを実践しながら、この暮らし方を検証していこうとしています。

ご家族がいる、いないにかかわらず、地域の方々の中で住民の位置を得て生活者が生き活きと暮らしていくことが介護予防に大きくつながる事を発見しました。また息子さん娘さんがおられる場合にも、ご自身の自立がお子さん方の自立を促すことにつながり、お互いの安心と喜びをわかちあう友好関係を築いていくことが出来ていることも発見しています。

1) 現状分析

社会状況は見渡す限り

- ・孤独死＝孤立死が増加 現在孤独死年間3万2千人
- ・自殺 3万人を超えている状況であり、年齢を問わず、不幸せ時代に入りこんでしまった。(高齢者に限らず)
- ・子供の貧困率 ユニセフの報告によれば、先進35ヶ国中、日本は悪い方から9番目と言われている。

つまり現状は子供も高齢者に対しても人権、つまり1人ひとりのいのちに対して政策がゼロに近いこの日本なのであることは既にご承知の通り。

2) NPO, 各市民は現況の認識をはじめて来て、地域とグループリビングを市民力、地域力で開こうとしています。

3) COCO湘南で1996年16人の男女の研究者の中に私も一員としていま

ました。友人と犬と猫とでCOCO湘南台に移動し、皆さんと暮らして14年になりました。そこでみえてきたことは10人10色の出生、地域性、学歴、異なる生活者同士が教師のように第三の人生を後押ししてくれています。

4) 家族の各々の自立

5) 自助共助 抜けている公助や市民生活の実態を把握してない政府各省の細かい規制好きに驚きながらも、私たちは次に進まなくてはならない。

2 地域へ開くグループリビング

—NPO法人COCO湘南のグループリビングの取り組み—



講師

土井原 奈津江 氏

- 慶應義塾大学SFC研究所上席所員(訪問)
- グループリビング運営協議会事務局

1級建築士・福祉住環境コーディネーター
鹿島建設株式会社建築設計本部を経て
慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科
後期博士課程在学中

グループリビングとは



- 高齢期の自立支援や生活支援などを目的として比較的元気な高齢者が自発的、自主的に助け合って暮らす住まい
- 規模は10人程度
- 制度上で決まりがないため運営主体、サービス提供、ルール、建築計画には様々な形態がある。

まずグループリビングについてご説明します。高齢期の自立支援や生活支援などを目的として比較的元気な高齢者が自発的、自主的に助け合って暮らす住まいです。規模は10人程度です。グループリビングは現在市町村の実施する「地域支援事業」の任意事業として位置付けられていますが特に運営主体、サービス提供、ルール、建築計画など制度上で決まりがないのでグループリビングによって様々な運営の形態があります。

高齢者バリアフリー研究会発足 (1996年)

問題意識

高齢者に対する国や自治体のサポートはあまり期待できない

核家族の時代に家族の支援は当てにできない

特養等の施設は待機者が増えて、入居できたとしても生活の中に自己選択の余地がない

施設や病院を転々としながら老いたくない。タライまわしで挫折を負い、自己完結したくない。

女性の厚生年金や遺族年金で入れる価格の住まいが必要

私たちの高齢期は私たちが作っていく以外ない！

地域力、市民力で何かできないか！

お互いの尊厳を守り合いながら地域のなかで生きていける生涯型の住まいを目指そう！！

次に NPO 法人 COCO 湘南の経緯をお話しします。COCO 湘南の原点となったのは 1996 年から始まった高齢者バリアフリー研究会でした。高齢者バリアフリー研究会は神奈川県藤沢市で市会議員を 6 期 24 年務められた西條節子さんとその仲間によって作られました。メンバーは医療、介護関係者、大学の先生、建築家、市民活動家など様々な専門家を集めて行われました。当時は「金なし、土地なし、あるのは知恵だけ」という状況でした。毎月 1 回研究会を行いました。最初は高齢社会の問題について話し合いました。問題意識としては「高齢者に対する国や自治体のサポートはあまり期待できない」「核家族の時代に家族の支援は当てにできない」「特養は待機者が増えて、入居できたとしても生活の中に自己選択の余地がない」「ケアハウスや病院等を転々としながら老いたくない。タライまわしのうちに挫折を負い、自己完結したくない。」「女性の厚生年金や遺族年金で入れる価格の住まいが必要」等でした。最終的に行き着いたのは「私たちの高齢期は私たちが作っていく以外ない。地域力、市民力で何かできないか」と「お互いの尊厳を守り合いながら地域の中で生きていける生涯型の住まいを開発していくことになりました。

NPO法人COCO湘南 経緯

年月	経緯	
1996年5月	高齢者バリアフリー研究会発足	COCO湘南台 
1999年4月	COCO湘南台 開設	
1999年7月	NPO法人認証	COCOありま 
	NPO法人COCO湘南 誕生	
2003年7月	COCOありま 開設	COCOたかくら 
2006年4月	COCOたかくら 開設	
2008年4月	COCOみちしるべ 開設 全国高齢者生き生きグループリビング支援事業開始	
		COCOみちしるべ 

高齢者バリアフリー研究会を始めて1年目がたったころから地主を探し始めました。後程ご説明する運営のビジョンを持って土地を探し、そのビジョンに賛同してくれた人から土地を借り、建物を建ててもらうことになりました。「金なし、土地なし」でしたが土地建物を一括借り上げ型で構想を実現することができました。3年間の高齢者バリアフリー研究会の結果、1999年COCO湘南台、2003年にCOCOありま、2006年にCOCOたかくらと3つのグループリビングをつくりました。2008年にはCOCOみちしるべという地域交流施設をCOCO湘南の隣地に開設しています。

運営のビジョン

1. 「自立と共生」の高齢者住宅
2. 共同運営と分担
3. 地域とともに生きる
4. 健康に生きる
5. 元気印の発信基地

次に COCO 湘南の運営のビジョンです。高齢者バリアフリー研究会でまとめられた運営のビジョンは5つの柱で構成されました。

これらをどのように実現しようとしているかについてこれからお話いたします。

1. 「自立と共生」の高齢者住宅

「自立」とは

- 1人の人間として自己選択、自己決定すること。また人の自己決定も尊重すること。

(自立とは食物摂取の行為や歩行、着脱などが出来ることではなく身体的自立はできなくても最後まで自己決定できること。)

「共生」とは

- 地域住民として地域の中で協働していくこと。
- 住まいの運営に参加すること。
- 生活者同士が助け合うこと

5つのビジョンの1つめは「自立と共生」の高齢者住宅です。「自立と共生」はCOCO湘南の理念となっています。「自立と共生」といってもいろいろな捉え方がありますがCOCO湘南の考える「自立」とは「1人の人間として自己選択、自己決定し、人の自己決定も尊重すること。」です。ここでの自立は一般的に使われる食物摂取の行為や歩行、着脱などが出来ることではありません。逆にいえば身体的な自立はできなくても最期まで自己決定できれば「自立」として考えています。また「共生」とは地域住民として地域の中で協働していくこと。住まいに運営参加することや生活者同士が助け合うことです。

2. 共同運営と分担

「参加型の運営」

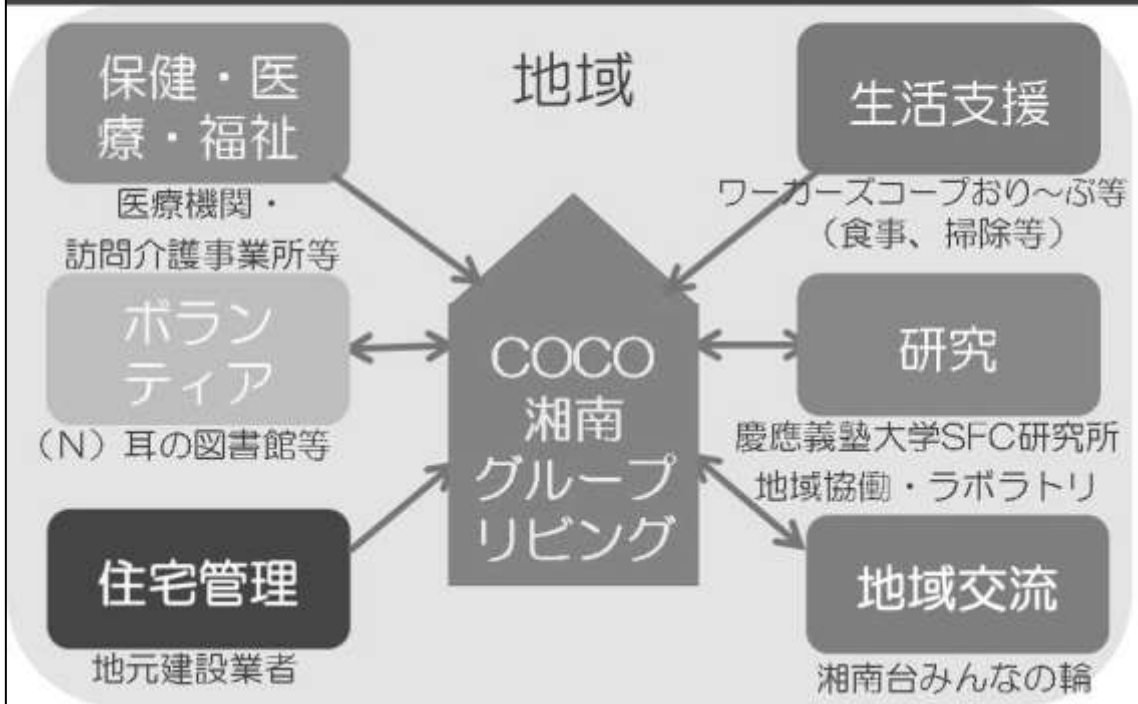
- 運営に生活者が参加
- 生活者主体の立場で話し合いを行う
- 生活者がルールを作り、役割を果たす。

「共同出資」

- 土地、建物の借り上げ料に対し家賃を支払うこと
- 生活支援サービス料や共益費に対し料金を支払う

次に2つ目のビジョンは共同運営と分担です。これは大きく2つのことを示しています。1つは参加型の運営，2つ目は共同出資の運営です。参加型の運営は生活者が運営の話し合いに参加し意見できること。また生活者がみんなでルールを作り，作ったルールにそって役割を果たすことです。共同出資は住まいの対価や家事サービスなどの対価を払っていくことです。

3. 地域とともに生きる



3番目のビジョンは地域とともに生きる、です。スライドはCOCO湘南と地域とのネットワークについて示しました。COCO湘南は医療、福祉や生活支援などさまざまな機能を地域から選択できる多機能な住まいです。支援をどこから調達するかは生活者それぞれ、あるいは生活者が全体で選択し決定します。また地域交流、研究、ボランティアに関しては双方向で行っています。地域資源と提携し協働することにより幅広い地域の人との交流が広がります。また支援事業者に対し、意見し選択していくことで地域資源の体質が強くなり、よい支援の競争力も高まります。そうすると支援を受ける側のメリットが大きくなり、さらに選択の自由度が増して来ます。例えば開設時食事づくりは他の事業者から半調理品が運ばれ、生活者が分担して食事作りをしていましたが当番制だと生活者から自由な時間がなくなると言う声が出て生活者の話し合いの結果、当時掃除だけに入っていたワーカーズコープおり〜ぶに食事作りをお願いしたという事例があります。これは生活者が暮らし方に対し意見を言い選択したという実例です。また当時8人だったおり〜ぶは現在30人を抱えるグループになり地域の中で活躍しています。昨年COCO湘南でターミナルケアを行いました。それを機におり〜ぶは流動食、介護食を始めるなど仕事の範囲を増やしました。これらは地域にとっても役に立つことです。

生活支援

◆食事

(夕食づくり)

ワーカーズコープおりーぶ

(昼食・配食)

NPO法人暮らし・環境・再生

◆掃除（共用部分）

ワーカーズコープおりーぶ

◆細々とした支援

ライフサポーター

(宅配便の取り次ぎ、
医療・保健・福祉
ネットワークの取り
次ぎ、雑務等)



次に COCO 湘南の生活支援をご説明します。生活支援はまず夕食はワーカーズコープおりーぶに所属する地域の主婦が毎日 1 人で COCO 湘南のキッチンで夕食をつくります。毎日同じ人ではなく 6 人交代で行っています。買い物から食事作り、配膳、下膳まで担当します。昼食は NPO 法人暮らし・環境・再生がお弁当を配食しています。朝食は生活者が自分で用意をすることになっています。掃除は夕食づくりと一緒のワーカーズコープおりーぶがしています。週 3 日 9:30~11:30 まで 2 人で行っています。また生活者の生活を側面から支えるライフサポーターというスタッフがグループリビングの中にいます。平日 11:00~18:00 まで住まいの中で生活の細々とした支援、例えば電球の付け替えや宅急便の取り次ぎ、医療・保健・福祉ネットワークの取り次ぎなどを行っています。

4. 健康に生きる

保健・医療・福祉

機関と連携

- 研究会立ち上げ当初からネットワークを広げる
- 理事会に医療・介護事業の関係者を入れる

その他

- インフルエンザや熱中症などの予防のための情報提供
- バランスのとれた食事
- 共同生活での刺激

4つ目のビジョンは「健康に生きる」です。高齢期にはとりわけ大切なことですが、地域の保健・医療・福祉機関と連携しています。この連携は研究会立ち上げ当初からネットワークを広げてきました。また住まいの中では法人事務局やライフサポーターが健康関連情報を提供しています。例えばインフルエンザや熱中症などの予防のための情報を伝えたり、対策をとることなどです。またバランスのとれた食生活を送ることや共同生活での刺激も健康に生きることに繋がります。

5. 元気印の発信基地

湘南台
みんなの輪

介護予防型
デイサービス

コミュニティ
リビング研究会

「自立と共生」
の理念を実現す
るための生活者
主体の住まい方
を研究

グループリビン
グ運営協議会

グループリビン
グの普及と既存
のグループリビ
ングの運営に対
する支援活動

5 番目のビジョンは元気印の発信基地です。COCO 湘南では 3 つの活動をしています。湘南台みんなの輪では介護予防型デイサービスを行っています。次にコミュニティリビング研究会も最初に立ち上げた高齢者バリアフリー研究会の流れをくみ「自立と共生」の理念を実現するための生活者主体の住まい方を研究しています。次にグループリビング運営協議会はグループリビングの普及と運営に対する支援活動を慶應大学 SFC 研究所地域協働ラボと協働で行っています。HP の運営やワークショップを行っています。これらの 3 つの活動は地域の人と生活者が一緒に行っています。以上 5 つのビジョンを説明しました。

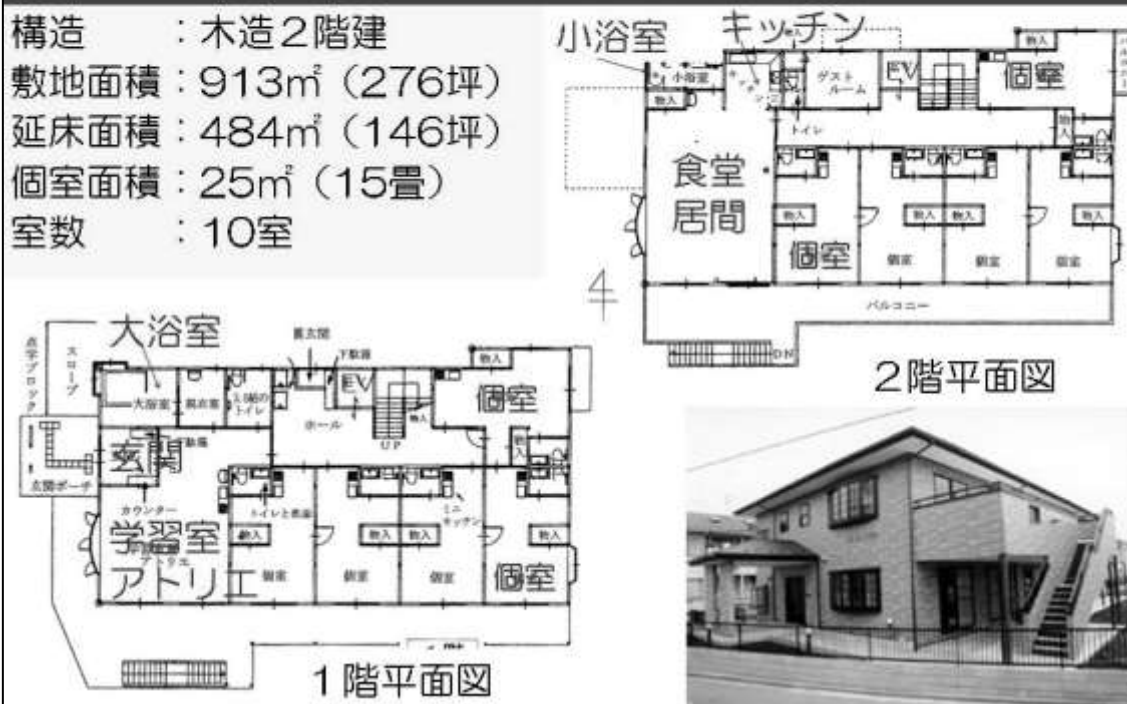
共感・協力の場



次に COCO 湘南とはどういうところかについて、お話ししたいと思います。COCO 湘南台は自由気ままに暮らせる高齢者住宅がなく困っていた人達が自分たちの暮らしたいように作った住まいです。自分たちで作ったので自分達のしたい暮らしを作り、利用しやすい価格で設定しています。自分たちの生活の変化に伴ってサービスを柔軟に変更することも可能なように作っています。自由気ままに暮らせる住まいに共感したスタッフやボランティア、さらに外部組織が協力して運営されています。生活者も共感しているので生活者がボランティアとして協力することもあります。このような場には双方向性があります。COCO 湘南の特徴は住まいと暮らしを生活者を含む法人がマネジメントし、地主や生活支援サービスの事業者が協力しサービスを提供しています。ニーズに応じたサービスを提供し共感する人達を地域に増やしていくことでコミュニティを形成しています。COCO 湘南のグループリビングは、暮らしのニーズを実現化させることで、コミュニティビジネスを生んでおり、コミュニティビジネスの起爆剤のような存在になっています。

建物概要

構造 : 木造2階建
 敷地面積 : 913m² (276坪)
 延床面積 : 484m² (146坪)
 個室面積 : 25m² (15畳)
 室数 : 10室



次に建物概要についてご説明します。高齢者バリアフリー研究会ではまず箱モノから考えるのではなく、どのような暮らし方をしたいか、その暮らしをするためにはどのような建物がいいかを詳細に話し合いながら時間をかけて建物の設計をしました。個室は最低でも 25 m²欲しいね、とか、お風呂が個室の中にあるとこもってしまうので共用部分に出したほうがいいね、とか、1日のうちに1階の人は必ず2階に食事に行き、2階の人は必ず1階にお風呂に入りに行けば少しでも運動になるね、などでした。こうして出来たのが COCO 湘南の建物です。共用部分は建物の半分のスペースになっており余裕のある空間になっています。床段差なし、エレベーターは車椅子と介助者 1 人が乗れる大きさになっており完全バリアフリーの建物になっています。居間食堂、大浴室、脱衣室は床暖対応になっています。また敷地の約半分は家庭菜園や花壇になっています。そこでできた野菜を近所に分ければ地域交流ができるということで土地の大きさを決めました。

グループリビングの意義

家庭的な雰囲気

- 住宅のたたずまい
- 主婦が作る家庭料理が味わえる。

安心

- ルールはあるが自己選択に基づく自由な暮らしができる
- 少人数なのでお互いに顔や性格、心身状態が把握できる

合理的なコスト

- 必要なサービスだけを買うために無駄がない。
- 営利事業ではないため民間等に比べコストを安くできる。

地域共生

- 地域の中のサービスを向上させる
- 生活者と地域との交流を支援し促進する。

次にグループリビングの意義について4つあげます。1つは家庭的な雰囲気です。住宅のたたずまいを持ち、主婦の作る家庭料理がいただけます。2つ目は安心です。ルールはあるが自己選択にも基づく自由な暮らしができること。また少人数なのでお互いに顔や性格、心身状態が把握できることです。3つ目は合理的なコストです。必要なサービスだけを買うために無駄がなく、営利事業ではないので民間に比べコストが安くできます。4つ目は地域共生です。地域の中のサービスを向上させることができます。また生活者と地域との交流を支援し促進します。

COCO湘南をベースにした グループリビングの拡がり

2006～2011年に
開設した全国16件の
JKA補助の
グループリビング

広島県東広島市
グループリビング 明日への風
つむぎ
(N)地域福祉活動支援協会

佐賀県鳥栖市
エーデルハウゼ桜
(N)ひかり

熊本県熊本市
グループリビングさくら
(社福)諒和会

沖縄県糸満市
グループリビング千寿
(社福)千寿会

北海道登別市
たすけ愛の家
(N)いぶりたすけ愛

京都府向日市
メン向日葵
(社福)みやこ福祉会

兵庫県高砂市
でのひら
(N)でのひら

和歌山県和歌山市
あいの里 生き生きグループリビング
(社福)安原福祉会

奈良県奈良市
あやめの里
(社福)秋篠茜会

北海道釧路市
ほがら館
(N)わたぼうしの家

山形県米沢市
COCO結いのき・花沢
(N)結いのき

福島県福島市
高齢者生き生きグループリ
ビング モーニング
(社福)福島福祉会

千葉県成田市
グループリビングももとせ
(N)住まい・まち研究会

埼玉県新座市
えんの森
(N)暮らしネット・えん

神奈川県藤沢市
COCO湘南台
(N)COCO湘南

神奈川県藤沢市
COCOたかくら
(N)COCO湘南

COCO 湘南台のようなグループリビングは意義があると財団法人 JKA が 2006 年からグループリビングに建設補助を始めました。この事業は 2011 年で終了いたしました。2006 年から 2011 年までに沖縄から北海道まで全国に 16 件できています。

最後にグループリビングにご興味のある方は HP に活動レポートなどを掲載していますのでご覧ください。それではこれで発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。

NPO 法人 COCO 湘南

<http://www.coco-shonan.jp/>

グループリビング運営協議会 GLnet

<http://glnet.sfc.keio.ac.jp/>



3 ワーカーズコープ・おり～ぶの取り組み



青木静恵 氏

- ワーカーズコープホームヘルプ・おり～ぶ理事長
- 湘南台みんなの輪代表

1999年ワーカーズコープ・おり～ぶ設立
 2002年せいきょう委託ヘルパー事業開始
 2004年COCO湘南台で食事作り開始
 2012年みんなの輪（藤沢市高齢者生きがい対応型デイサービス事業）開始

講師

それではサポート隊として、14年間の流れを、きっかけから現在までのお話をさせていただきます。まず、年表からなんですけれども、先程西條さんのお話にもありましたけれども、1999年から4月にここが立ち上がりました。

年表		
西暦	経緯	組合員
1999年	設立。COCO湘南台の生活サービス(掃除)とイベントのサポートを始める	15
2002年	コープかながわ委託事業登録 独自ヘルパー事業開始	
2004年	COCO湘南台の食事づくり開始 ホームティーチャーター事業開始	33
2006年	COCOたかくら開設に伴い、受託事業拡大	
2008年	「COCOみちしるべ」で軽食を始める 地域向けホームヘルパー事業拡大	30
2009年	おり～ぶ「キッチン」、「メンテ」に分割 10周年記念事業「上野千鶴子講演会」開催	29
2010年	みちしるべ内に事務所開設	
2011年	ホームヘルプサービス事業独立	29
2012年	ホームヘルプが藤沢市地域住民グループ支援事業「みんなの輪」開設	

経緯 掃除からの出発

井之川平等さんから掃除を頼まれた。

「家のようにやればいいんだよ！」

掃除は丁寧にやれば何とかなりそう！

皆さんの特技を生かせる仕事も探していこう！

その時に私たちコープかながわで組合員活動をしておりまして、その中の一環で野菜作りをして販売する...無農薬の野菜を作って販売するというグループをやっていたんですね。そのところに、こちらの元 NPO 法人の常務理事でらっしゃる井之川平等さんが、一緒に野菜を作ってたんです。その方は、コープかながわの役員さんでもいらしたので、そういう関係もあって、最初からグループができているところにお声がけがあったんですね。そのときに、お掃除を COCO 湘南台ができるから、共用部分のお掃除をやってくれないかとお誘いがあったんですが、その当時私たちは掃除をする予定は全くなかったんですね。

スタッフの参加動機

みんながやるので、
やってみようかな。

ワーカーズの働き方
に関心があった。

グループリビングの
暮らしに興味があっ
た。

地域貢献がしたい。

掃除ぐらいただったら
できそうかな。

55歳からの主婦経験
者に向けた仕事を探
していた。

普通の主婦ですので、掃除はそれなりに、食事作りもそれなりに、やっておりましたけれど、お仕事として、掃除してくださいと言われた時に、青天の霹靂のような感じだったんですが、その当時、コープかながわのワーカーズコープを作る運動が盛んだったんです。それで、説明会の中で、おもしろそうねって感想が一番にあって、やってみないとわからないので、やってみましょうかっていうような、集まった野菜作りをしていたメンバーたちの...すみません、パワーポイントが不慣れなので、元に戻ったりしちゃいますけれど、それで、ワーカーズっていう働き方に関心があった人もいるし、グループリビングに暮らしに、私も初めてグループリビングって言葉そのときに聞いたと思いますけれど、その暮らし方にも興味がありましたし、中には地域貢献をしたいという方だったり、55歳から主婦経験を活かした仕事を探している者もいましたし、結局掃除ぐらいただたらできそうかなという皆さんの合意ではじまりました。

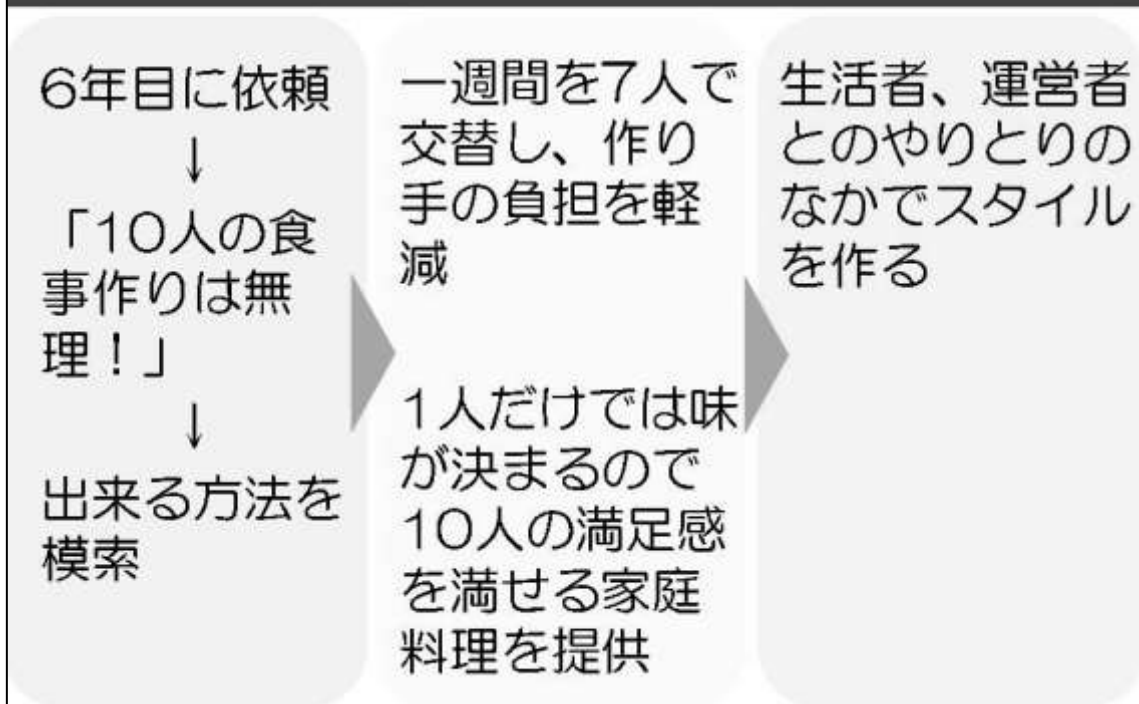
ワーカーズ コレクティブとは

ワーカーズ・コレクティブとは、雇う一雇われるという関係ではなく、働く者同士が共同で出資して、それぞれが事業主として対等に働く労働者協同組合のことである。

生活協同組合などを中心に、介護や育児など主婦としての経験を生かしてコミュニティービジネスを展開するワーカーズ・コレクティブが急速に拡大している。

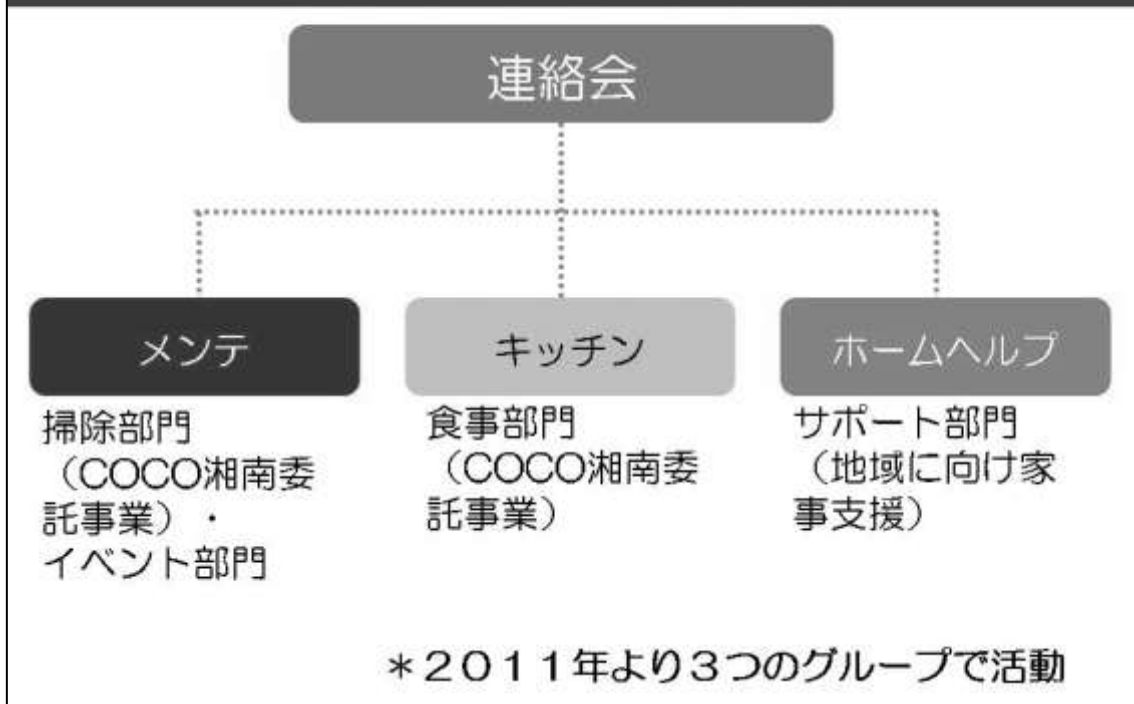
私たちはワーカーズ・コレクティブではなく、ワーカーズコープと呼んでいるんですけども、働く人同士が共同で出資して、そしてそれぞれが事業主として働くという、労働者協同組合のことなんです。ですので、皆さん出資して、仕事を分配...一ヶ月に一度定例会というものを行なって、そこで仕事を分配しております。最初はお掃除だけだったので、分配する手当てが少なく、美容院に一回行ったらもう無くなっちゃうっていうような事が言われてました。それで、お掃除をしている間に西條さんの方から食事作りをやってくれないかという、またびっくりするようなお話があったんですね。私たちは働く気がないものですから、びっくりしちゃうっていう反応なんですよ(笑)それで、とんでもない、10人の食事なんか作れないわよっていうような、大きな声でそういうことを言う方が、代表の方を先頭に、皆さんとんでもないと。家の食事だけでね、精一杯なのに、10人の食事って言ったら、どれだけ作ったらいいのというところからはじまったんですけども、それでも私たち美容院に一回の手当てでしたので、できれば仕事を増やしたいというふうに常々思っておりましたので、無理無理引き受けました。それで、やらない人はいいい、やらないで。その代わりに、出来る人を集めましょうと。そういうことで、湘南台地区にいる私たちのコープの組合員活動の仲間に声をかけて人を集めました。

経緯 食事づくり



それで、皆さん食事作りに自信があるので、一週間に一度がせいぜいなんですね。一週間に一度でしたら、準備もできるし、練習もできるわけですね。献立の練習をしたりとか。そんなことと、一人だけでは味が決まってしまうということもあって、十人十色とよく言いますが、好みがあるので、7人体制で一週間に一回ずつだったらなんとかなるんじゃないかっていうことで、はじめさせていただきました。これは夜のお仕事っていうこともあるんですね。16時から19時半までなんです、夕食。で、皆さん一番主婦だったらわかると思うんですが、一番大事な忙しい時間なんですよ。それを空けるということも、一週間に一度だったら家族の協力も得られるんじゃないかということで、そのような体制を採らせていただきました。それで結果的には皆さんに喜んでいただいているということなんですけれども、私たち最初からお話してますように、びっくりしてはじめた食事作りですので、失敗することも多かったんですね。10人の食事ってお作りになった方もいらっしゃると思うんですけれど、結局4人くらいの食事で作ってたので10人となるとちょっと違うんですね。倍にすればいいと、2.5倍すればいいというもんでもないんですね。失敗したりしますと、10人の方が慰めてくださったり、美味しい時には褒めてくださったりして、とても協力していただいて、なんとか続けて参りました。

グループの構成



いまワーカーズコープ・おり〜ぶの3つのグループに分けております。掃除部門と、それから食事部門と、それからCOCO湘南での仕事でノウハウを培うことができたので、地域向けのホームヘルプサービスをはじめさせていただきました。それで、ホームヘルプサービスで皆さんのこのCOCOの共有部分ではなく個人の個室の方のお掃除とお手伝いをさせていただきます。

COCO湘南での主な仕事内容と範囲

食事

(キッチンが担当)

夕食 1人 (7人交替)

16時～19時30分

(年始、おり～ぶ定例会を除いて毎日)

昼食

11時～12時30分

(土、日、祭日・その他必要に応じて)

掃除

(メンテが担当)

2人体制 (人交替)

9時30分～11時30分

(年始を除いて週2回)

それでは、次に COCO 湘南での主な仕事と内容と範囲をご説明します。食事はキッチンというグループで担当していますが、先程からお話が出ているように、夕食一人で16時から19時30分まで。年始又はおり～ぶの定例会が毎月一回ありますので、それを除いて毎日入っております。昼食は11時から12時30分まで、それで土曜日祭日その他ヒノハラさんっていうお弁当取っているところが休むんですよ、長く、そういうときに私たちが駆り出されてお昼を作っております。掃除はメンテというグループで担当します。二人体制で先程お話がありましたが、9時半から11時半まで、年始を除いて週2回行なっております。

地域に向けて ホームヘルプグループ事業

1. ヘルパー事業

- ・家事援助
- ・通院介添え
- ・その他
(話相手等)

2. ホームティー チャー事業

- ・講師派遣
(パソコン、
ピアノ、
書道、
絵手紙)

3. デイサービス 事業

- ・生きがい対
応型を藤沢
市から委託

それですね、新しく地域に向けてのホームヘルプグループ事業を立ち上げているんですけれども、ヘルパー事業として家事援助、通院介助、その他お買い物とかしております。これは介護保険外の仕事でやっております。ホームティーチャー事業というのは、いまメンバーにピアノの先生だったり、それはそれは特技を持っていらっしゃるの、あまりにももったいないので、ホームティーチャーとして外に派遣しましょうということを事業を立ち上げているんですが、パソコンが一番多くて、他がぼちぼちともいかないですね、いまはもう派遣していない状態です。それで3つ目に2002年の10月に生きがい対応型デイサービス事業というものはじめさせていただきました。

生きがい対応型デイサービス 2012.10から開始

問題意識

地域の繋がりが弱くなり、孤独な高齢者が増加している

高齢になると生活の質が落ちてしまう

当事者主体の自立サポートが少ない

動機

高齢者の自立を促進したい

高齢者の地域共生を促進したい

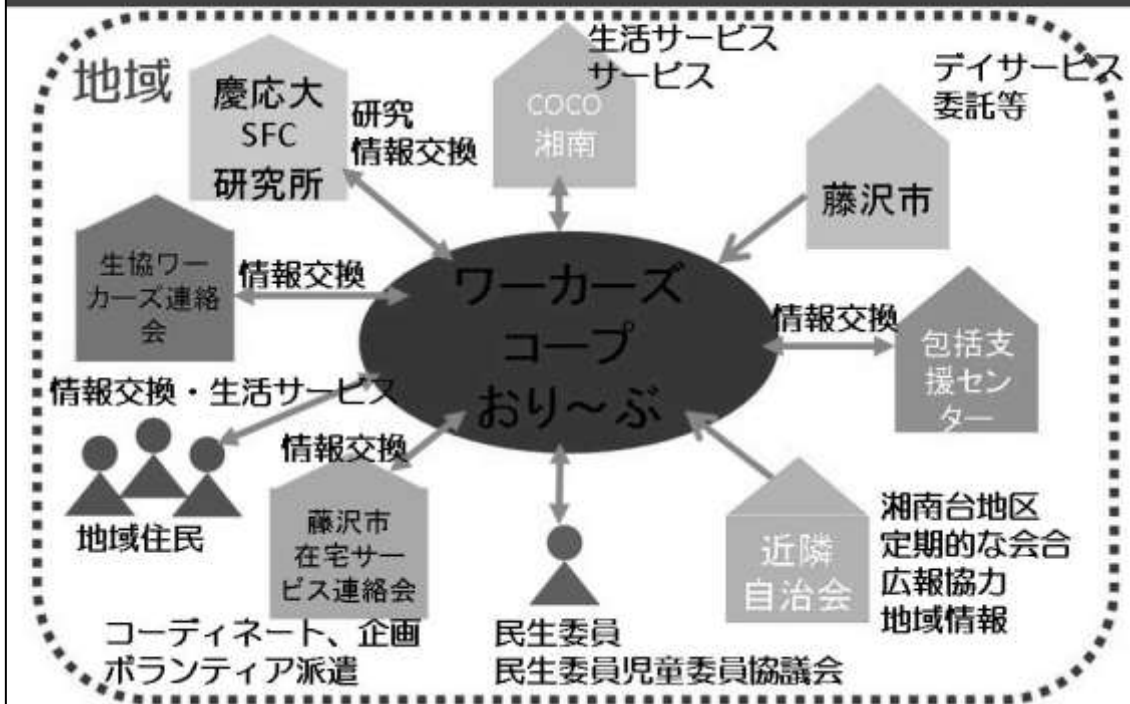
地域のネットワークを強化したい

藤沢市から委託をされて、COCO みちしるべの場所に、開かせていただいております。これは湘南台皆の輪というんですけれども、これは西條さんがどうしてもこれにしろと仰るので、私もいい案だなあと思って3つ程持っていったんですけれども、どれも却下されて、湘南台皆の輪がいいと仰られたので、そういうネーミングになりました。生きがい対応型デイサービスなんですけど、これは65歳以上の高齢者...ヤング高齢者ですね。ヤング高齢者の方々を高齢者の介護保険を使わない生活を、やりがいか、色々張りのある生活をしていただきたいということで、藤沢市の地域で13地区に順番に作られております。私どもは9番目で、一応競争があったんですけど、このパワーポイントのおかげで、めでたく委託されることになりました。2012年10月に開始しました。いま色々結構地域のたくさんの方が、利用されていて、また私どもおり〜ぶ自体も最初1999年4月の時は私も50歳だったんですけれども、15年経っていますので、そのとき60歳だった方がもう75歳になっているんですね。ちょうど、この生きがい対応型デイサービスにぴったりというメンバーばかりなんです。ですから、メンバーにはこちらを利用して...又、COCO 湘南台のお元気な方々が利用させていただいて、紹介から紹介ということで、いま46名利用いただいております。申請していただいております。

生きがい型デイサービス 概要	
実施予定日	週2回（火、木）
実施予定時間	午前10時～午後3時
利用予定人数	10人
予定会場	湘南台地区の地域交流スペース
利用料金	100円
昼食・おやつ	500円
利用負担金	600円

それで、この週2回水曜日と金曜日に10時から15時までいましておりますので、利用料金は100円、昼食をお召し上がりにならなければ100円で一日過ごすことができます。いま、こちらがお住まいの武井さんと仰る方がいらっしゃるんですが、その方がパッチワークを教えてくださいまして、それからCOCOたかくらというところにお住まいの熊澤さんという画家の方が絵を教えてくださいまして...。お絵かきとは絶対に言ってはいけない（笑）絵画教室をいたしております。あとで見ていただくと分かるんですけど、とてもユニークで楽しいお教室です。洋裁、編み物、それから俳句...この俳句がまたすごい楽しいんですよ、それを話すと長くなりますので、洋裁、俳句、それからコーラス、頭の体操なんかもやっていますし、それもお得意さんがいらっしゃるしまして、ここの建物の向かい側に住んでいるお一人暮らしの方が毎回来てくださって、俳句から...俳句もね、80過ぎて初めてはじめたんですよ。そういう方も、最初はとてもイヤダイヤダと仰っていたんですけど、お誘いして、今は本を読んで勉強してる。それぐらいパワーアップしてお元気になってるっていう嬉しい事例があります。

地域との連携



私ども地域との連携をさせていただいておりますが、このような連携ですね。藤沢市だったり包括...今日は包括の方もお見えいただいているようで、包括支援センターさんとか、近隣の自治会、それから藤沢市に在宅福祉サービス連絡会というところがあるんですが、そういうところとか、生協のワーカーズ、慶応大学の大江先生、土井原さんには助言とか色々お世話になっております。で、COCO 湘南の西條さんには大変お世話になっております。

おり～ぶ基本方針

1. 高齢になっても住み慣れた地域の中で、人々が助け合い、支えあえる地域社会づくりに貢献する
2. 地域の社会的資源として役立つ
3. 地域の交流の場づくり
4. アンチエイジングを目指す取り組み

一応おり～ぶの基本方針についてお話させていただきます。高齢になっても住み慣れた地域の中で人々が助け合い支えあう地域社会づくりに貢献する、すごいでしょ？貢献するんですから。それから2つ目、地域の社会的資源として役立つ。3、地域の交流の場づくり。4番目はなかったことにしてください、アンチエイジングを目指す取り組みなんて、そんなすごい大それたことを書いてしまってちょっと後悔しているんですけども（笑）、いつまでも若々しくいましょうねというような取り組みです。

今後の課題や展望

課題

メンバーの高齢化
50代が入らない

若い人達を増や
したい

今後の課題なんですけれども、先程もお話しているように、50代の方はもう60代...メンバーの高齢化ってということなんです。なかなかね、食事をね、いまウチのメンバーで食事作りに入っておりますけれど、先程土井原さんの説明にもありましたけれど、買い物から後片付けまで全部なので、それでうちのメニューといたら簡単なんです。煮魚に野菜の煮物、二行しか書いていないんです。それをふくらませるんですね。全部細かく書いていないんですよ。家庭料理ということなので、その方のセンスで全部作り上げるんですね。一品は自分で考えてお作りくださいというような、本当に大雑把な献立になっているので、とっても皆さん毎回宿題みたいな感じで作られていますね。ある方は、70代の方ですけれども、一週間かけて買い出ししてから自分で作って食べてみて、これは良くないなと思ったらまた違うやり方で、そんな風にして作ってらっしゃる方もいらっしゃいます。皆が皆そういう人ばかりではないですけども、そのようにして皆さん切磋琢磨して毎日作られているので、喜んでいただけているのかなあというふうに思っております。

私達を14年間支えてきたもの

- 住民の皆さん
- 西條節子さん
- 井之川平等さん
- おり～ぶの仲間
- 地域の皆さん
- コープかながわのワーカーズの仲間
- COOPかながわ
- 定年退職した夫
- 家族の理解

「サポートをしてくれてありがとう」という住民の皆さんと「仕事をさせて頂いてありがとうございます」の感謝の気持ちが私達を支えてきた

それでは最後になりますが、私達を14年間支えてきたものということで、「住民の」と書いてありますけれど、COCOにお住まいの住民の皆さんということです。あと西條節子さん、井之川平等さん、おり～ぶの仲間、地域の皆さん、コープかながわのワーカーズの仲間、COOPかながわにお世話になったり、それとこれが一番大事なんですけれど、定年退職した夫、これが一番大事なところなんです。（一同笑）本当にね、とにかく夜のお仕事なので、送り迎えとか買い物に付き合ってもらったりとか、それはそれは尽くしていただいております。あとは家族の理解というところですね。それで、私達たちが長く続けてこれたのは、住民の皆様が私達を育てようというお気持ち...。「サポートしてくれてありがとう」という気使いを私達にいつも見せてくださるんですね。私達も55歳以上になって、お仕事をさせて頂いている。「お仕事をさせて頂いてありがとうございます」



す」っていう感謝の気持ちが、私達を支えてきたのかなど。これは私達の場合です。サポート隊っていうのは、その場所に合ったサポート隊がやっぱり一番だと思うんですね。湘南台は、COCO 湘南台はこういうサポート隊を西條さんや皆さんと作ってきたということだと思っています。どうもご清聴ありがとうございました。

4 住人座談会

COCO 湘南台生活者

高橋 郁子氏

高坂 嘉代子氏

武井 キミ氏

司会 大江守之氏



〔大江氏〕

本日は居住者の方に参加していただいております。居住者の方に自己紹介をお願いしたいと思います。

〔高橋氏〕

研究会の時からいままで、16年間半くらいCOCO 湘南に参加しています。高橋と申します。

〔高坂氏〕

私はこちらに参りまして、今年の夏でちょうど8年になります。元気に生活しております。高坂と申します。

〔武井氏〕

私はここで3回お正月を迎えました。3年目になります。石の上にも3年といひます。楽しんでいきます。武井と申します。よろしくお願ひいたします。

[大江氏]

それでは 3 班に分かれて見学していただきましたが、ここでの暮らしについて色々伺いたいことがあると思いますので、限られた時間ですけれども、有効に使いたいと思います。ぜひとも積極的に質問をしていただきたいと思います。

[参加者 A 氏]

すみません、A と申します。住んでいる方にちょっとお尋ねしたいのですが、365 日顔を突き合わせるようにすると、どっかでぶつかるようなことがありますよね。ありませんか？ あったときはどういう形で…自然に時間経過で収まるんですか？その点なにかありましたらちょっと教えていただきたい。

[高橋氏]

そうですね、ここが始まってから 2 年半くらいはもうすごかったです。シツチャカメツチャカ。ぶつかりにぶつかりましたね。それで、3 年目くらいになったら落ち着いて。だけど、いまはぶつかるってことがまずないですね。

[大江氏]

逆につまんないとか。

[高橋氏]

(一同笑) つまんないなんて、逆に自分のことで忙しくて人なんか構ってられない感じになっています。

[高坂氏]

私ここで 365 日同じ人と住んでいますけれど、実際に顔は合わせるというのは夕食のときしかないかと言ってもいいくらい、あまり皆さんにお会いしないんです。だから、そういう意味で寂しいこともありますし、またなにかで皆でわ〜っと集まったり、犬と遊んだり、そういうこともありますけど、ほとんど皆さんご自分の部屋とかご自分の行動をしてらっしゃるので、むしろ夕食のときに顔を合わせるのが楽しみになっています。

[参加者 B 氏]

後ろからで申し訳ございません。こちらへ最初から研究会で入ってらっしゃった場合には、本当に初めから計画的に望んで入ってらっしゃったんでしょうけど、途中から入られた場合は、たとえば身内の方との話し合いとか、それからここへ入る前の暮らし方っていうのがあったかと思いますが、どのように最後に決断してここへ入られたのか、いかがでしょうか。

[大江氏]

高坂さんについては昔ビデオでお話になったのがあるんですけど、ご存じない方が多いと思うので、おねがいできますでしょうか。

[高坂氏]

私は夫に 40 代くらいで先立たれてしまったので、ずっと 2 人の子供を育てておりまして、60 歳になったときに、自分は子供から離れて独立しようと思って、日本全国の老人ホームのパンフレットを取り寄せたんです。でも、あまり思わしいのがないし、それでもずっとボランティアをしながら過ぎてしまいまして、たまたま西條さんの講演会があって、それから西條さんの本を求めまして、そして「私の行くところはここだ」っていう思いで、そしたらちょうどそのとき海老名のありまを作り始めるところだったので、そちらならすぐ入れるということで、何回かそちらにも見に行ったりしたんですけども、やはりどうしても私はこの湘南台がいいと思い、4 年間か 5 年間くらい待ちました、入りたいという希望をして。そしてここへ入ったので、息子も娘も全く異議がなく、そして現在は嫁などは本当に私に感謝をしております。(一同笑)

二世帯住宅で何もなく生活をしていたんですけども、いまはもう自分の娘以上に私と仲の良い状態にいますから、もうこれからの方も、ぜひとも息子や娘に頼らないで元気なうちにこういうところにお入りになると、幸せな一生が送れるんじゃないかなと。そんなわけです。

[武井氏]

私は 55 で主人を亡くしまして、その後姑を送って、その後 10 年くらい一人で犬と暮らしていたんです。でも犬も死んじゃって。上野千鶴子さんの「おひとりさまの老後」でここを知ったんです。子供が 2 人いるんですが、「行ってみたいんだけど」って話したら、「いづれ」っていうことだったんです。すぐに探し始めて、ここにも伺って、「なんで今なの」って子供 2 人から言われました。すぐに申し込んだら、見学会は 7 月っていうので、その間はあちこちあちこち探して、7 月に来ましたがその時にはもう家が売れちゃったんです。だから、待つからこの辺に住みますって言って、申し込みをして。運が良かったというかわからないですけど、ちょうどいま私がいる部屋の方が他界されて、4 ヶ月だったんですね、すぐにお声がかかって「まだ早いですか」って言われたんですけど、「いや、それが目的ですから」って言って入りました。

やっぱり最初は慣れませんでしたけれど、いまは 3 年経ったらば、良いですね。もう他へは行きたくないです。先輩方の自立っていうのをよく知らないで、洋服を自分で着れるとか、お手洗い自分で一人で行けるとか、そういうのが自立だと思っていたんですが、そうじゃないってことも知りましたし、西條さんの人柄がとてよくてねえ、夕食の時なんか笑ってばかりなんですよ。本当にお風呂が温泉みたいで、毎日毎日楽しいですし、いま

は満足しています。

[参加者 C 氏]

山形県から来ました C です。ここに住んでいる生活者の中で決めていった決め事などはございますか？

[大江氏]

あるいは変わっていったことはありますか？

[高橋氏]

はじめ夕食は外注だったんですよ。それでここに来てから温めたりご飯を炊いたり、お味噌汁を作ったり、そういうので当番が、80歳以上の方を抜くとやる人が4人くらいしかいなくて。それは大変でしたね。おり～ぶさんが夕食づくりになってから、楽になったんですけど。それから後はゴミの当番とかお風呂を入れる当番とか、そういう当番はやっぱり決めましたね。それから、一番あれだったのは、他のことはあんまり決めなくて、自発的にお台所が気になる方はお拭きになるとか、お庭を気になる方はお庭をなさるし。そういうことで、あんまり決めたことはないんです。毎月いっぺん第一の火曜日にミーティングってやるんです。その時に何か問題などあったら必ずミーティングに出すんですね、そういう決め方をしていますので、ミーティングが主ですね。毎月課題がなくても月に1回はします。

[大江氏]

お風呂を2人で入る、バスメイトとか言われてますね。

[高橋氏]

3人一組、2人一組で入っています。

[高坂氏]

弱った方と元気な方とはセットになって入っています。万が一の時のために。

[大江氏]

ベルで連絡しあうペアの「ベル友」があると聞いていますが、で実際にベルを押された方はいらっしゃいますか？

[高橋氏]

実際にはね、ベルを押すにも押したい時に押されない(笑)

[高坂氏]

だいたい、何かあった時、ベルの側に行かれない状態で。私なんか杖で隣の部屋に壁を叩いたこともあります。

[全体]

実際にはあんまり利用されてないかな。

そうですねえ。

[高橋氏]

トイレに倒れた方も、トイレにベルがあるんですけど、押せなかった。

あとは間違っって押して、練習みたいになっちゃったこともあります。

[参加者 D]

バスメイトとかベル友はどなたが組み合わせを決めるんですか？

[高橋氏]

ベルはね、1階と2階なんです。2階の人が押したら2階の人がその部屋に集まる。全部の部屋が鳴るんです。1階は1階の人が誰か押したら1階全部鳴るんです。

バスメイトっていうのは、組み合わせで入るっていうこと。決め方自然と決まる。(一同笑)早くさっさと入りたいわっていう人と、2番に入りたいっていう人と、中程がいいっていう人と、自然にね。

[参加者 E 氏]

川崎から来ました E と申します。いまここに何人か一緒に、グループリビング COCO せせらぎという形で計画をしているところです。その中で、ちょっとどうしようかなあというところがありまして、1つはここで採用しているリビングアクセスっていうのがありますよね。要するにベランダが非常に開放されていて、そこが廊下みたいに、そこから行き来ができるという状態で、1つはここに良っていうこともありますし、プライバシーの問題もある。それをどのようにされているのかなっていうのが一点です。

それから、先程からお風呂ということがありますが、お風呂のあり方どうするんだっていうのはやっぱり議論してまして、その中で、たとえば大きいお風呂だけでいいんじゃないか、あとは…要するに濡れちゃうといけないから、シャワーだけでいいんじゃないか、あるいは男性が1人入りそうなので、それも含めて事故っていうか故障の場合もあるので、小さいお風呂も必要だとか、その辺がどうしたらいいんだっていうのが、まだ煮詰まっていなくてあります。その辺を実際に使われていて、どうかという問題と。

それから庭ですね、今回敷地が狭くてあまり庭が取れないんですけれど、この菜園との関

係。以前よりかはだいぶ菜園が小さくなったかなという思われますけども、その辺のことが三点目。

それから、先程からちょっとお話が出てたんですけども、ここが非常に魅力的なのは何なんだろうかというのをお聞きしたいなと思っております。

[大江氏]

1つ目は、リビングアクセスということですが。特には2階のベランダまで行き来できるように消防法上なっていると思いますが、普段はどのように使ってらっしゃいますか。

[高橋氏]

洗濯物を干します。

[参加者 E 氏]

そこで話とかされますか

[高坂氏]

それはないですね。たまたま下へ降りる階段が近い方は、そこをよく利用して。私はその隣なので、外へ出る時下へ曲がるのが大変なので、私はこちらの部屋の前をしょっちゅう通って、まあ、見ないようにしていますが（一同笑）
その他の方は前を通られる方は殆ど無いかと思います。

[大江氏]

2つ目が、お風呂の大小ですね。
要するに小さいものは使っているか。

[高橋氏]

使っています、いま。介護がいる方。
介護のヘルパーさんと一緒に使っています。
そういう方が2人いらっしゃいます。

[大江氏]

同じように宮内も大小があります。今日は F 夫妻がきていただいておりますが、お風呂の使い方はどうですか？

[参加者 F 氏]

うちは大きいお風呂にだいたい5名くらい。小さいお風呂に5名くらい。小さいお風呂の

中にはやはり介護をつけられるようになった方と、若めの方でパッと入りたくなって人が、分かれて使っています。ただ、ここへ集まる会がありますね、たかくだったかありまだったか、いま大きいお風呂は使っていない話を聞いているので、まあ10人集まって共益費がたっぷりあって、お風呂のガス代水道代があるうちはいいかなと思うんですが、私たちは元気な方が多いので一人ずつ入っているんです。順番を自分たちで決めて札でこうやってあって、ある程度。終わったら次の人を呼びに行くんですけど、呼びに来ないと見に行くって感じで、バスメイトみたいなのはなくて、そういう中で、満タンには自分たちはいれていないんです。お風呂代がやっぱりもったいないと。だから一人で入る分にはいまのサイズはすごく大きいなと。ただ、ユニットになっているようで、大きさを選べなかったというのもあるようです。だから、皆さんが何を選ぶかはたっぷりお湯を入れて温泉気分を味わいたいのを選ぶか、経済的なものを選びたいとか、選ぶ目的によって決めるといいかと思います。

[参加者 E 氏]

やっぱりセキュリティとか、危険性というか、個浴をなくしたいときにここで言われているバスメイトをどこまでやるか。

[参加者 F 氏]

それはね、最初はやっていたんですけど、やはり転びそうな人と一緒に入ると、ゆっくりお風呂に入れないうのがあるので、転びそうになった人は、まあ話し合いの中で、小さいお風呂に入ってください。小さいお風呂には手すりがいっぱいついていますね。そして、中にはスライドして入るような、そして一人でも入れるようにライフサポーターが板を置いたりってというような形をとったりしています。

[参加者 E 氏]

そういう身体的なものはいいんですが、たとえば倒れちゃったってところも心配していて、そういうときにずっとついてくれるわけにはいかないし、そういうときにどうしたらいいのか…

[参加者 F 氏]

私たちの考えとしては、たとえば知り合いの中でも、夫婦の隣同士に寝てても朝起きたら奥さんが亡くなってたとかそういうのがあるので、それとか長野に行った時おばあちゃんがなかなか降りてこないねって言ったら亡くなっていたというのがあるので、あまりずっと見張ることは不可能なので、あとは自然に任せればいんじゃないかっていうのが、大方の意見です。

[高坂氏]

私はその危険とか何かとかじゃなくて、大きいお風呂というのは、考えられないくらい効用があります。2人か3人で入ると裸で付き合うっていうのは、女同士でもとても気分のいいものですし、温まり方が違うんです。そういう感想をいだいて、3人くらいで入れるお風呂だと、本当に温まるんです。というのは本当に健康の素だと思います。そして、少々もったいないような気がしますけど、私たちは365日大きいお風呂を使っていますので、何かってそれが一番一日の終わりの締めになっています。

[参加者 F 氏]

そうですね、健康っていう面では、COCO 宮内も、お風呂は遠慮なく毎日入るっていうことなんですが、血の循環はよくなるし、気分もよくなるし、それがなによりもの薬じゃないかっていうのは同じです。

[大江氏]

3番目が畑の話ですね。菜園は、これは入居者の方の趣味とか健康状態とか、色んな形で変わっていく。少し停滞してもまた他の方が入ってはまた、というサイクルがあると思いますが。

[参加者 E 氏]

大ききなんかも…少し小さく、半分近くになったんですね。

[高橋氏]

四分の一になりました。

[高坂氏]

それから、実際に草取りだのなんだのがだんだんできなくなって、いまブルーベリーの畑を一部作りました。

[高橋氏]

はじめはスイカ作ってたんです（一同笑）

[大江氏]

有馬や高倉の方は、近くに畑があるからそこで作ってらっしゃる方もいらっしゃいましたけどね。

[参加者 E 氏]

今くらいあれば十分でしょうか？

[高坂氏]

あれでも、十分楽しめます。そして、結構収穫もできます。

[大江氏]

4 番目の質問は難しい質問で、ここはどうしてこんないい雰囲気なんだろうという…。

[高橋氏]

私が考えるのは、お互い距離じゃないかなと思います。というのはやっぱり元は自立しているかあんまり人のことに関わらないってことかしら、そういうことと、それから自分が自分の生活を楽しんでいくってことかしら。それからお互いの距離感やお互いに尊重するっていうのかしらね、そういうのも自然に生まれています。

[参加者 E 氏]

それは、それぞれの方がそう思われているってことですが、ここの魅力というのは、やっぱり西條先生の考えですかね。

[高橋氏]

それはね、十分にあると思いますね。

[高坂氏]

中身がもちろんいいのもあれですけど、地の利というののもとっても必要だと思います。ここは駅に平面で行かれます。そして、あまり遠くないし、いままではすぐ側にスーパーがありました。今はスーパーは閉店しましたがまた新しいのになるようです。それから、図書館が近くにあります。本当に自分のうちに持っているくらい近くて、そこで週に1度とか2度、映画会があったり、それからCDもDVDも借りられますので、ここへ来てから一切買わなくても毎日のように図書館に通えるというのは、とてもいいと思います。

[武井氏]

私もね、ここには自然がいっぱいあるんですよ。川崎から来たんですけど、夜の星がキレイです。暖かいです。それから私バードウォッチングが趣味なんですけど、側に境川があって、そこにはこの間も一緒に行って46種類も鳥がいて、だから自然がいっぱいでね、とってもいいところだなって感じがします。

[参加者 G 氏]

大変素晴らしい、皆さんそれぞれに独自の生活を持って過ごされているかと思うんですが、町内の方とのお付き合いってというのは、なにかあるんでしょうか。

[武井氏]

地域の公園に、色んな情報があって、そこで集めてくるとか、ここは隣で湘南台みんなの輪（介護予防対応型デイサービス）などの地域交流をやっています。

[高橋氏]

前に、ここをお出になった方ですけど、すぐその公民館でギターのサークルの仲間に入って、ギターをやっていたんですよ。それで、ここでサロンコンサートが2回あるんですけど、そういうときにそういう人たちがここに来て、演奏してくださるんですよ。それから、来た頃はね、どんどん焼きとかにも参加していたんですけども、それから、盆踊りとかもありましたけど、あんまりねえ…（一同笑）

[大江氏]

ここは駅の近くですけども、地元の農家の方もいらっしゃるところなので、それなりに伝統的な地域社会が残っているところだと思います。COCO 湘南台として町内会に入っているんですか？

[高橋氏]

老人会があったんですよ。年に1回くらい。はじめは参加していたんですけど、畳で座れなくて…で、だんだん参加しなくなりました。

[参加者 H 氏]

広島から来た H と言います。12月に入居されている方や利用されている方が他界したんです、末期ガンが急に悪くなられて、夜間がたいへんになる可能性があったものですから、元々夜勤はありますが、その方だけ特別にちょっと時間を短くして見回りっていう形で、回っていただいていたんですが、こちらは、もしそういう方が、もし今後万一出た場合、どのように考えられているんでしょうか。

[大江氏]

西條さんが2冊めの本に書いている、実際にここで亡くなった方がいらっしゃいます。末期ガンの方で、最期のところは訪問看護とかホームヘルプを用意してあったお金の中から、出してしたということだったと思います。ここは要するに、10人の一人暮らしプラスアルファみたいところだと思うんですよ。さっきのお風呂の話もそうなんですけど、一人暮

らしだったらそこで倒れていても誰にも気づかれませんが、10人が一緒にいるからそのまま発見されないで長く放置されるってことはない。でも施設介護だったら施設介護者の責任っていうふうに問われるから、問われないように防衛策をとらなきゃいけないっていう発想になります。もともとここはそういうのではない形で成立しているので、そういうふうに考えないってことなんだろうと思います。だから最期の看取りってというのは、自宅で亡くなったってことなので、自宅で亡くなる時に自分としては自宅で逝きたいからっていうことで、そういう形でお金を使って、でも周りも協力して…。そういうことだと思いますけど。

[高橋氏]

夜に、その勝手口を開けておいて、ヘルパーが通ったりしました。鍵の置き場所を決めておいて、入っていらしたというようなこともありましたね。

[大江氏]

最後の1問くらいいかがでしょうか。

[参加者I氏]

すぐそばの平塚から参りました。平塚のYMCAは平塚のJRの駅から、歩いて2~3分の地の利のいいところではあるんです。会員自体が高齢化していますのでこれからグループリビングを立ち上げていこうと考えています。建物は80年でしょうか、木造ですか、この間なんとか1階の耐震工事をしました。それ以上のお金はないので、それをどう集めていこうか、また地域の方々の必要に応じて、なおかつ会員さんの必要に応じたものを作っていくか検討しています。グループリビングの最低人数は何人ぐらいで成立するのでしょうか。

[高橋氏]

6人とかでもいいっていいですけど、一人欠けても5人でしょう。採算取れるのはやっぱり人数が多くないといけないと思います。(一同笑)それからおり～ぶの方たちも、やっぱり2人いなくなって8人とかになったら、居住者の負担が増えるのと、おり～ぶさんが1人で作るのに、10人より多かったら、やっぱり荷が重すぎのではないのでしょうか。

[大江氏]

残念ながら時間となってしまいました。今のお話は明日色々と議論されるかとお思います。それから10人が最適じゃないかって西條さんが書かれている本もあります。その辺もまた参考にしていただきたいと思います。それでは、高橋さん、高坂さん、武井さん、ありがとうございました。

2 日目 神奈川県民ホール大会議室

Ⅲ 開会の挨拶

星川 光子

おはようございます。

本日は横浜ワークショップにご参加いただきまして、ありがとうございます。

いぶりたすけ愛が主催となっているのですが、本当に名前だけで、グループリビング運営協議会の皆さんのご協力のおかげで今日のワークショップを開くことができました。

私は、人前で喋るのはすごく苦手なのですが、うちのグループリビングたすけ愛の家の代表を務めていてくれる 90 歳のおじいちゃんが、こう言っています。「私は、このグループリビングに住んで、とても幸せです。この幸せを自分たちだけではなくて、もっと多くのお年寄りが、幸せに暮らせるように、もっと全国にグループリビングを広めて欲しい」と。その言葉に押され、私も何かお役に立ちたいと思い、今日は主催ということにさせていただきました。

どうぞ、今日の横浜ワークショップが、成功しますように、皆様のご協力をどうぞよろしく願いいたします。これで、挨拶に代えさせていただきます。

IV 挨拶

西條 節子

皆様、おはようございます。

横浜ワークショップの、二日目。このワークショップの根源は、一人ひとりの生涯の尊厳をどう守るのかという、テーマになっていますけれど、やはり、昨日も話しをしました。この嵐吹くような世界の中で、私達が、一人ひとりの生涯の尊厳をどう守っていこうか、私は守られている方ですけども、そういう途を開く、この大勢の皆さんが、かなり増えてくださいます。そして、ずっと心強く私は思っております。本日は特に、宮本みち子先生のご指導をいただくことになっております。大江先生もご助言いただけます。いろいろと、吸収できるものは遠慮なく、吸収して、そして地域で、北海道から九州までの方がいらしていますが、はばたいて皆さんに伝えて欲しいと思っております。

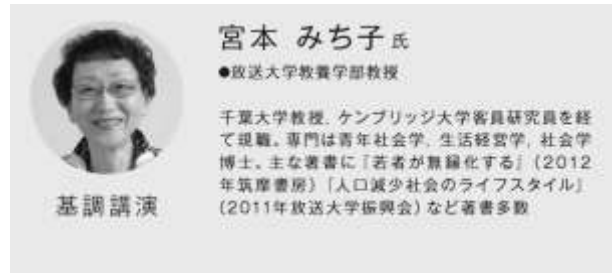
私も今、歳を言いますが、84歳です。皆さんと、一緒にいて、お話を聞いていると、100歳まで生きてみようかな・・・と、だんだん欲が出てきて、元気をいただくことができます。そんなところです。

実は、皆さんが、イタリアに行く機会がありましたら、ミラノに「ヴェルディの憩の家」があります。今年は作曲家のヴェルディが誕生して200年。椿姫、アイダ等などの作曲をされていますが、全遺産と著作権を全部寄付して、音楽家のための素晴らしいホームを作って、いい運営をしています。機会があったら行ってみてください。諸外国では、結構そういう色々な篤志家がいらっちゃって、素晴らしいなあと思います。

私達も、お金はないけれど、こつこつと知恵と頭を働かせて、そして、いい社会を市民力で作っていこうと誓い合う、今日はそんな会合にしていきたいと思っております。ありがとうございました。

V 基調講演

家族を超えるホーム作り～単身化時代の中で～



はじめに

昨日は、グループリビングの一日目の見学会に参加させて頂きました。ずっと前から、グループリビングのこと、それから横浜市内の活発な活動については耳にしていたので、一度直に見せていただきたいと思っていたのですが、今回大江先生からワークショップのお話をいただきまして、とても有り難く思っております。昨日、集まっている皆さんの深い見識と経験に圧倒されまして、今日皆さんの前で、私が大それた講演をする立場ではないということを感じているところです。

私は日頃から家族の問題と仕事の問題を中心に、この10年くらいは若者の問題をやってまいりました。実は、横浜市の子ども青少年局との付き合いはかなり長くて、委員会の名称は何度も変わりましたが座長をさせていただきながら、横浜市内で生きにくさを抱え、仕事に就けない若者の支援の仕組みを横浜市内に作ってきました。そういう中で、横浜には若者だけでなく、乳幼児期から高齢期までを対象に、非常に多様な民間の活動があるということを感じておりました。

私自身の年齢を省みると、自分自身の問題を含めて高齢期をどうするかを考える年齢にあることを感じながら、この若者の問題から手が抜けな状況にありましたが、実は青少年や若者の問題と高齢者問題とは、ほとんどドッキングするのです。結局、最後は、21世紀型の社会をどういう風に作るかということだと思っております。若者の問題も労働市場が厳しいということが大きな問題ですが、労働市場の問題だけではないことが非常によくわかってきました。その人たちが社会に出て生きられるために、地域社会はどう変わらねばならないか、を考える段階に来ております。そういう意味で、今日お話することも、違う世代が融合する形で、新しい地域づくりをどうするかというようなところまで、もっていったらいいなと考えております。

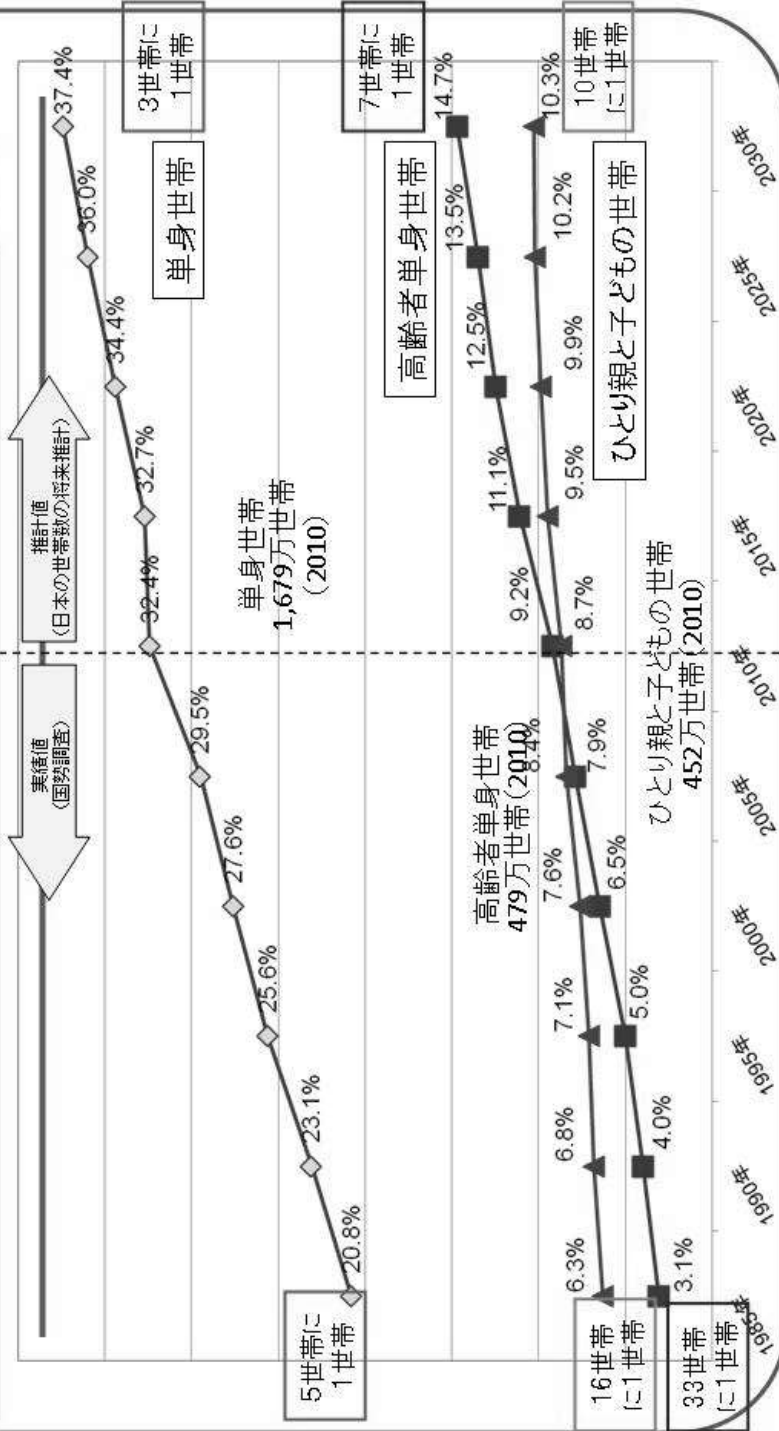
1. 進む単身化

ということで、本題に入らせていただきます。お手元のグラフはとても見えにくく、昨日もこういう話題がたくさん出ていましたので、まあ証拠みたいなものですが、事実だけ確認します。世帯構成の変化で、一番右が 2030 年ですので、一番近い将来推計です。2030 年に 3 世帯に 1 世帯が単身者になります。それから、高齢者の単身世帯が 7 世帯に 1 世帯、それから、一人親と子ども世帯が 10 世帯に 1 世帯。何が重要かという、日本の家族は、いわゆる多数派がなくなると考えればいかと思います。単身者が多い、それから両親が揃っていない家庭が多くなるという方向です。

一人親と子どもの中には、中年の子どもと高齢の親という組み合わせも入っていて、いま徐々に増えています。次は、いまの単身化、高齢化にもっとも重要な関係を持っているのが未婚率の上昇です。日本の状況は晩婚化ではなく非婚化です。晩婚化は結婚年齢が遅くなるだけですが、非婚化というのは結婚しないという話で、日本だけでなく、アジアの工業化された国々はかなり非婚化国になっていて、このあたりはヨーロッパやアメリカと違います。ヨーロッパでいうと南ヨーロッパがこのタイプに近い状態にあります。

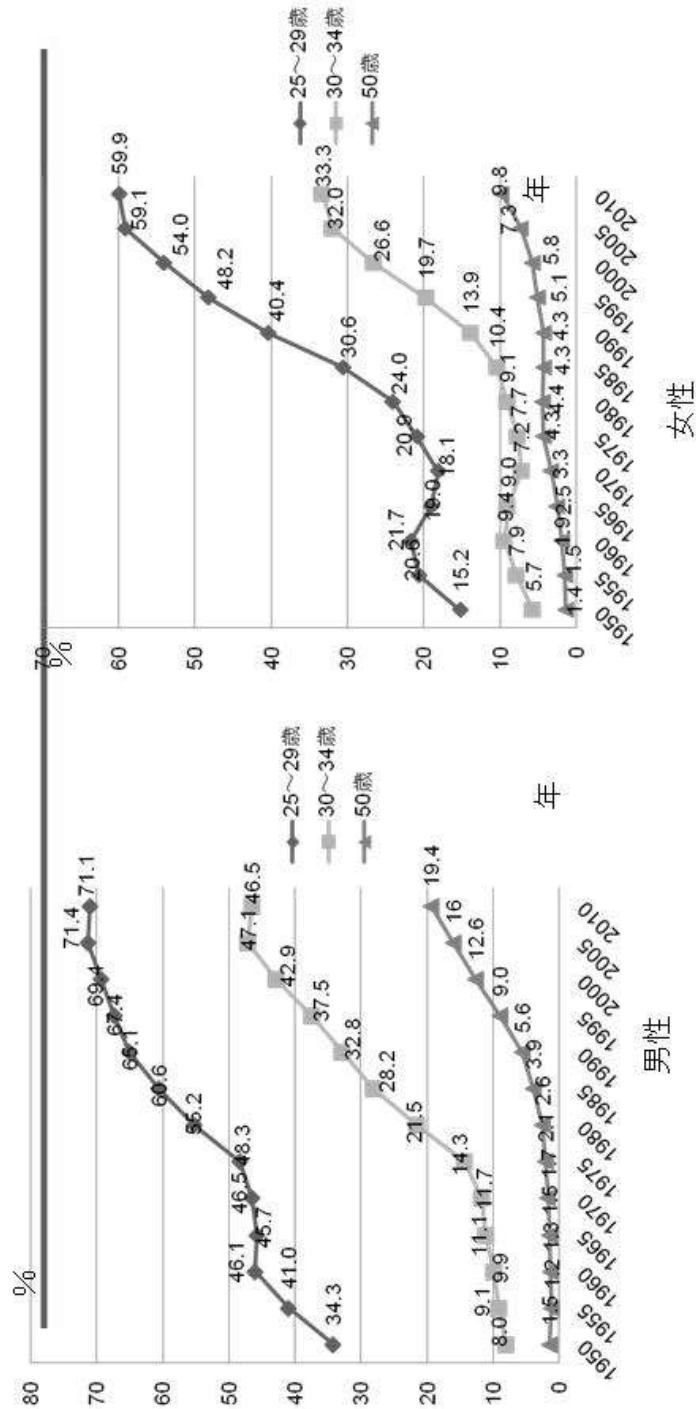
世帯構成の推移と見通し

- 単身世帯、高齢者単身世帯、ひとり親世帯ともに、今後とも増加が予想。
- 単身世帯は、2010年現在で、3割を超える1,679万世帯（全世帯数約5,184万世帯）2030年には約4割に達する見込み。



(出典) 総務省統計局「国勢調査」(平成22年)、国立社会保障・人口問題研究所「日本の世帯数の将来推計(全国推計)2008年3月推計」

年齢別未婚率の推移

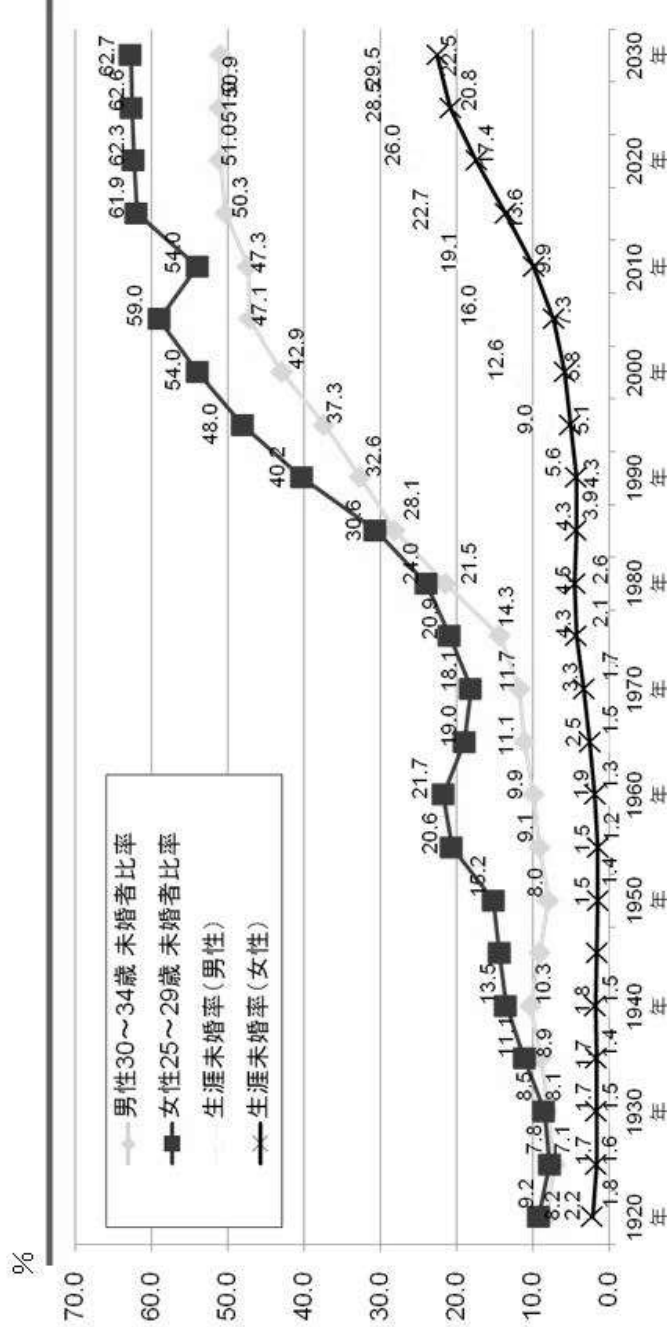


資料：総務省「国勢調査」
注：1960～1970年は沖縄県を含まない。

それから、もうひとつは、生涯未婚という話です。50歳になった時点で一度も結婚していない場合に生涯未婚といっているわけですが、このグラフでいうと、下のグラフの一番下の黒い太いのが女性の生涯未婚率で、2030年の時点で女性の23%が一度も結婚しない状態で50歳に達し、それから男性はそれを上回って30%と推計がなされております。女性が男性を追う形になっていきますけれど、男性が結婚しないという状態になれば、遅かれ早かれ女性は相手がないわけですから、当然結婚しないという人が増えていくという形で、そうですね、5年くらいの差をもって、男性が先をいき、後を女性が追っています。

生涯未婚率の推移

○ 生涯未婚率は、2030年には男性で約30%、女性で約23%になると見込まれている。



資料出所：資料：総務省「国勢調査」（平成22年）及び国立社会保障・人口問題研究所「日本の世帯数の将来推計（全国推計）（平成20年3月推計）」、「人口統計資料集（2009年版）」
 注1：男性30～34歳未婚率、女性25～29歳未婚率は2010年までは「国勢調査」、それ以降は「日本の世帯数の将来推計」による。
 注2：生涯未婚率は、50歳時点で一度も結婚をしたことのない人の割合であり、2005年までは「人口統計資料集（2009年版）」、2010年以降は「日本の世帯数の将来推計」より45歳～49歳の未婚率と50歳～54歳の未婚率の平均。

女性の将来と出生子ども数

1990年生まれ(2005年に15歳)の女性

生涯未婚率 24.3%

既婚・子なし率 13.8%

既婚・子ども1人 18.0%

既婚・子ども2人 32.8%

既婚・子ども3人以上 11.2%

国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口」(2006年12月推計)

5

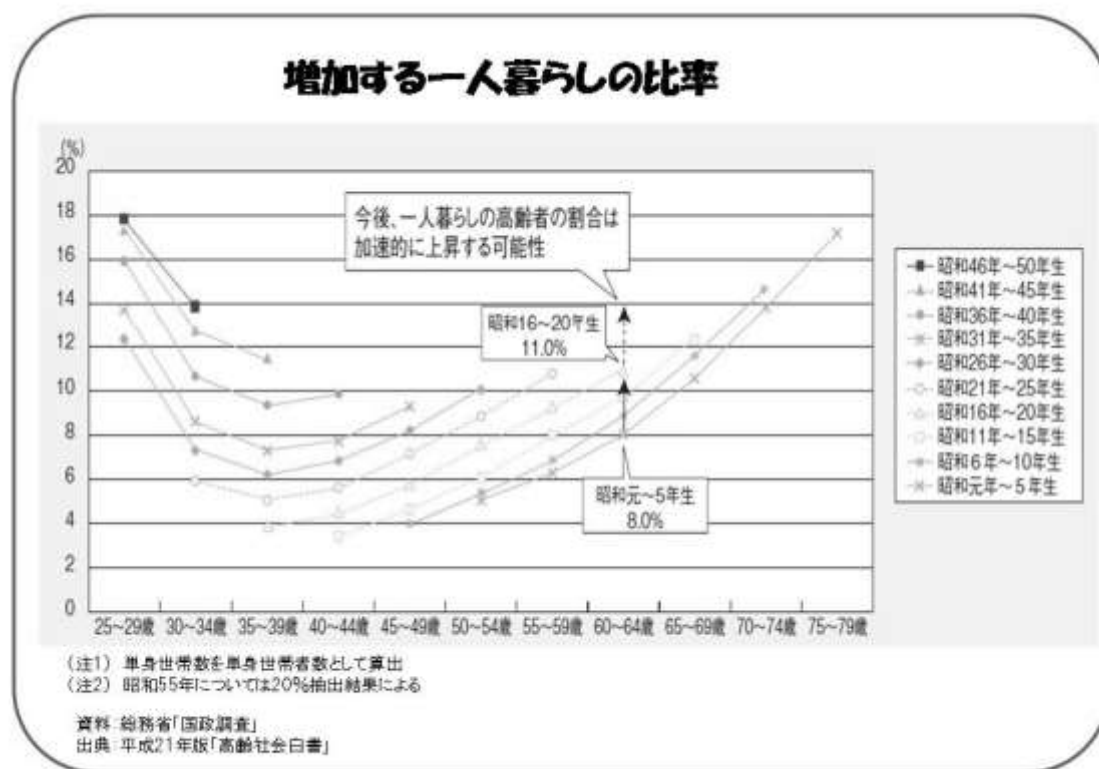
5

つぎの説明の方がわかりやすいと思いますが、国立社会保障・人口問題研究所の将来推計で、1990年生まれの女性、だからいま20歳とちょっとで、大学を卒業したくらい的女性たちの将来とイメージしていただければいいかと思います。50歳になった時に、学校の同窓会をやったとして集まった女性たちがどのような構成になるかという話です。一度も結婚しない人が24%、だから4人に1人の女性は一度も結婚しない状態で同窓会に参加するということです。それから、結婚はしているのだけれども、子どものない人が13.8%。それから結婚して子どもは1人だけの人が18%。それから、結婚して子どもが2人という人が32%。3人に1人弱くらいですね。それから、子どもが3人以上という珍しい人が、約一割という状態になるということです。

2030年のこの数字をじっくり考えてみますと、日本の社会は本当に大きな異変が起こっているということです。世界的に見ても、日本が高齢化のトップをいっており、いままでのようにどこかの国をモデルにして日本のこれからを考えることはできないとよく言われますけれども、高齢化だけが問題ではなく、現役の人たちにも既にモデルがない。そういう時代を生きていこうとしているということです。

ついでに、ちょっと色が薄くて申し訳ないのですが、一人暮らしがととも増えていく日本の社会についてです。異変は現役の世代にも起こっているという話で、これは高齢社会白書に出ていたグラフですが、とてもわかりやすいという感じが致します。右側の方の折れ線はたとえば昭和元年から五年生まれの方が、50代からどのくらい一人暮らしでいたかと

いうことを表しておりますので、年齢とともにだんだんと増えていったということがわかります。一番若い人は昭和46年から50年生まれの人で一番左側の一番上の赤い折れ線ですけれども、まだこの方たちは30代にあるので、この後どうなっていくかというのはわからないのですが、重要なことは若い世代ほど、若いうちに一人暮らしが始まり、そのまま一人暮らしの率が大きく落ちないまま、中年期に入っているということで、中年期が終わると再び一人暮らしが増加していきます。つまり、すべての世代で一人暮らしというライフスタイルがとて広く行き渡り始めている社会ということになります。若い世代ではパラサイトシングルという言葉があって、親元をなかなか離れない、あるいは親元を離れられないで親と一緒に暮らしながら中年期を迎えるという現象が起こっていますが、それはこのグラフの左端とその後の世代なのです。



6

こういう超高齢化社会、それから超長寿化社会、そして晩婚化よりも非婚化する社会、こういった日本の状態の中で、何がどう変化しているのかということです。今日のテーマに関わって整理してみました。90年代くらいから、本格的に結婚行動に大きな異変が起こってきている。その90年代くらいから本格的に高齢化が始まるわけです。同時に90年代くらいから労働市場の大きな変化が起こり、90年代の終わりくらいから若者のフリーター急増時代に入り、2000年代になると若者のフリーター化は、意識の変化が原因ではなく労働市場の構造変化だと国が正式に認める段階に入ります。

2. 変容する日本社会

変容する日本社会

変化の前

安定した「場」に属することが重要
家庭、学校、職場への帰属は
アイデンティティ、経済的成功、
心理的充足感の源
画一主義 集団主義 会社人間
社会のルールを守れば
しっかりした「場」が保証された社会

今

「場」との結びつきが幻想
にすぎない社会へ
「場」の喪失は大きなダメージを与える

7

そういう異変が起こる前の日本の社会をざっと大括りに見ますと、こういうことがいえるかと思います。人々は安定した場に属することが重要。安定した場とは何かというと一つは家庭、その家庭は単身家庭ではなく、家族がいて離婚率が低く、多くの人は結婚して子供を持つ、そういうタイプの家庭です。そこに帰属することが重要なことだったのです。それからもう一つは学校です。先進諸国の中では、日本はかなり最後まで、学校段階を順番に通過し、最終学校を卒業してようやく社会に出ていくという状況が続きました。したがって、高学歴化が進めば進むほど、学校教育期がずっと合間なく続く状態になります。22-23歳までは皆学校にいる。で、その後労働市場が厳しければさらに学校にいるということになりますので、下手をすると24-25歳まで、間断なく学校にとどまるという状態になるわけです。他の欧米の国々を見ると、この弊害を是正するために、たとえば高校を卒業したら一旦社会に出すようになりました。北欧などではかなりそうですし、イギリスなどもある時期からギャップイヤーというものを設けて一度社会に出すことを奨励するしくみを作って来ました。しかし、日本はそういうことになっていないものですから、うまく学校に適用できない不登校の子供たちの悩みは、非常に深刻なものになるわけです。それから、あとは職場です。終身雇用制の職場。ここへの帰属というのはアイデンティティの源になり、経済的な成功の素になる。また、心理的にも充足する源になる、そういう社会が戦後の経済発展の中で作られたのです。そして、いま大幅に崩れようとしているの

ですが、結論から言うと完全に崩れているのではなく、人々の拠り所として依然として重要、しかし、その場を得られない人が増えているという状況だと思います。

家族、会社以外の場が不足しています。変化する前の社会の特徴というのは、安定しているけれども、一方では画一主義、集団主義、それから会社人間化、という状態でありました。会社人間となり、集団主義の中にいけば、経済的には安定し、社会から除け者にはされず、心の安定は得られるという社会を作ったのです。昨日の訪問先、それから夜の交流会の中で、私色々なお話をうかがったのですが、そこで問題とされていることの多くは、先の時代に作られたものが、いまも亡霊のごとく残っていて、それを払拭できないまま、時代は変わっていくなかで生じた現象ではなかいあと思います。

場との結びつきは幻想になっている。これは高齢期の人々に限った事ではありません。私がずっと触れてきた若者の問題でいうと若者たちの悩みは「帰属できていると実感できる場がないこと」です。たとえば私が2年前に立命館大学に仕事で行った時に、立命館大学のトイレに『この中で食べ物を食べるな』という張り紙がしてあるのです。これは色々な大学で結構共通の現象らしいのですが、張り紙したときには、『食べるな』の理由は、ゴミの問題だったのですが、どうもそういう問題ではないと指摘されてきたのです。お昼を一緒に食べられる友人がいないという悩みを持っている学生が少なくない。「そんなの平気じゃないか」、「別に一人で食べて何の問題があるのか」、というのは強い人の論理で、人間関係で孤立しているという深い悩みを持っている学生にとっては、その姿を人に見られることがとてもつらい。だからトイレの中で食べている。これは一つの解釈なのですが。若者たちだけでなく子供たちのなかに生じている現象を見ていると、トイレの中で食べる心理がよくわかる気がしましてですね、会社に入ったけれども、長く続かなくてやめてしまう若者の中に、やめさせられるよりも自分でやめるケースが多いといわれているのですが、その中にこんな悩みをもつ若者がいます。お昼のときに、皆の輪の中に入れない、何か気の利いたことを言わないと、そこにいたたまれない。そのうちに、誘ってもらえなくなって昼を一人で寂しく食べなければならない、そういう感覚なのです。これは場との結びつきを実感できない環境で育った若者たちの深刻な悩みなのですが、その現象は全ての世代に見られるように思います。

グループリビングの重要なポイントは、従来型の日本の家族を、どういう形で超えていくかということではないかと思います。この辺りはもう活動されてきた皆さんの中で理論化されていることで、私のほうが学ばせていただかなければならないことです。

3. 家族からの解放

家族からの解放という 日本人の立ち位置の推移

戦後：家族＝家父長的な「家」からの解放

工業化の時代：家族に代わる福祉国家を

オイルショック以後：家族を福祉の担い手とする

日本型福祉社会論＝選別主義

1990年代以後：福祉国家のパラダイムチェンジ

家族からの解放と財政危機の妥協？

新しい中間集団＝コミュニティ再生＝「新しい公共」？

8

「家族からの解放」というテーマは、戦後日本の非常に重要な目標となってきたものでした。家族研究の分野では封建的家族から脱皮して家族の民主化を図ることが常に念頭にありました。その際、家族モデルは西洋にあったのです。戦後、アメリカの占領下で、日

本の家族を規制してきた憲法をはじめ関係法が改正され、

西洋型の夫婦家族制の理念へと転換しましたが、現実の家族はそんな簡単には変わったわけではありません。半世紀以上かかって現在の段階にきています。そして、誰もここまでは予想しなかったような単身化に直面しています。

家族からの解放というのは、家族が担ってきた機能を誰が代わるかという問題と結びついていました。考えられる方向は、市場化と公共化です。高度経済成長期に入って、家事の市場化が進みましたが、人々の福祉に関しては国の機能が重要になります。つまり、福祉国家の道を歩むことです。公的年金制度、医療保険制度そして、ずっと遅れて始まった介護保険制度、その他の社会福祉サービスによって、人々の暮らしを国家が守ることです。介護保険制度の導入は、非常に重要な転換点だったと思います。よくそれを実現したと思いますね。介護は女性の役割であり、美德であるという規範が極めて強い中で、介護保険制度が導入されたのは金字塔であったと思います。

ところが、1973年が福祉元年と宣言された直後にオイルショックが起こり、福祉国家は「日本型福祉国家」へと引きしめられていきました。財源的に西洋型の福祉国家を維持するこ

とはできない。その代わりに、日本は家族という美德を持っている。家族という含み資産を有効に使い、国家による公共保障は、家族に依拠できない人々に選別的に提供するのだという方向へと変わります。

そして、90年代に入ると、深刻な財政危機の進行と反比例して高齢化が進行します。財政危機は日本だけでなく、他の福祉国家が共通に抱える深刻な課題となりました。そんな中で、家族からの解放という課題と、財政危機との折り合いをどうやってつけるか、という問題になります。状況は2000年代になるとより深刻になりますが、ヨーロッパなどと違いますのは、深刻な少子高齢化の進行です。しかも、ヨーロッパが経験していないのは、日本の婚姻率が低下して子供が生まれにくいという問題です。

そういう意味で、家族からの解放というテーマと、今日直面している財政危機という問題と、超高齢化と非婚化、これをどうやって調整するのかという課題に直面していると思います。

そこで、問題にしたいのは家族に関する日本人の心の状況です。日本人の心は矛盾した状態にあるというのがポイントなのですが、その辺りを整理してみたいと思います。今お話したとおり、西洋諸国の多くは20世紀初頭にはもう夫婦制家族になっていました。そういう意味では、日本では家族の古い息苦しい関係から解放されて自由を謳歌したいという気持ち根強くあるのは当然ともいえるでしょう。さきほど大江先生とお話して、大江先生が山形で高齢者に聞き取り調査をされて感じられたことと、私がこの間、岩手県や山形県で、不安定な就労状態にある若者のインタビューをしたときに感じたこととが非常によく一致していると思いました。たとえば20～30代の未婚の女性たちにインタビューをして、「結婚をすとか家族を作るとかいうことについて、今どう感じていますか」とたずねたところ、多くの女性が口にするのが「母親が嫁に入って、家の舅姑に仕えてどんなに苦労したかということを見つてきた。私はそんな人生を歩みたくない」という言葉です。もう21世紀に入っているのに、そういう言い方をするのは、日本は北から南まで多様で、実は首都圏で議論していることは違うかもしれないと思いつつ仕事をしているのですが、家族の古いしがらみの息苦しさから解放されたいという思いは現在も根強く続いているように思います。

日本人の心は矛盾した状況にある

■ 家族の古い息苦しい関係から解放され、自由を謳歌したい。

■ しかし孤独でいることは寂しい。

暖かい関係に囲まれていたい。

「サザエさん」の根強い人気

■ 家族と会社からの解放を楽しみつつも、

■ リスクの回避のために、自らを縛り付けてきた家族集団、企業共同体に救いを求めている。

9

ところが一方では、孤独は寂しい、暖かい関係に包まれたいという気持ちも強いわけでありまして、サザエさんの漫画がいまだにものすごい人気を得ているのもそこ関係していると思います。家族に関する議論をしていると必ず誰かが言うのが、サザエさんのようなああいった時代に帰るべきだということです。「帰るべきだ」と言うということは、本気で帰れると思っているということなのですよね。私は帰れないし、サザエさんの家族は幻想だとも思っているのですが。帰るべきだと思っている人は、中高年者に多いですし、保守的な人には非常に多くいるように感じます。若い世代には、純粋なあこがれがあるようにも感じられます。

その議論はとどまるところがなく、たとえば何故そういった時代が終わってしまったかといえば、女性の意識が大きく変わってしまったからだ、女性がそもそも働くようになったことがこういう時代を生んでしまったのだ、子どものいる女性は働かない方がいいと議論は進んでいきます。これだけ、男性が妻子を養えない時代に入っているのに、女性が働かなければサザエさんの時代に戻れると思っている人が、企業の経営者層や政治家にはとても多いという感じがします。

全般的には、一方で家族からの解放を享受しつつ、その一方で孤立化を恐れるという相矛盾する心性をもっているのが日本人ではないでしょうか。たとえばだいぶ前から言われてきたことですが、若い人が一人暮らし用のアパートやマンションを探す際、重視される条件はなにかというと、なによりもコンビニが近いことだそうです。コンビニさえあればな

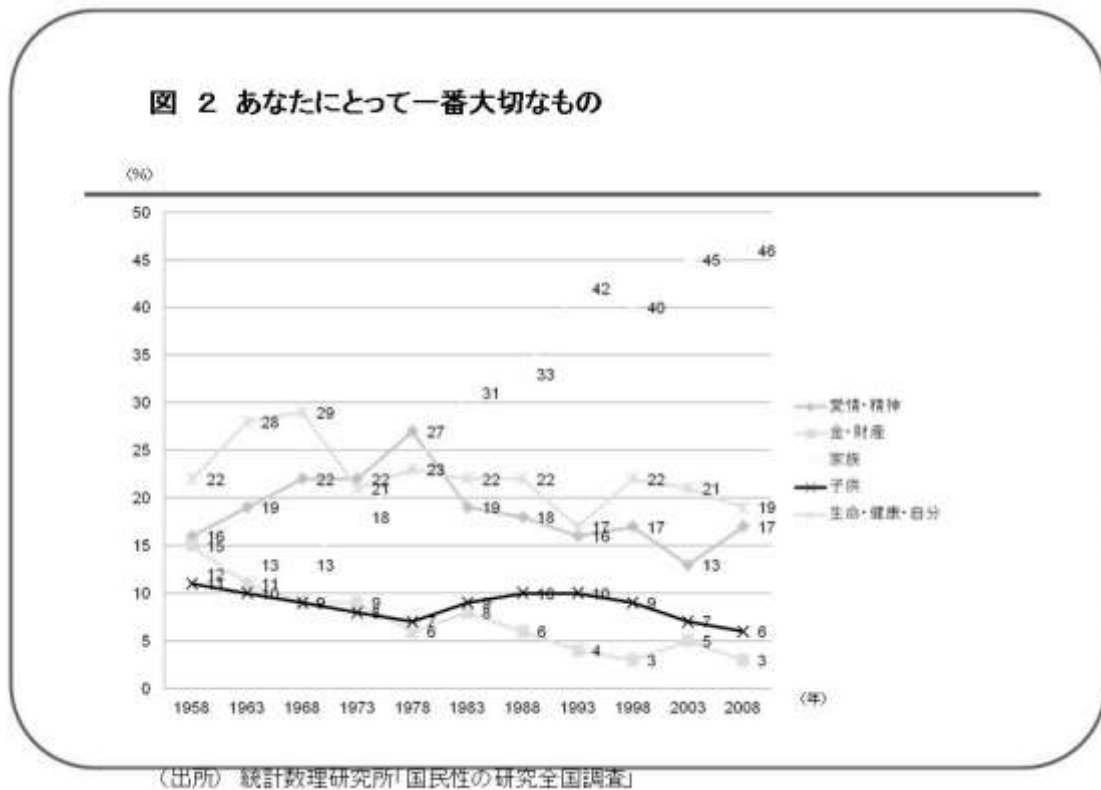
んとか暮らせるという感覚があるのです。

ところがその一方で、2年前、NHKの無縁社会シリーズがヒットし、無縁社会は流行語になりました。私は、シリーズで放映することが決まるきっかけとなったNHKスペシャル『無縁社会とどう向き合うか』の制作段階からチームと関係をもち、番組に出演させていただきました。それ以来、誰にも看取られずに亡くなっていく“行旅死亡人”が増加している現象に、現代日本の無縁化が如実に表れていると深く関心を寄せてきました。あの番組の制作リーダーは、板垣淑子さんという[当時]ディレクターです。この方はバリバリの社会派で、ずっと社会問題を追いつけてきた人です。板垣さんが行旅死亡人に関心を寄せるようになったのは、リーマンショックの後、日比谷公園に職と家を失った非正規雇用の人たちが集まるようになり、その方たちの何人かと接触を続けていたところ、その中の一人の方の姿が見えなくなりました。しかし、周囲の人たちから「追わない方がいい」と言われたそうです。つまり、そのようにしてどこかで亡くなっていることがめずらしくないということ。そこで、板垣さんはこのテーマを追いかけたのです。これが高い視聴率を獲得しまして、その年は無縁社会をテーマにたくさんの番組が作られました。

その過程で大変印象深かったことは、若い人たちの反応でした。最初の番組を放送した時に、これは中高年者は関心持たせようけれど若い人は人ごとだと考えるのではないかと危惧したのです。ところが、一番反応したのは若い人たちだったのです。20代とか30代。若い人たちは番組を見ながらツイッターでどんどん情報を発信するので、それでわかるのです。若い人たちは、誰にも看取られず死んでいく姿は自分の将来の姿だと感じたのです。つまり、寄る辺のない人、帰属する場のない人、家族はいるかもしれないけれども心のなかでは帰属する場と感じられないという感覚を持っている人が非常に多いということなのです。仕事が不安定で結婚なんてできない自分も、最後は行旅死亡人になるのじゃないかという恐怖を感じたのです。

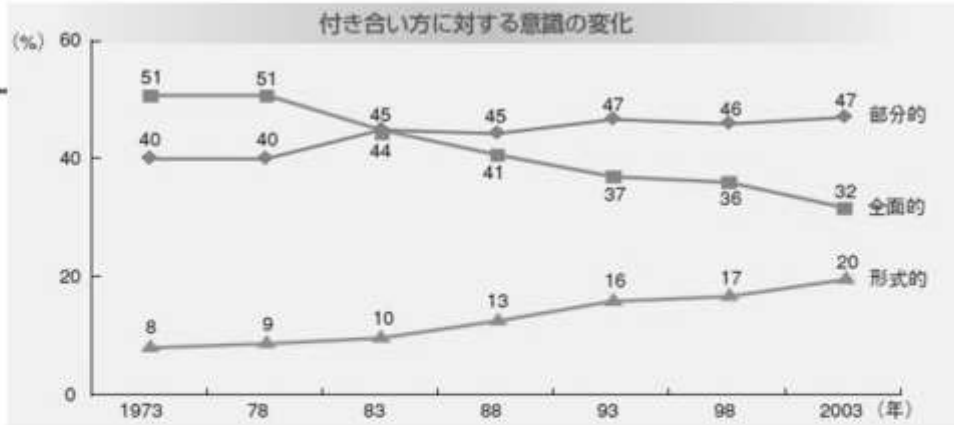
それ以来、無縁社会への世間の関心が高まり、それに加えて、震災があって、「結婚したい」、「家族を持ちたい」と考える若者が増加したようで、結婚相談所などでいままで何度紹介をしても成婚しなかったものが、一気に成婚率が上がったという話も聞くようになりました。家族というものに対してある種の回帰があったのだと思います。

4. “家族” への複雑な想い



では、実際に回帰できるのかということ、現実はその単純ではないと思います。いくつかの図をご紹介します。まず、「あなたにとって一番大事なものを」を継続して聞いている調査の推移ですが、多数を占め、しかも増加を続けているのは何かというと、「家族」という回答なのです。つまり、日本人が一番大事と思っているものは「家族」だということなのです。その次の図は、「親子の会話とか信頼関係は重要かどうか」という調査で、70年代からずっと継続して調査しているのですが、親子の「信頼」とか「会話」がずっと高い評価を得ているのです。親子関係はいつでもいいとは誰も思っていないということです。ところがその一方で、親子関係に関して「充足しているかどうか」といえば、ずっと点数が下がっているのです。

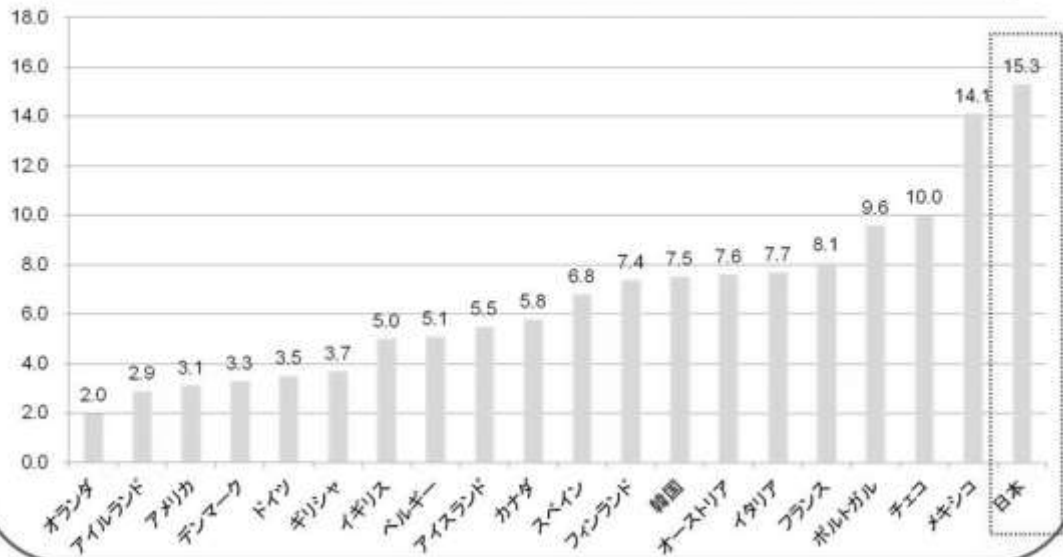
図 1 親せきとの付き合い方



- (備考) 1. NHK放送文化研究所「現代日本人の意識構造」により作成。
 2. 「親せきとは、どんな付き合いをするのが望ましいと思いますか。」リストの中からお答えください。との問に対して、「一応の礼儀を尽くす程度の付き合い(形式的)」、「気軽に行き来できるような付き合い(部分的)」、「なにかにつけ相談したり、たすけ合えるような付き合い(全面的)」、「その他」、「わからない」のついで、「全面的」、「部分的」、「形式的」と回答した者の割合。
 3. 回答者は、全国16歳以上の男女。

それから、次の図は「どのような親戚付き合いが良いか」ですが、「部分的な付き合いがいい」が一番多く、しかも増加しています。叔父叔母甥姪などの斜め関係が一番衰退したとよく言われますが、それらの親戚とは部分的な付き合いがいいということです。「形式的な付き合いでいい」というのもずっと増えています。つまり、煩わしさからの解放というのはこういうところに顕著で、現在も一貫して続いている傾向です。このような状況と、さきほどの「家族は大事」という傾向はどういう関係にあるのかということですが、家族と親族は違うのですね。親族に関しては形式的で結構です、一番煩わしいという感覚を持っている人が多くなり、でも夫婦と親子は大事だということでしょうか。しかし、夫婦関係というのも、いまの離婚率の状況を見ると、どこかで解体する可能性がある。そうすると一番大事なのは親子でしょうか。中年期の親子の同居が増えているといったような現象と通じているかと思います。中年期の親子というのは、いわゆる核家族の長期化です。結婚しない子どもと親の関係が中年期まで長期化し、やがて親が亡くなって単身化する動きです。

図3 「家族以外の人」と交流のない人の割合



(注) 友人、職場の同僚、その他社会団体の人々(協会、スポーツクラブ、カルチャークラブなど)との交流が、「全くない」あるいは「ほとんどない」との交流が、「全くない」あるいは「ほとんどない」と回答した人の割合(合計) (出典) OECD, Society at Glance 2005 edition, 2005, p8

- 親せきとの付き合いは部分的・形式的に。
- 老後は時々あって食事や会話をするのが良い。

図4：親戚とのつきあい方
(NHK放送文化研究所「日本人の意識調査」から)

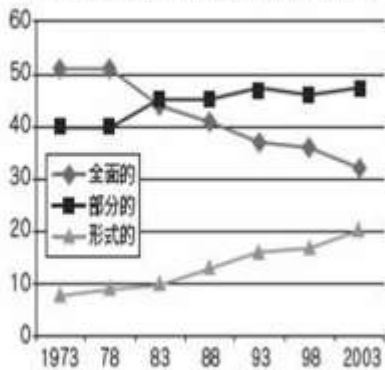
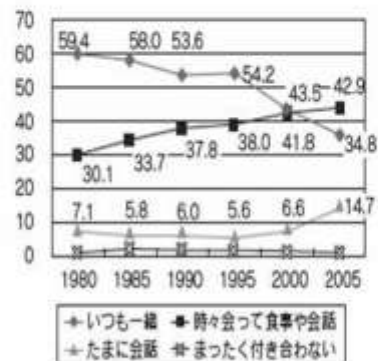


図5：老後の家族(子や孫)とのつきあい方
(内閣府「第6回高齢者の生活と意識に関する国際比較調査(2007)」から)



それから、もう一つは「会社との関係についての意識」ですが、90年代のフリーター急増の時代には、若い人たちの意識が変わってきたことがフリーター急増の原因だとする解釈が専らでした。たしかに会社人間として働くことに対する人々の”NO”という意識が背景にあったと思います。それから90年代、2000年代と雇用が不安定化していく中で増えてきているのは、やはり「終身雇用制がいい」、それから、「組織との一体感が望ましい」という考え方が、徐々に出てきているわけです。しかし、実際のところは、若い人たちは会社に入ってもやめます。ただし色々な理由でやめていて簡単ではないのでその辺のことは省略します。それから40代でいま肩たたきに遭うという状態ですから、とにかく安定した仕事がないと生活が成り立たないという事情が背景にはあります。しかし、いままで日本型雇用の働き方に対する否定的な心情があったにもかかわらず、人々の意識としてはやはり安定した帰属の場としての会社を求めるというある種の矛盾があるということです。昨日の訪問先や夜の交流会で、会社でずっと働いてきた男性たちが地域デビューすることに如何に大きなハードルがあるかというお話がありましたが、日本的な現役時代を変えるということなしにはハードルは低くならないわけです。しかし、意識の推移を見ると、必ずしも大きな変動が起こっているといえないような状況もあると思われれます。その上、65歳まではほぼ雇用が義務化され、やがては70歳までになりますね。そうした時、70歳まで会社が帰属する場という状態になっていくとしたらどうなるか、というようなこともあるかと思えます。

昨年、同じく『エンディングノート』というテーマをNHKのクローズアップ現代が取り上げたのです。人々のライフスタイルが、死を迎えるというイベントに向けて大きく変わっていることを示す動きを取材をして放送したものなのですが、とても視聴率が高くて、多くの人共感したのです。どういうことをやっていたかということ、先祖代々の墓には入りたくない、死後に子どもに負担を負わせたくない、墓守をする子どもがいない、あるいは墓がないという人たちが増えて、ほとんど女性ですけれども、その人たちが共同墓を用意する中で友達になっていくという動きです。その墓を用意したある女性が、自分の死を準備し、積極的に自分の人生の終盤を迎えようとしている...こういう放送だったのですが、これに対する投書もとても多くて、明るい人生が開かれた気がするというような投書が多かったのです。このテーマには、表と裏があるように思います。地縁・血縁から解放された自由な人生と裏腹に、寂しさや不安を抱えている人たちが非常に多いということ、そしてそれを乗り越えようとする女性たちの縁が無縁化に歯止めをかけようとしている...ということなのです。

“終活”にみる生き方の変化

NHK「エンディングノート」に登場する女性の生き方

- ▼《“墓友”でにぎわう集合墓》アパートのように他人同士で入る集合墓が人気。継承者必要とせず安価。
- ▼《しかし購入者は、一般家庭》購入者は子どものいる普通の夫婦。「墓は継いでもらわなくていい」
- ▼《単身者の“終活”どんなもの？何が必要？どんな苦労がある？》「墓を購入する人の多くは、自ら 最期をデザイン。深田桃代さん(60)。父母は他界、生涯未婚。5年前ガン判明。以来「ひとりでの死」を強烈に意識。「終活」にいそしむ。ひとり身で死ぬのにどんな準備が必要？どんなことが大切？

14

- 選択的人生の楽しさ・つらさ・寂しさ・リスク
- 女性が作る縁が無縁化に歯止めをかけている
- しかし、単身化は進む
- 男性(非婚・離婚・家庭内離婚)の増加で、縁の世界から切り離された男性の急増＝社会の無縁化が進む

15

しかし、日本全体を見れば、そういう動きはまだ本当に僅かです。しかも、先ほど申しましたように、その後景には、現役世代が身内の少ない状態で、結婚せずに人生の後半に入っていくという状態なので、終活に見られるような新しい縁作りの動きがマジョリティになっていかなければ日本の社会は救われないというような状態かと思います。

5. 再生産とケアの変容

再生産とケアの変容

家族の特徴

- ◆子どもを産む・育てる、病気や高齢者の看病や介護、心のよりどころとしての家庭作り(団欒・気配り気遣い)
 - ◆受け皿機能
身内の絆を維持し心の支えや拠り所
人々の全生活を丸ごと引き受ける場所
帰属する場所
 - ◆コーディネート機能
人々のニーズを満たすために
社会の資源につなぐ役割
- 子育て・介護を女性に負わせてきた社会のリスク
変容する家族と共に衰退**

16

その次に、再生産とケアの変容という話をさせていただきます。再生産...つまり子どもを産み育てる、それから人々の日々の再生産という機能をこれまで家族が担ってきたとされております。この再生産とケアが変化しつつあるのです。2030年になったときに4割の人は結婚していない・子供を持っていないと申しました。ということは再生産とケアという機能が正に変容するのです。そういう意味で、昨日見せていただいた動きは、正に変容するケアを人々が新たに地域社会に作ろうとしているという感じが致しますが、ケアは希少価値になりつつあると思います。

NPO 法人の介護者サポートネットワークセンター・アラジンという団体が、去年ケアラーに関する調査をやっています。高齢者ケアだけでなく、疾病や障害を持っている子どものケア、精神疾患その他さまざまな原因でケアを必要とする身内を世話している人、これをケアラーとよんでいます。そのケアラーがどのくらいいるかを調査した、とてもユニークな調査だと思っています。その調査でこういうことがわかりました。2割の世帯にケアラーがい

る、それから7.6%の世帯にケアではないけれども気遣いをしているケアラー、たとえば離れたところにいる高齢の親のことを常に気遣っているケアラーもいる。合計で5世帯に1世帯にはケアラーがいるということがまずわかりました。それからケアラーの2人に1人強が介護をしている。それから4人に1人は看病をしている。8人に1人は子供の療育をしているということです。ケアという機能が、生きる上でどんなに重要な営みであるかということのを改めて明らかにしたといえると思います。それと同時にケアラーは健康状態や経済状態、心の不調、負担、孤立感などの問題を抱えているというのです。この団体がいま目指しているのは、欧米に例があるようにケアラーに対する社会的支援を権利として確立しようというのです。

ケアは希少価値に

2割の世帯にケアラーがいる

19.5%の世帯にケアラー

7.6%の世帯に気づかいをしているケアラー

合計で5世帯に1世帯がケアラーのいる世帯

ケアラーの2人に1人強は「介護」

4人に1人は「看病」

8人に1人は「子どもの療育」

5人に4人は「世話」

7人に5人は「気づかい」など多様なケアを二重三重に

ケアラーは、健康状態や経済状態、こころの不調・負担・孤立感などの問題を抱えている。しかし、ケアは希少化しつつある

NPO法人介護者サポートネットワークセンター・アラジンとケアラー連盟

「ケアラー(家族などの無償の介護者)を支えるための実態調査」2010年

17

17

ケアそのものが希少化している、つまりケアを必要とする人たちの数は減っていないというよりもむしろ高齢化の中で増えているのに、ケアそのものが希少化しているという深刻な問題があります。得難くなってきているケアというものを新しく供給するために、日本の社会がどういふ問題を解決しなければならないのでしょうか。それは、戦後の日本の社会が家族と会社で構成されてきた社会であるということと密接に繋がっています。首都圏を考えてみても、「都市の中の村社会」と、ある人が表現をしております。つまり、東京というのは、村社会を背後に抱えて大都市に移動してきた人々の集合でした。団塊の世代が典型的にそういったライフスタイルを確立してきたわけですね。サラリーマン社会を作ったわけですね。サラリーマン社会は何で成り立ったか、会社と家族です。昨日見せていた

だいたドリームハイツと同じような団地群が都市部で同じような状況で高齢化しているのですが、団地というのは会社と家族という時代の器だと思います。社縁と血縁で成り立った時代の器ですね。今、社縁と血縁から解放された新しい縁を作らなければならないのですが、なかなか難しいことだと感じます。

家族とカイヤで構成されてきた日本社会

都市のなかのムラ社会

拡大・成長時代の関係性

カイヤと(核)家族=閉鎖性の強い集団

つまり社縁と血縁

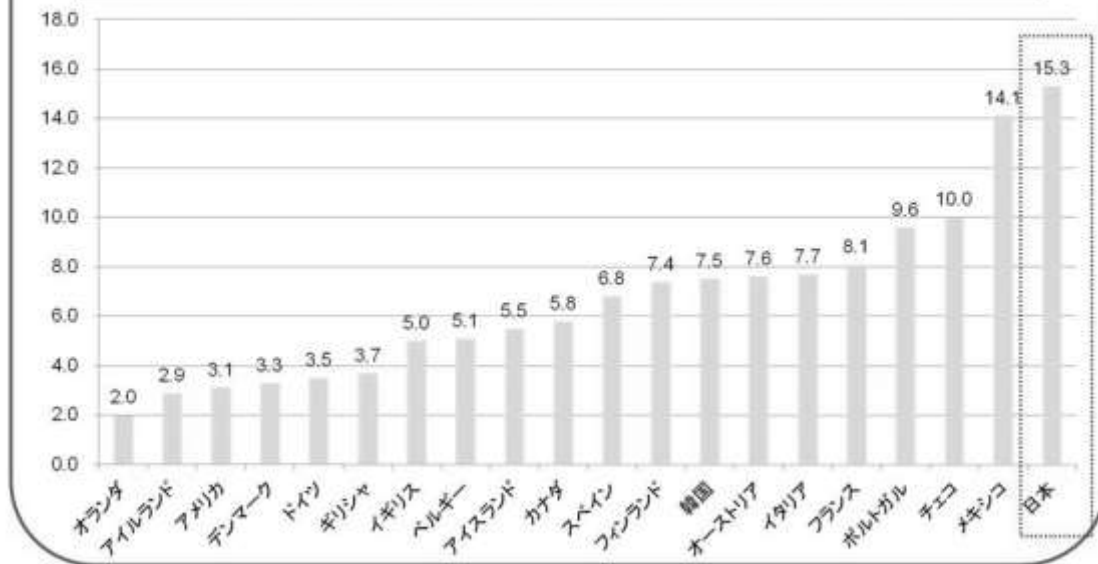
モノの豊かさのなかで関係性は問われない

男性稼ぎ主と専業(またはパート)主婦のセット

家族と会社以外での希薄な関係性

「家族以外の人」と交流のない人の割合（国際比較）

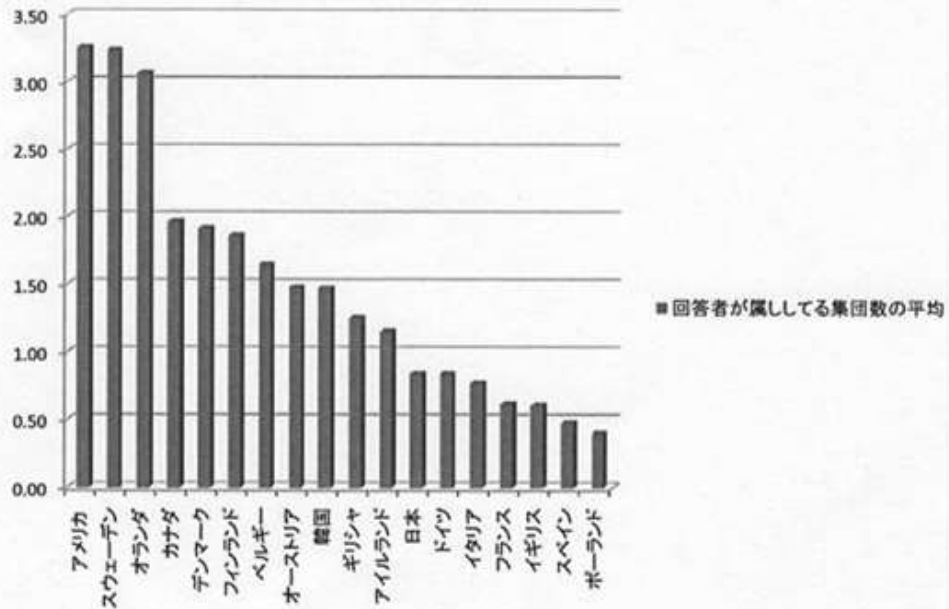
○ 日本では「友人、同僚、その他の人」との交流が「全くない」あるいは「ほとんどない」と回答した人の割合が15.3%あり、OECDの加盟国20か国中最も高い割合となっている。



(注) 友人、職場の同僚、その他社会団体の人々(協会、スポーツクラブ、カルチャークラブなど)との交流が、「全くない」あるいは「ほとんどない」との交流が、「全くない」あるいは「ほとんどない」と回答した人の割合(合計) (出典) OECD, Society at Glance 2005 edition, 2005, p8

これは OECD の資料ですが、「知人や仕事を越えた友人たちとどれだけ会うか」ということを聞いたもので、「そういう人がいない」という比率がダントツに高いのが日本で、15%くらいの方が知人や仕事を越えた友人たちと誰とも会わないといっています。他の国々はそれよりもぐっと低く、半分くらいです。これは男女別にしておりませんので、男性だけで見ればもっとダントツに高くなるはずですが、ある意味で異常な社会だと思えます。

3 いくつかの社会団体に属しているか

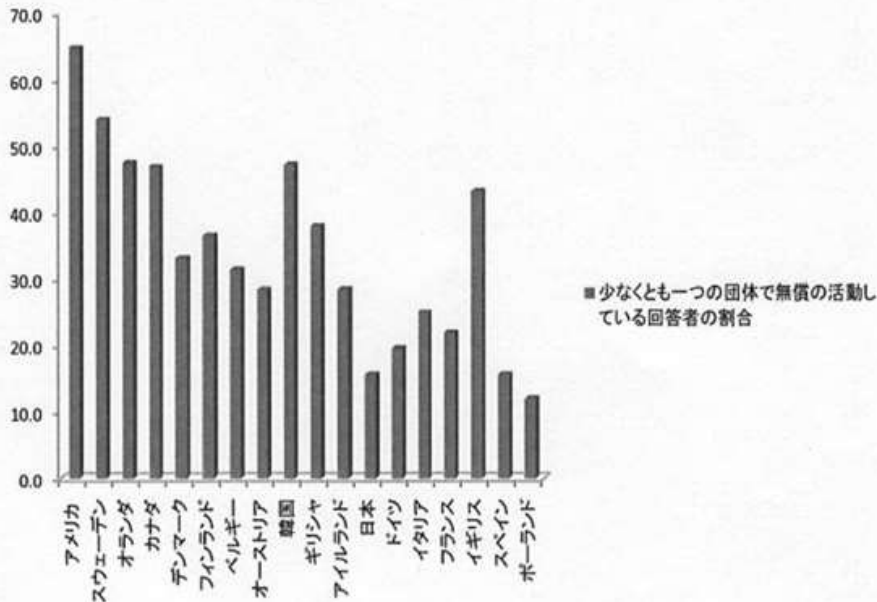


OECD Society at a glance 2009

社会関係作りの衰退は日本で著しい

それから「いくつかの社会団体に属しているか」を聞いたものですが、日本はぐっと下の方にありまして、男性の場合には所属するのは会社だけ、そこから地域にデビューしなければいけないわけですから、それこそ大きなハードルを飛び越えなければいけない状態にあるのです。アメリカ、スウェーデン、オランダが一番左のところであり、圧倒的に多く人が会社以外の団体に属している状態です。

4 少なくとも一つの団体で無償の活動をしている人



OECD Society at a glance 2009

日本では社会活動への参加が著しく弱い

それから「少なくともひとつの団体で無償の活動をしている人がどのくらいいるか」を表した図ですが、ボコンとへこんでいるのが日本で、一つ以上の団体で無償の活動をしている人が非常に少ないことがわかります。男性は会社で生き、妻子を養う。つまり男性は妻子のために生きている...まあ綺麗に言うのですけれども（笑）。ですから、妻子のために生きている男性が、経済的に厳しくなり、妻子を養えなくなった時にどうなるか・・・家族から追い出されます。（一同笑）いま、団地の孤独死、それから現役の一人暮らしの男性の中に正に妻子に捨てられた男性が増えているという感じがするのですが、これも社会のために生きないで妻子のために生きてきた男性が、稼げなくなったら終わりという厳しい現実を示すものだと思います。

家族の特徴的な機能

受け皿機能

＝人々の全生活を丸ごと引き受ける場所

帰属する場所＝

コーディネート機能

＝人々のニーズを満たすために

社会の資源につなぐ役割＝

めざす方向

- 家庭に代わる居場所を作る
- コーディネート機能・・・共助と公助のセット
パーソナルサポート
絆を制度化する

22

「家族以後」の時代には、新しい格差”がある

- 高齢者の孤立死の7割(発見に4日以上要した)は男性。誰とも付き合いのない孤独な高齢者の大半は男性。介護殺人の多くが夫・息子など男性介護者で発生
- 熱中症死者は、単身高齢者・夜間室内で
- 身内との縁が切れた単身中年男性の増加
稼ぎ手の役割を果たせない男性の無縁化
- ケアという社会資源の確保と公平な分担ができないまま、衰退していく社会
- 人と交わる力、他者(弱者)への気遣いとケアが衰退する社会は持続できない

23

6. グループリビングの可能性

さて、これだけ家族というものが希少な価値になり、若い人たちの中で恵まれた人は結婚でき家庭が持てる、恵まれない人は家庭が持てないという非常にわかりやすい構図が、若い人たちの中に如実に現れています。若い人だけでなく、中年期から初老期で家族を失った人々（特に男性）を見ると、経済的・社会的に恵まれていない人に特有の現象になっております。上野千鶴子さんの『おひとりさまの老後』がベストセラーになりましたが、アマゾンのサイトを見ますと、読者がコメントを書く欄がありますね。ちょっとお暇の時に覗いていただくとわかりますが、上野さんの著書に対して猛烈な反発がたくさん書いてあります。その反発の多くが上野さんの描くおひとりさま高齢者の明るい未来というのは、上野さんのような恵まれた人たちの話だ、自分たちにはそんな老後はないという批判です。いまの日本の状況がある意味でよくわかるような気がします。つまり、ポスト家族の時代は新しい格差の時代だということです。そういう意味で、地域における取り組みは、新しい格差に歯止めをかける活動になっていかなければいけない、ということになるのではないのでしょうか。

グループリビングの可能性 ～コミュニティと仕事作り～

- 仕事は地域コミュニティのなかにある。新しいホーム作りと仕事の掘り起こしとコミュニティづくりは一体的な関係。福祉政策・労働政策・地域振興策や地域計画とがもっと緊密に結合する必要がある
- 地域密着型の新しい仕事起こしが、社会的孤立化や社会的格差の拡大など、社会的課題の解決にとっても役割を果たせるはずである。

そこで、最後ですが、グループリビングの可能性を私なりに考えてみました。グループリビングはたいへん多様な意味合いを持った活動だという感じが致します。一つは家族の超え方です。日本的な家族の超え方を示していると思います。それから、家族というものを社会に開く方法を提案する活動だろうと思います。それからすでに理論化されていることですが、コミュニティの仕事を作るきっかけになる活動だと思います。昨日見せていただいた“ふらっとステーション”，その他の多くのドリームハイツの活動もそうですが、地域の中に仕事を生み出す可能性を秘めていると思います。実は若者の就労問題にかかわってきてつくづく思うことは、いまの労働市場は極めて選別的で、ハンディを持っている人が仕事を自得自活をすることがとても難しいということです。生きていかれる仕事をどうやって作るか、たくさんのお金がなくても暮らせる社会をどうやって作るかということがとても大きな課題です。そのような仕事は、地域社会の中で衰退してしまったのです。また、新しいニーズが、新しい仕事を求めていることも事実です。そういうものを作っていく活動と繋がるものだという感じが致します。若者に関していうと、躓いている息子さん娘さんを持っている親たちが、早く立ち直って早く正社員として来月から就職してほしいとか言うわけですが、現実にはそんなに単純ではない。まずはリアルな仕事の中で体験をさせてもらうこと、訓練してもらうこと、そこでうまくいったら、何かできる仕事に就かせてもらうこと、というプロセスがとても重要だという感じがしています。昨日拝見した横浜市内の取り組みは、正にそういう場を作る可能性をたくさん秘めているという感じが致しました。

それから、高齢社会と単身社会は、これまで家族の中に埋もれていた家事労働、ケアワークも含む家事労働を社会の中に可視化することが現実性を帯びた社会だと思えます。これは日本の家族を変える非常に重要なものだと思います。家族の中に埋もれていて、女性たちが当然の義務としてやってきた仕事、外には全然見えない仕事、これを可視化することは何十年にもわたって大きな課題でした。正にいま現実のものとなっています。可視化された家事労働、ケア労働を社会が担っていくという課題を議論するのに、いまとても重要な時期に差し掛かっているのではないかと思います。時間になりましたので、ここまでにさせていただきたいと思えます。どうもありがとうございました。

結 論

**男性が作ってきた縁ではなく
女性が作る縁が社会を救う**

**無縁社会に歯止めをかける営みへ
積極的に参加すること**

グループリビングはその一端を担うムーブメント


25



VI パネルディスカッション

1 パネリスト講演

1. 地域へ開くグループリビング―「たすけ愛の家」



星川 光子氏

- NPO法人いぶりたすけ愛理事長
- グループリビング運営協議会理事

社会福祉士
1995年登別ライフケアを考える会発会（現 いぶりたすけ愛）、1999年NPO法人格取得。現在にいたる。2006年グループリビングたすけ愛の家を開設。2012年度お年寄りが幸せに暮らせる社会を作る活動事業主体

パネリスト

それでは地域へ開くグループリビングというテーマで、たすけ愛の家の活動を紹介させていただきます。

たすけ愛の家はJKAの補助を受け、2006年にオープンしまして、いま7年目を過ぎようとしています。

登別市は、登別温泉がよく知られていると思いますけれども、昨年の11月末の大停電で知名度があがってしまったのではないのでしょうか？

人口は年々減る一方で、高齢化率は反対に上がる一方です。今年度中に、30%になると予測されております。高い方だとおもいますが、昨日のドリームハイツさんが40%と聞き、本当にびっくりしてしまいました。高齢者がどのように生きるのかということが、これからの町に大きな影響を与えるのではないかと考えております。



NPO法人いぶりたすけ愛の歴史

- 1995年 設立総会 社協に机を借り在宅サービスと移送・送迎サービス開始
- 1996年 家賃8千円の事務所を借りる
- 1999年 NPO法人の認証おける
- 2000年 一軒家に事務所移転 介護保険事業開始
- 2001年 コンビニ跡に事務所移転 サロン開始
- 2002年 配食開始
- 2006年 グループリビング「たすけ愛の家」開設
- 2011年 社会起業家集団「ともかな」オープン

NPO 法人いぶりたすけ愛は、1995年に発会し、在宅サービスと移送・送迎サービスを始めました。きっかけは、ボランティア活動を経験しまして、自分もこれから介護をするとき、介護を受ける時、こんな少ないサービスでは困る、と思ったのがきっかけです。主婦仲間に声をかけて、できることをしよう、という思いで、たすけ愛を作りました。

1999年にはNPO法人の認証をとり、2000年から介護保険事業を開始しました。そして2001年に事務所を少し広いところに移ったものですから、サロンを開始しました。2002年には配食を始めました。そして2006年から、グループリビング「たすけ愛の家」を開設しました。2011年からは「社会起業家集団『ともかな』」というのをオープンしております。いぶりたすけ愛が18年間こうして続けられたのは、次々と新しい事業に取り組んできたからではないかと思っております。グループリビングも活動の中で、最後まで地域で安心して暮らすことが難しいという現実を知りまして、自分たちが暮らしたい所を目指して作りました。

◎たすけ愛事業

あなたの『たすけ』は私の『たすけ』

- 会員制(入会金1万円、年会費なし)
- 双方向性の会員(約850人)“出来ることを出来るときに”

在宅サービス (掃除・買物・草取り・雪かきなど)

サ ロ ン (カラオケ・麻雀・囲碁・パソコンなど)

配 食 (日曜日以外の毎日 夕食を届ける)

高齢者生き生きグループリビング (9室)

たすけ愛の事業を紹介したいと思います。会の理念は「あなたの『たすけ』は私の『たすけ』」です。会員制で、お金と知恵と労力を皆で出し合って会を作っています。会員は双方向性の会員となっており、お手伝いをすることも受けることもできます。現在 850 人くらいの会員がおり、毎年、50 人ほどの入会があります。在宅サービス、サロン、配食、高齢者生き生きグループリビングが、たすけ愛事業に属しております。

◎優サービス 指定居宅サービス事業所

 指 定 居 宅 訪 問 介 護
(介護保険・障害者自立支援)

 指 定 居 宅 支 援

 福 祉 有 償 運 送

優サービスというのが、プロの専門職の部分です。介護保険の訪問介護、ケアマネ、福祉有償運送をやっております。

たすけ愛事業と優サービスは事務所を全く別にしてやっております。一階がたすけ愛事業、二階が介護保険事業という形になっております。

社会起業家集団「ともかな」

「ともに夢をかなえよう！」

社会起業家集団「ともかな」が地域を変える

社会貢献したいと考える高齢者や障がいを持った人たちが、共に夢を叶えるために自分の知識や技能を活かして、事業や活動を展開する場

- カフェ&喫茶（ワンディシェフ）
- 物づくり・販売（駄菓子屋）
- 子育てスペース（子育てひろば「ともとも」）
- 片親家庭のための住居（2DK 2部屋）



カフェ&喫茶



物づくり



子育てスペース

そして、二年目になります「社会起業家集団『ともかな』」があります。～ともに夢を叶えよう、「社会起業家集団『ともかな』」が地域を変える～ということで、ともに夢を叶えようから、「ともかな」と名付けました。

社会貢献をしたいという高齢者や障害を持った方たちが、皆で助けあってともに夢を叶えようというところです。一階がカフェと喫茶になっております。これはワンディシェフ方式になっておりまして、その日によってシェフが替わります。

この写真に載っておりますのは、地元の社会福祉法人の就労継続支援 B 型事業ピアチェーレの方たちです。パン作りをされていて、パン、丼、麺類などのランチを提供してくれています。

物づくりでは、はじめは 4 人くらいだったのですが、いまは 19 人が作品を出しています。この場所で、売ったり作ったりということをしております。

子育てスペースでは、「子育て広場 『ともとも』」がサロンを行なっております。

そしてこの建物の二階は 2DK のアパートが 2 間あります。片親家庭のための住居となっており、二組の母子が住んでおります。安定した収入がない「ともかな」は運営が難しいということでアパートを作りました。

この企画書を見て「これは妄想だ」と言った方がいるのですが、あきらめないでやってみれば夢も叶うのではないかなあと考えています。

○「いぶりたすけ愛」と「ともかな」



いわた内科クリニック

コープさっぽろ

これは「いぶりたすけ愛」と「ともかな」の写真です。手前のほうが「いぶりたすけ愛」でJKAの補助で建てることができました。奥のほうが「ともかな」で、国の共生型基盤整備事業でお金をいただいて建てております。「いぶりたすけ愛」は主婦が集まって始めましたので、お金は全然ありませんので、どちらも補助事業のおかげです。

向かいがコープさっぽろというスーパーです。隣が内科のクリニックです。内科クリニックの隣には幌別川がありまして、白鳥が来たり、鮭が上ってきたりしています。またこちら側にはコンビニ、郵便局があり、利便性のいいところだと思っております。

高齢者生き生きグループリビング 「たすけ愛の家」



誕生日会



打ち合わせ（週に1回）

自立と共生の暮らし

高齢生き生きグループリビング「たすけ愛の家」のことを、お話したいと思います。この写真は去年1月の誕生日会の様子です。「たすけ愛の家」では自治会費を集めて、誕生日会をしたり、お花見、紅葉狩りにいったりとか、慶弔費などにも使っています。

この日はお寿司屋さんに来ていただいて握り寿司を好きなだけ食べました。出かけるのも大好きで室蘭って工場の夜景がすごく綺麗なのです。白鳥大橋とかも。昨日マリンタワーに登りまして、それもすごく良かったです。室蘭も負けていないな、と思いました。是非いらしてください。夜景を見ながら夕食を食べたりだとか、隣の白老町では白老牛が有名なのですが、そこで牛を見ながらすき焼きを食べたりだとか、そういうこともやっております。

こちらは打ち合わせの様子です。はじめはミーティングと言っていたのですが、一人のおじいさんが「なんで英語を使うのだ！」と言われて打ち合わせと言うようになりました。週に一回、集まって暮らしのこととか皆で話し合いをしております。

食事作り 昼・夕 365日 10人のメンバーが
交代で1日2人～5人が入る（たすけ愛会員）

共用部分の掃除 365日 6人のメンバーが交代
で 1日1人～2人が入る（たすけ愛会員）



「たすけ愛の家」の一日は大変賑やかです。まず食事作りの方が365日昼と夕食だけなんですけれども、10人のメンバーが交代で一日2人から5人は入るようになっております。朝は各自の台所で作ったりするようになっております。また、共用部分の掃除に関しましても、これも365日いまは6人のメンバーが交代で一日1人か2人が入るようになっております。

この籠の写真は当会の配食です。配食はお弁当箱ではなく、カゴに入れて、食卓を届けますということでやっておりまして、好評です。

それとサロンは、会員さんに場所を提供しております、会員さんが自由に使ってくださいということで、皆さんにやっていただいています。自分がやりたいこと、教えたいことで、内容が増えていきまして、カラオケ、薬膳料理、パソコン、絵手紙、体操教室、囲碁、麻雀、俳句、短歌、歌声喫茶、などがあります。この左の一番下は体操教室の写真ですが、97歳のおじいちゃんが、元鍼灸の先生だったんですけれども、体操を皆さんに教えたいと、体操教室を開いてくれております。座ってやれる体操なので、大変好評です。

サロ ン



お互いに元気をもらっている

- カラオケ・薬膳料理・パソコン・絵手紙
- 体操教室・囲碁・マージャン・俳句・短歌
- 歌声喫茶・麻雀

俳句教室も人気があります。これはグループリビングの生活者が、その頃は90歳くらいだったのですけれども、もっと俳句を勉強したいということで、俳句教室が生まれました。その方は本当に一生懸命に勉強されて、俳句の大会で賞をもらったりとか、お〜い お茶新俳句大賞でも佳作特別賞をもらったりとか、まだ届いてはいないのですが、お茶のパッケージにも載る予定なのです。その方が亡くなられて、今は、俳句の先生が「たすけ愛の家」に暮らしております。

カラオケの皆さんは、忘年会を自分たちで計画して行ったりしています。監獄というカラオケ店に行って皆で歌って来ましたとか言って、90歳の方達が、面白かったよーとか言うんですけれども、私なんかは行ったこともないので、間違っって棺桶とか言ってしまい、笑ってはいけないような言葉になってしまったんですけれども（一同笑）

「ともかな」駄菓子屋のオーナー

- 会話のある駄菓子屋
小学生が学校であったことを話してくれる
特別学級の買い物体験

たすけ愛の家の役割
資金・チラシで袋づくり



「たすけ愛の家」がオーナーの「ともかな」の駄菓子屋のことを紹介したいと思います。「ともかな」では、会話のある駄菓子屋というのを目指しておりまして、駄菓子屋を出しています。先程言ったようにグループリビングの皆さんは、自治会費を月に3,000円集めているんですが、多すぎてどんどん溜まっています。もっと安くしたらどうですか？と何回も言うのですが、皆さんは、いや何かあったら困るから集めたいと言います。二年前に「ともかなが」出来る時に駄菓子屋を出しませんかと提案しましたら、了解していただき駄菓子屋のオーナーになってくださっています。そこでは資金の提供と新聞のチラシで袋作りを生活者がやってくれております。

駄菓子屋では、小学生が学校であったことを店番の方に報告してくれたりして、主に店番をしてきているのは車椅子の方ですが、やりがいがあるようです。バリアフリーですので、特別支援学級のお子さんが買い物の体験に来てくれたりとかしております。ミーティングのときには、売上がいくらぐらいでしたよ、こういうことがありましたよということを報告するようにしております。一生懸命チラシで袋を作ってくれている人がいるのですが、店番の人によりますと、ある時、小学生の子が「可愛い袋にしてね」と言ったそうです。やっぱりチラシじゃだめなのかしらって思って、よくよく聞いてみましたら、チラシの中でも洋服のついたチラシが好いということだったようです。いまパチンコ屋のチラシが多いですからね。ああそういうことだったのかと分かって安心したことがあったそうです。高齢者の“もったいない”の精神も伝わっているのではないかと思います。

餅つき&演芸大会&そば打ち H24/12/16

- 郷土資料館より杵と臼を借りて餅つき
- 演芸大会それぞれの特技を披露
生活者も詩吟・小話・民謡・コーラスを披露
- 郷土資料館のボランティア団体が手打ちそばを作ってくれる。



最後の写真になりましたが、これは去年の12月に餅つきアンド演芸大会アンドそば打ちを会員に呼びかけまして、行いました。50人ぐらいが参加して、杵と臼を借りて、餅をつきました。演芸大会では仮装で安来節を踊ってくれた方もいました。また、郷土資料館のボランティアの方たちがそばを打ってくださって、皆で楽しんだという写真です。

現在たすけ愛の家には男性4人女性5人の9人が暮らしております。たすけ愛の家に暮らすきっかけは、もともと会員だった方が3名います。そのうちの1人はずっとたすけ愛のお手伝いをしてくださっていた方です。そして会員からの紹介で入った方が2名います。あと病院の相談室から紹介された方も2名います。あと生活者の友人で、良いところだとすすめられて、という方もいらっしゃいます。あと俳句教室の先生です。

現在入居を待っている方は、サロンに参加している方が多いです。生活者の様子を実際に見て感じて入居を希望していただけるのは大変嬉しいことだと思っております。生活者9人がそれぞれの生き方を大切にしながら助けあい、励まし合ってグループリビングという新しい暮らし方を地域に発信しております。私たちはその応援ができることはとても幸せなことだと思っております。

時間になりましたので、これで終わらせていただきます。ありがとうございました。

2. 地域とつながる取り組み—「モーニング」



私どもの法人では、グループリビングは2つあるんですが、1つ目が福島県の補助事業で作ったモデル事業で、平成15年なんですけど、それが平成21年にJKAさんの補助事業ということで、2つ目を開設しました。

お手元の資料の23ページになります。ご覧いただければと思います。私ども社会福祉法人福島福祉会では、一番にございますが、21世紀の老人医療、福祉、介護を考えるシンク21グループということで、その傘下の1つになっております。一番ですが、医療法人がまず1つございます。あと2つ目に社会福祉法人同じですけども、こちらの方のライフタイム福島というところが1つ、(3)ですが、私ども社会福祉法人福島福祉会ということで、同じグループの中に1つの医療法人、そして2つの社会福祉法人がございます。私どもはこの(3)ということで、福祉会の方をやっておりますけれども、その中には社会福祉法人の中でも第一種の社会福祉事業ということで視覚障害者ということで視力に障害がある方、こちらの方を収容している施設もございます。第二種社会福祉事業としましては、デイサービスセンター、そしてショートステイ、ホームヘルプステーションを併設で行なっております。そして、三番目ですけども、公益事業として福島県の高齢者対策モデル事業、高齢者グループリビングということで1つ目を作らせていただきました。その後、財団法人JKAさんの方で助成をいただきまして、高齢者の生活共同運営住宅高齢者生き生きグループリビング。そして、福島市の飯坂温泉がございましてけれども、温泉を利用した介護予防事業として湯ったりデイサービス。そして居宅介護支援センター、そして福島市飯坂東地域包括支援センター。そして12月から定期巡回・随時対応型訪問介護看護事業。そして訪問介護ステーションを運営しております。二番目ですけども地域の高齢者取り巻く背景ということで、ただいまご案内したとおり、私ども法人は福島市の北東部飯坂温泉に隣接しているところに位置しております。高齢者を取り巻く背景ということで、二番目に書いてございますが、福島県立のリハビリテーション、こちらの方も温泉を利用していた病院が廃止となりました。そして二番ですが、地域の看護、温泉、飯坂温泉の衰退、そして三番、衰弱、介護、認知症高齢者、そして独居の高齢者の増加ということで、福島市の高齢者の調査の結果から明らかになっております。そして四番目は、一昨年の東日本大震災での仮設での高齢者の増加ということが、いま高齢者の背景を取り巻いております。で、24ページですけども、先程ご案内したとおり、グループリビングのモデル事業としてどう

して始まったのかということが書いてございます。最初は平成14年のモデル事業ということで、高齢福祉課の方から、高齢者グループリビングモデル事業の実施についての募集がございました。内容はその下に書いてあるとおりです。高齢者自身が加齢による身体機能の低下を補うために、お互いの生活を共同化・合理化して共同で住まう一定の居宅形態を高齢者の居住形態の1つとして位置づけるとともに...ということを書いてございます。で、福島県では当法人しか手をあげなかったもので、県内では1つだけだったんですね。そのときにうちのほうで居宅の飯坂の地域の高齢化の内容を調査いたしました。そのときに、やはり高齢化率...真ん中の方に書いてあるんですけども、当在宅支援センターにおいて地域福祉サービス等のご利用者様の把握を行った結果、地域における単身世帯独居老人の世帯が多く分布しており、老人家族及び独居老人が増え、自立促進残存機能維持し、介護予防を行い安全を確保しながら、ご利用様が共同で生活を行う必要性が高いということが判明いたしました。現在グループリビングは敷地内にあります介護保険対応施設であるデイサービスセンター、そしてホームヘルプステーション、地域包括支援センター、訪問介護、定期巡回・随時対応型の訪問介護、介護事業等のご利用により充実した生活を作ることができております。また、ご利用皆様のご希望によりまして内科嘱託医による診療、そして心療内科の嘱託医によるカウンセリングの往診、そして訪問歯科受診等のご利用者様の健康管理でのサポート面の体制が確立されております。以上のようなことから、福祉社会も医療面での安心に繋がっております。25ページになりますけれども、地域につながるグループリビングということで、地域との関係...、食事作りですけれども、地域の人材、そしてシルバー世代のマンパワーを活用しております。生活支援サービスの方もライフサポーターとして、やはりシルバー人材センターのこういった資源を利用しています。食材においても地域の商店の方から地元の食材を購入していただいております。そしてアトリエの活用ですが、介護、調理実習、学生のボランティアなど活用しております。そして地域資源の利用においても、地域ボランティア、地域の祭礼、趣味の仲間との交流などが挙げられております。二番ですが、地域へ開くことの意味ということで、多分こちらの映像でも後で出てくると思うんですけども、やはりいまの季節、冬の雪の心配であるとか転倒、そして自宅での身体的な状況の低下、病院や介護保険施設から退院後自宅での生活、そして不安...困難な状況があるということで、やはり独居生活の困難さまたは住まい状況は身体、環境、状況の変化によりまして当たり前だと思っていた生活がなかなか継続できなくなってくるということがございます。やはりその時に選択のひとつとして、このグループリビングがあつてよかったと思っただけならばということで、いま民生委員会の定例会とか介護教室等で広報活動を広げているところがございます。そして3番ですが、課題ということなんですけど、去年ですね、10月に開催されましたグループリビングワークショップ北海道の自立と共生の暮らしを広げる研修会の日に昨日代表で出ておりましたがCOCO湘南の高坂さんのご意見がありました。やはり自分も居場所があるということ、そして人として尊厳を持って生きられるということが、とても大切だというお話がございま

した。また、高坂さんは一昨年もやはり北海道の方においでになられて、とても住み心地がいいということで、とても幸せですということをお話されておりました。このように、全国にグループリビングの輪が広がるということは、もちろん入居者様も同様に繋がっていくということになると思います。歳を重ねていくこと、そしてその素晴らしさを実感出来ました、本当に素晴らしいなと私も感動いたしました。現在、グループリビングモーニングでは、いまゲストルームはご家族様のご利用はもちろんですが、東日本大震災から全国災害ボランティアが駆けつけてくれたり、ご協力をいただきました。また現在でも神奈川の女性の方たちが、ボランティアの方ですけれども、夜行バスをご利用されて定期的に震災援助活動のためにいまグループリビングのゲストルームの方を活用されております。今日もお誘いをしたんですが、たぶん来ていないところを見ると、おいでになれなかったのかなぁと思いますけれども。いまお話ありましたように、本当に高坂さんのお話もそうですが、高齢者の入居される状況は人さまざまだろうと思います。また実際にご入居されている方からの話をお聞きいただいて、本当はこれ今日の映像で見ていただきたかったんですけれども、いろいろ入居体験をされる方、また退院後の不安や介護状態になり退去される方、あるいは看取りという安らかな最後の迎えるエンゼルケアまでご入居者様ご自身で選択する自由があるとございます。極当たり前のことですが、人は生まれて呼吸を始め、やがて自分の足で歩き始めますが、社会の一員として自立、そしてお務めを果たし、やがて年月とともに歩けなくなり食事もままならず呼吸が止まるのです。これは極自然で当たり前のことだと思います。自分の大切な人生をどこで暮らして、そしてそのときに私たちがそばにいれるような存在になれば、私たちグループリビングを開設した意味があるのかなと思います。社会福祉法人という私たちは地域に対して住み慣れたご近所にお住いの方々や地域の方々が健やかに歳を重ねて生きていく中で高齢になられてもできるだけご不安のないように、また介護や福祉で困ることがないように心配することがないように、やはりこれからも地域の方々の大切なお声をしっかりと聞き取り頼りにされるそんな存在としてともに生きてまいりたいと思っております。以上でございます。

「地域とつながる取り組み」

社会福祉法人 福島福祉会
常務理事 清野恭子

1. 21世紀の老人医療・福祉・介護を考える「シンク21」グループについて

(1) 医療法人白寿会

- ・病院，介護老人保健施設，短期入所療養介護，通所リハビリテーション，訪問介護ステーション，訪問リハビリテーション
訪問介護サービス，居宅介護支援事業所，地域包括支援センター

(2) 社会福祉法人ライフ・タイム・福島

- ・特別養護老人ホーム，グループホーム，デイサービスセンター
ショートステイ，ホームヘルプステーション，小規模多機能型
居宅介護事業所，居宅介護支援事業所，地域包括支援センター
24時間訪問介護看護事業所，地域サロン

(3) 社会福祉法人福島福祉会

- ・第1種社会福祉事業
養護盲老人ホーム
- ・第2種社会福祉事業
デイサービスセンター，ショートステイ
ホームヘルプステーション
- ・公益事業
福島県高齢者対策モデル事業高齢者グループリビング
財団法人JKA(旧競輪)助成事業高齢者生活共同運営住宅高齢者
生き生きグループリビング，福島市温泉利用介護予防事業「湯つ
たりデイサービス」，居宅介護支援センター，福島市飯坂東地域
包括支援センター，定期巡回・随時対応型訪問介護看護事業
訪問看護ステーション

2. 地域の高齢者を取り巻く背景について

- (1) 福島県立リハビリテーション飯坂温泉病院の廃止
- (2) 地域観光飯坂温泉の衰退
- (3) 衰弱・介護・寝たきり・認知症高齢者・独居高齢世帯等の増加
(福島市高齢者調査集計結果から)
- (4) 東日本大震災による仮設住宅での高齢者の増加

3. グループリビング支援モデル事業の必要性について

- (1) 福島県高齢福祉課より、平成14年度のモデル事業として「高齢者グループ・リビング支援モデル事業の実施について」の募集がございました。
<平成8年5月10日老計第84号による、厚生省老人保健福祉局老人福祉計画課課長通知>

内容は次の通りです。

「高齢者自身が加齢による身体機能の低下を補うため、互いに生活を共同化、合理化して共同で住まう一定の居住形態を今後における高齢者の居住形態のひとつとして位置づけるとともに、一定の条件を満たしたグループリビングについて公的ケアサービスの提供や近隣住民、ボランティアによる各般の生活援助を組織する事業を行うことにより、高齢者自身が自立した生活を継続できるよう地域ぐるみで支援する体制を構築する事業をモデル的に実施し、事業の効果や評価を得て今後の老人福祉の推進に資することを目的とする。」

①当法人は、措置施設である養護盲老人ホーム（緑光園）と介護保険対応施設（グリーンライト）のデイサービスセンター、ホームヘルプステーション、ショートステイ、居宅介護支援事業等の在宅サービスの施設機能を持つ社会福祉法人です。

ご利用者様も順調に増加をしており、飯坂地区における地域高齢福祉の拠点としての役割を果たしています。

当時、在宅支援センターにおいて、地域福祉サービス等のご利用者様の把握を行なった結果、地域における単身世帯や独居高齢者世帯が多く分布し、核家族による老人家族及び独居世帯が増えており、自立促進・残存機能を維持し、介護予防を行い、安全性を確保しながら入所利用ができる共同生活を行う施設の必要性が高いことが判明いたしました。

②現在「グループ・リビング」は、敷地内にある介護保険対応施設のデイサービスセンター、ホームヘルプステーション、地域包括支援センター、訪問看護、定期巡回・随時対応型訪問介護看護事業等のご利用により充実した生活を送ることができ、またご利用者様のご希望により内科嘱託医による診療、心療内科嘱託医によるカウンセリング往診、訪問歯科受診等は、ご利用者の健康管理でのサポート体制が確保されており、福祉・介護・医療面での安心につながります。

(2) 「地域につながるグループリビング」

① 地域との関係

- ・ 食事作り…地域の方や、シルバー世代のマンパワーの有効活用
- ・ 生活支援サービス…ライフサポーターシルバー人材のスキルの資源利用
- ・ 食材購入…地域商店からの地元食材の新鮮材料購入
- ・ アトリエの活用…介護・調理実習教室・学生のボランティア・交流会
- ・ 地域資源の利用…地域ボランティア、地域祭礼、趣味の仲間との交流

② 地域へ開くことの意義

- ・ ご自宅でお元気に住まわれても、冬季の期間や（雪の心配・転倒等），あるいは身体的状況の低下，病院・介護保健施設からの退院後に自宅での生活や家事への不安や困難な状況，または不慮の事故，怪我あるいは病気による独居生活の困難さ等で，住まう状況は身体・環境の変化により，自宅での当たり前と思っていた生活が継続できなくなることがあります。

そのときに，選択肢の一つとして「グループリビング」があつてよかった。

「あそこにいれば安心。」と地域の方々にご理解をいただけるよう地域の民生委員定例会や，介護教室等で活動を広めています。

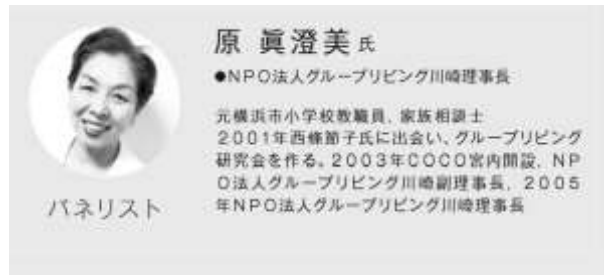
③ 課題について

- ・ 昨年10月に開催されたGLワークショップ北海道「自立と共生」の暮らしを広げる事業の研修会IN釧路での3日目の作戦会議では，GL神奈川「COCO 湘南台」の生活者の立場から高坂嘉代子氏が映画，「ホームスイートホーム」の中から，【自分の居場所があること】，【人として生きられること】の大切さをお話されていました。
一昨年も，7～8月北海道のGL「ほがら館」で避暑に来て滞在をした高坂さんは，今回また利用させていただき，「とても幸せです。」
このように全国にGLの輪が広がることは，入居者様も同様につながることになり，とても素晴らしいことです。
年齢を重ねることの素晴らしさを実感できました。素晴らしい人生のナビゲーターです。
- ・ グループリビング「モーニング」のゲストルームは，ご家族様のご利用はもちろん，東日本大震災直後から全国（北海道から大分県まで）災害ボランティアが駆けつけてくださりご協力をして頂きました。現在でも神奈川のボランティアの方々や夜行バスをご利用され，定期的に震災援助活動のためにご利用いただいております。
- ・ 「高齢者の入居される状況は人様々ですし，実際にご入居様からのお話をお聞きいただいて，入居体験をされる方，また退院後の不安や介護状態

になり退去される方や、あるいは看取りという安らかな最期を迎えるエンゼルケアまで入居者ご自身で選択する自由があります。

- ・ 人は生まれ、呼吸を始め、母乳を吸い、自分の足で歩きだすのです。そして社会の一員として自立し務めを果たし、やがて年月とともに時間の流れで徐々に歩けなくなり、食事も儘ならず、呼吸が止まるのです。それはごく自然なこと。誰でも皆同じです。
- ・ 大切な自分の人生、どこで暮らし、そのときを迎えたいのか、あなたの傍らで心優しく静かに寄り添い、温かな眼差しで手を握り締めてほしい人は、どなたでしょうか？
そのような存在になれば幸せです。
- * 住み馴れたご近所にお住まいの方々や地域の人たちが、歳を重ねて生きていく中で、高齢になってもできるだけ不安の無いように、介護や福祉で困らないように、悩むことのないように安心して生活を送ることができるよう、これからも地域の方々の大切な声をしっかりとお聴きして頼りにされる存在として“共生”していきたいと思えます

3. COCO 宮内の取り組み

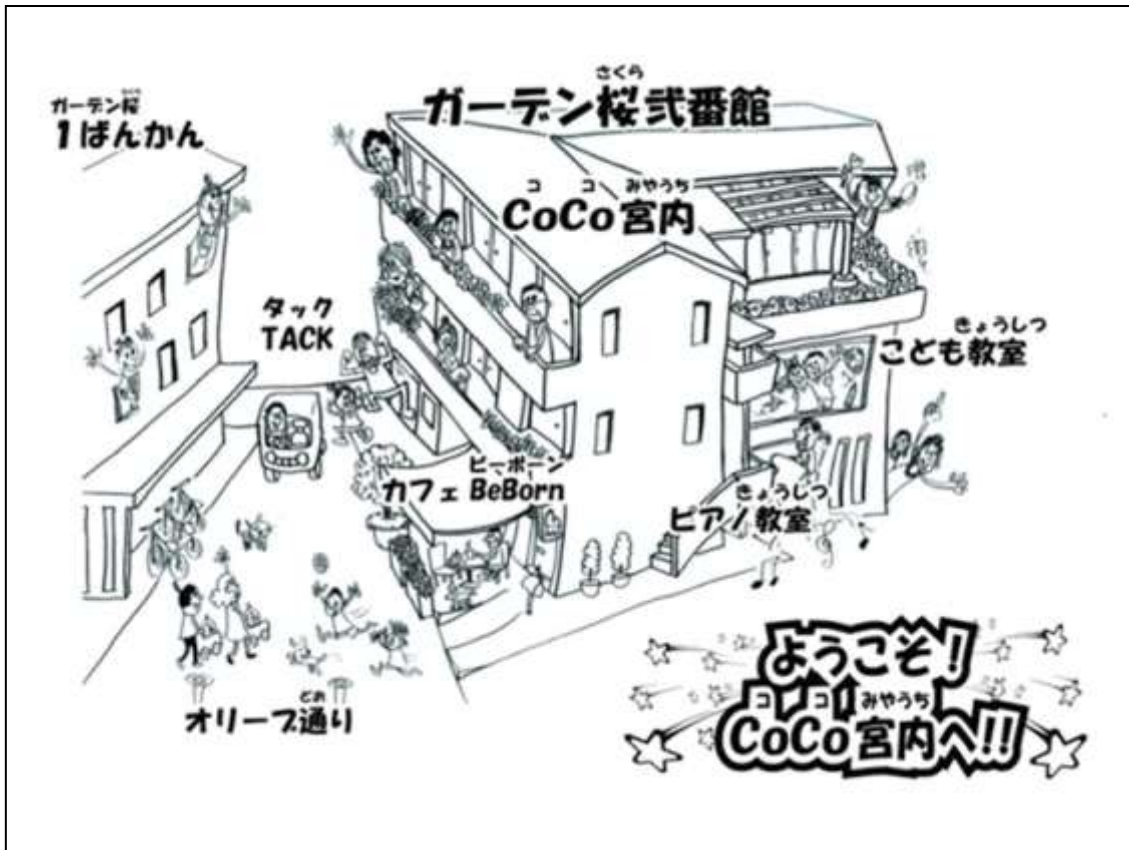


3つ目の話を聞いてください。COCO 宮内の宮内というのは町の名前です。川崎の中原区にありまして人口が一町内で1万2~3千人です。70歳以上の方に敬老会で配るお祝い品数が約1500個、割合的に少ないです。小学生が約900人、中学生が約500人というとても若い人が多い町です。よく使う駅のひとつが武蔵小杉で一駅行くと東京、一駅行くと横浜というところで、都会の一部に位置していると認識いただけたらと思います。

2001年に、COCO 湘南の考え方に感動して始めました。知った時にまず電話したんです、見学したいと。そうしたら、「半年先ですよ」って西條先生が電話口で。まだ電話番号をしてらっしゃる感じでした。話していくうちに、「あら、あなた作りたい人なの？じゃあすぐ来なさい。来る日は4月1日です。」っていうことで、4月1日に私一人でお邪魔しました。本当に一人で始まったんですね。

まずは友達や知人をたくさん集めて、それぞれ自分の能力を出し合えるように作っていくということで始めたんですけども、とてもじゃないけどできないと。そしたら西條先生が有名な方をたくさん集めてくれました。さわやか財団の何々さんとか...、まあ話したらきりないですけど。その中で4回くらい研究会をやっていくうちに、皆さんそれぞれ自分の青写真があるんですね。だけど、強力な青写真がたくさんあると、まとまらなくて、どんどん抜けて行きます。ただ1人、川崎幸クリニックの杉山先生だけは残ってくださって、杉山先生を中心に地元の主婦でグループリビングを作ろうということになりました。ですから、これまで皆さんが話されたような福祉大学を出られたとかね、そういうメンバーではないので、これから話すことは本当に主婦たちが、ちょっと言葉は悪いですけどもオママゴトのように最初は始めたようなものです。

COCO という名前ですが、本当はCOCO 湘南の傘の下でやりたいと申し入れをしたんですけども、「地域が違うから無理よ」っていうことで、法人名をグループリビング川崎にして、住む家にCOCO という名前をあげるわっていうことで、ありがたく頂戴したというところなんです。ですから、COCO という名前に恥じないようにしようということになりました。



私たちはこの絵から感じられるようなイメージを生活の目標にしました。2003年に建物が完成しました。仲間は、「原さん、建物ができたから乾杯しよう」と。でも、私はそのときに、「ここに住んでいる人が、ここに住んでよかったねえって言った時に乾杯しない?」と言って、完成の乾杯はおあずけになってます。ただ今年には10周年になりますので、10周年の日には、乾杯したいなど。月に一回入居者の方たちと懇談会を開いているんですけども、話の中で口癖のように「COCOに住んでよかったよかった」っていう声をこの頃は聞きますので、9月29日にやる予定なんですけれども、その乾杯を楽しみにしているところです。

向かいにある壺番館なんですけれども、そこは川崎市営の高齢者住宅で、COCO宮内ができる5年くらいまえにできあがっています。

川崎市の高齢者事業推進課が、COCO宮内の立ち上げについてだいぶ応援してくださいまして、2003年の10月1日にはじまったんですけど、翌年の2004年の4月から3年間、川崎市安心ハウス交流支援モデル事業ということで、1年目は100万円、2年目と3年目は80万円の支援をしてくれました。COCO宮内が新しいタイプの高齢者の住まいとして、こんなふうにありますよっていうことを、紹介するための会に使ってくださいということで、私たちは年一回の紹介の会をやるよということ、何々祭りにしようか、何フェスティバルにしようかとか言っていたんですが、もうそのものズバリ、「COCOへ行こう!」という会とし、年一回行われています。これについてはまた後で写真を見てお話したいと思います。

3年間の支援金が終わりましたら、市政だよりも何か載せるとかお金以外の支援はなんでもしますよと言っていただきました。その後、私たちは要求しなかったんですが、翌年から川崎市高齢期の住まいガイドに、新たにグループリビングというページができ、グループリビングはCOCO 宮内一軒です、と書かれていました。間取りは、ほぼ湘南台と一緒にですが、押し入れは可動式で、その押し入れの場所によっては部屋が広く使えたり押し入れが目隠しになったりするようになっています。それから共用部分の床は、脱衣所含めてほぼ全部床暖房です。個室は床暖房ではありません。

これは、COCO 宮内入口の右手にあるカフェ BeBorn というレストランです。レストランのテラスの部分です。BeBorn というのは、再生という気持ちで作った名前です。一度リタイアした人ももう一働き、それから昔からカフェをやりたいなレストランやりたいなと思ってたけど、とうとう年をとってしまったわ、でも今からでもできるわとか、再生という意味に願いを込めてつけたのが BeBorn です。ここは、入居者の昼食の場所にもなっ



ています。店内はペットは無理なんですけど、このテラスはペット OK ということで、近くに等々力公園もありまして、ペットの散歩帰りに人が入ったり、子連れのお母さんたちがテラスを使います。近くの中小企業の方、15分位歩いて来てくれる富士通の方も来てくれます。一食 650 円で、少ない時は 10 名少々だったりしますがだいたい 30 名から 35 名の方が利用すると考えて作っています。メンバーは 8 名で、午前 3 人午後 2 人。住人の人と地域の方がちょっと触れ合う場所といった感じです。この間は 92 歳の方が事情があって退去されたんですけど、いつも来る富士通のお兄さんがその退去される方の手を握って「いやあいなくなっちゃうの、元気でねえ」というようなシーンを見たりしています。

学童保育です。川崎市にはわくわくプラザという学童保育があるんですが、時間が短かったり、内容にいろいろ希望を持つお母さんがいらっしゃり独自のやり方で初めました。



一年生から三年生までいまは 30 名弱です。曜日ごとに講師を招いています。たとえば、月曜日はヒップホップダンスの先生、英語の先生、美術の先生、音楽等、講師を招いて、お稽古事にいかななくてもいいようにしています。ただ、サッカーと水泳だけは送り迎えをして、近くの教室に通うのを手伝っています。とても喜ばれています。以前は保育園に宣伝にっていたんですけど、今年あたりは黙っていても来年度 10 人の募

集に対して13人の希望者があり「選抜しています」とか言ってました。どう選抜したのかわかりませんが、コーラスという30人位の年配の方々のアトリエ活動があるんですけど、子ども教室では、夏休みなどに交流会をして一緒に手遊びをしたり歌を歌ったりしています。土日祭日は休みですが、土曜日には学童保育とは関係ないメンバーがバレエ教室をしています。それから最近はフラダンス教室が始まりましたが、これは入居者の方がお一人フラダンスがお好きな方で、その方の先生を呼んで、フラダンス教室が始まっています。



器教室はカフェで演奏会などをやりまして、入居者がそれを見てドラムの練習を始めました。

これはピアノ教室です。ピアノ教室の隣に、打楽器教室があるんですが、両方含めて約100名の生徒、5人の先生がここを使っています。それで生徒の家族、特に母親の出入りによってグループリビングを知って貰えるきっかけになっています。ここに通っている生徒のお母さんが掃除メンバーになったり、打楽器の先生がカフェの手伝いをしています。また、「COCOへ行こう!」のときに、ちびっ子の歌とかで参加してくれたり、打楽



これはデイサービスです。労協というグループがやっています。ここの特徴は、パワーリハビリという6台のこの町のスポーツセンターにあるような機械を使って一日を過ごしています。割りと、若い時期に麻痺が起ってしまった男の人が多いです。また、訪問介護ステーション、高齢者の他に、子育て支援として保育ママという制度が川崎にはあるんですが、市の委託を受けて保育ママの派遣もしています。

NPOの業務

- ・ 生活サポート
(食事づくり、共用部分の清掃、見守り)
- ・ アトリエ(趣味の教室)の運営
- ・ 介護、医療のネットワークづくり
- ・ グループリビングのPR活動
- ・ 入居者の募集

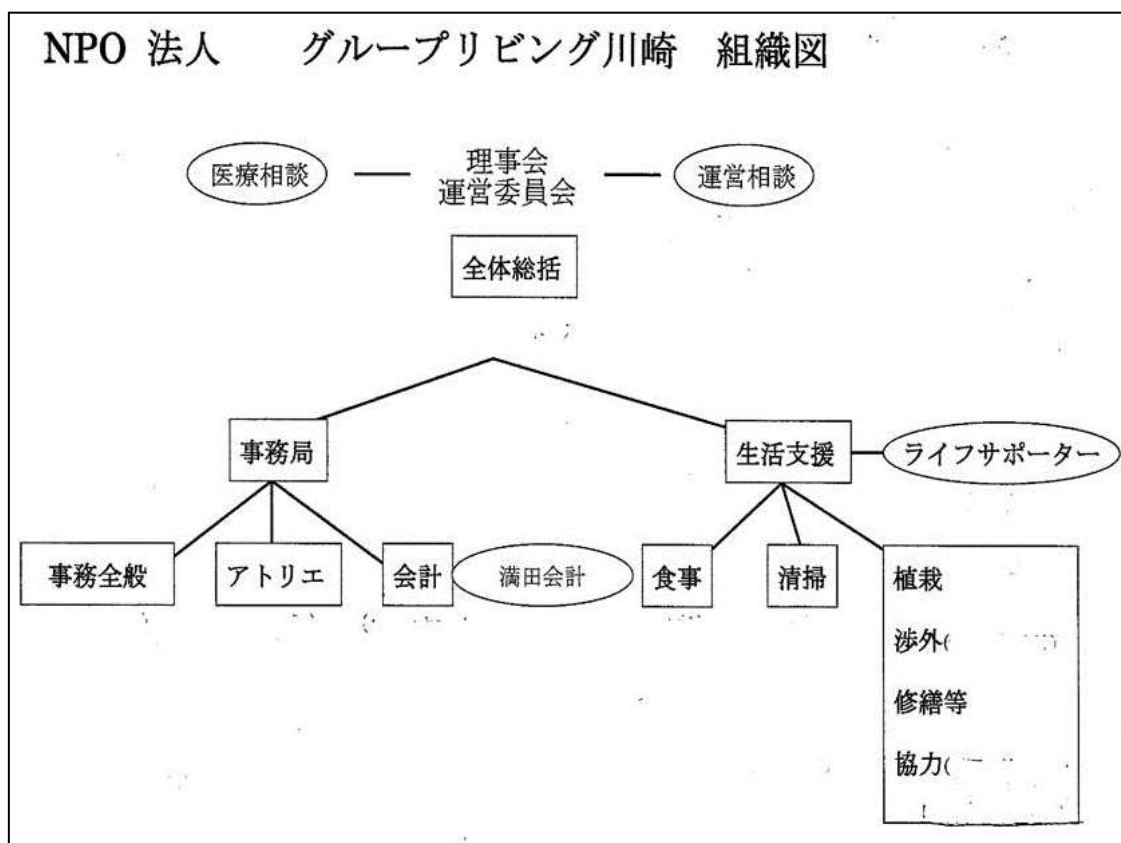
いままでのどっちかというビルのテナントとしての併設事業です。これからはNPOのことをお話します。

NPOはここに書いてあるような仕事をしています。食事作りは、毎日の夕食作りをします。昼はカフェを利用するんですが、土日祭日はカフェはやっていないので、その日も作っています。見守りというのは、ライフサポーターがする仕事です。現在は昼週に2

回、夕刻毎日各1時間15分です。この1月までは、毎日昼行われ、昼夜とも1時間半でした。1月に手を貸さなければならない方が退去されまして、いまはほとんどの方が何でも自分で出来る人ので、皆で討議しまして、必要性に沿ってするという事で減らしました。

医療のネットワークなんですけど、島医院というのがありまして、そこの医院長と師長がとてもこの取り組みに感動してくれていまして、必要があると月2回の往診とかの制度を使って毎朝7時半、つまり開院の前に来てくれます。以前その形を1年半くらい続けてたメンバーがあったんですけど、いまは元気な人が多いので見えていません。

それからグループリビングのPR活動は、主に見学者の対応のことです。



これがグループリビング川崎の組織図です。理事会は隔月に行われます。恐縮ながら、大江先生も理事をやっております。だいたい理事会で大筋を決めまして、運営委員会というのは毎月ありますが、実際に「COCOへ行こう！」をやろうと決めたら、どういう係でどういう日程でどうする、という細かいことを決めるのが運営委員会です。そして、医療相談は前述の島先生と幸クリニックの杉山先生に色々相談があるときにしています。運営相談は大江先生ともう一人、仲間の人で50歳を過ぎてから大学院にいったとっても立派な仲間がいて、生涯学習というテーマでいらしたんですけど、その方から色々お知恵をいただいています。

事務局と生活支援に分かれていまして、事務局は事務一般の色々なプリント作り、それからアトリエは趣味の教室、会計に満田会計という税理士さんが入っているのは、最初の時点で川崎市の支援金をいただいたのできちっとした収支をお見せしなければいけないということでお願いしたのです。その後、会員になってくださったので、そのまま会計の面倒を見てもらっています。

生活支援の方ですね、食事・清掃その他に植栽など色々なメンバーが活躍しております。そしてライフサポーターです。



これが食事メンバーの会です。メニューを中心に会議します。次の月のメニューは、まずカフェが10日くらいまでに翌月の昼のメニューを提示します。次に仲間のメニューを作る人が、それにダブらないように夜と土日と祭日の昼を決めます。二ヶ所の合わさったメニューを食のリーダーと入居者2人と私4人で検討します。入居者2人は日頃の入居者の食べっぷりとかあの人はこれが嫌い、これはすごく喜ぶわよと

か、情報をくれてできあがります。そして最後に作るメンバーが、そのメニューを見て、じゃあこれは何枚くらいとか何個くらいとか何グラムくらいとか、この人はエビがダメだからじゃあその時はキスの天ぷらねとか、すごく細かく決めます。食事メンバーには買い物する人、作る人、片付ける人がいますが、一週間に一回だけ冷蔵庫の掃除に来る人、それから台所の掃除を月に一回する人とか、細かく分かれています。入居者の方はメニュー作りと、返金の会計とかをやっています。

これは掃除をしている風景ですが、30代から40代の5名の方で主にやっています。その中で5年位前からいる人で、希望してきた時に子供をおんぶしてきたんですね。「ええお風呂場の掃除するときにおんぶしていたら逆さまになっちゃうじゃない。無理じゃない？」って言ったんですけど、どうしてもやりたいっていうので、メンバーになり、やり通してしまして、今度小学生になるかなあという感じです。また同じ方なんですけど、ある時男の子2人いたので、「どこの子？」って言ったら「私の子」って言ってね、その男の子2人が一休さんのように廊下を掃除していました。それでそのお母さんが言うには、「お母さん僕が高校生になるまでこれ続けてよ」って。「どうして？」って言ったら、「僕高校生になったら、ここで掃除のアルバイトする」って言



ったっていうんでね、皆すごく喜んでます。また他のメンバーは「やっと生まれた子なのよ」って言って、日曜日のお掃除とかに三年生の男の子を一緒に連れてきてやったりしています。



これはライフサポーターの会議です。ライフサポーターは初めは私一人でやっていた。6年前に肺がんが見つかりました。その時にこれはもうできなくなると大騒ぎになりまして、その時からライフサポーターを6~7名で手分けして行う形ができました。その時の皆さんの資格というのはヘルパー2級だったり元准看護師さんだったり、歯医者さんの奥さんだったり、ヘルパー2級の人は別として主婦ですね。できるのかしらって言ったけど、心さえ

あれば大丈夫よっていう感じで、始まりました。でもいまライフサポーターは色々情報交換して、皆で1人よっていう感じでやっています。まあ入居の方々も色々なタイプがありますように、ライフサポーターも色々タイプがありまして、帰ってくると「おかえりなさいませ」っていう人もあれば、「あら、帰って来たの」っていう人もいるし、特にマニュアルは作らず、自分のキャラで発揮してもらうようになっています。いま手足を補助する人がほとんどないので、話題提供っていうことが主な任務です。

アトリエ21



まだまだ埋もれているあなたの能力を引き出してみませんか。アトリエ21では、ただ今お仲間を募集しています。新しい自分を見出し、みんなと楽しいひとときを過ごしましょう！

(アトリエ21はグループリビング川崎COCO宮内の1階です)

講座名	内 容	曜日・時間
お茶を楽しむ	茶道の基本を学び、お茶を楽しんでみましょう。裏千家の先生のご指導で3階の和室（炉あり）で行います。	第3月曜日 午前10時半から
ビーズ	リング、チョーカー、ネックレスなど素敵な作品を作っています。先生手作りのレシピは分かり易くて好評！	第3火曜日 午前10時半から
コーラス	ピアノを囲みジャンルと問わず歌っています。歌うと唾液の分泌もよくなります。合間にお茶の時間のおしゃべりも楽しいです	水曜日 午前10時から
ギター 只今満席です	レベルに合わせたクラスでの練習です。初心者でも懇切丁寧に指導いたします。(クラシック・フォーク別)	第2・4土曜日 午後1時半から
マグマグクラブ リハビリ教室	病気および認知症の予防として内容を変えていきながら楽しく行っています。(カラオケ・頭の体操・歌の会など)	金曜日 午後2時から
水彩画	押し入れに眠っている絵具はありますか？お好きな画材で描きましょう。	第1・2木曜日 (健康の日) 午後1時半から
フラワー アレンジメント	生花の素晴らしさを再発見しましょう。色々なアレンジを行っています。話題のプリザーブドも取り入れています。	第3水曜日 午後2時から
短歌	三十一文字に想いを表現してみましょう。初心者でも楽しめます。	第2土曜日 午前10時から
手芸	現在は和洋風木目込みを中心に行っています。個々に合わせてオリジナリティあふれる作品作りをしています。	第2・4火曜日 午後1時から
ペン習字	小学生の2クラスで行っています。学校のかきかたに合わせた練習や年賀状など身近な素材で勉強しています。	第2・4水曜日 午後4時、5時
そろばん 只今満席です	最近見直されています。個々のレベルに合わせ、数字に親しみを持つことを基本に指導しています。	月曜日 午後4時から 5時半

受講料:1回600円(別途材料費などかかります) サポーター会費(旧年会費):1,000円
見学随時受け付けています。ご希望の方はご連絡ください(留守電の時はメッセージを残してください)
アトリエ21では受講生と同時に講師のかたも募集しております。

資格などお持ちでなくてもかまいません。楽しく指導して下さる方大歓迎！

■お問い合わせ・お申込み：NPO法人グループリビング川崎 アトリエ21 ☎797-0310

<http://home.v08.itscom.net/miyauchi/index.html> (HPをご覧ください)

アトリエ21の様子をお話します。アトリエ21は、まずこの表から見てください。
アトリエ21は13項目ぐらいあります。



①



②



③

これはペン習字の教室です(①)。最初は大人の受講生で入居者の方が先生で始まったんですが、子供もいいですかっという事で子供が入りいつの間にか子供中心になりました。最近では反対に大人もいいですかっという事で、大人も入っています。これはビーズ教室です(②)。小中学生のお母さんが多いです。これはギター教室ですが、小学生から年配の方までです(③)。



④



⑤



⑥

これはマグマグクラブと言いまして、虚弱な方とか、認知症の人のカラオケ教室です(④)。元気な入居者も入っています。これは発表会ですこれは先程申し上げましたCOCOへ行こうです(⑤)。展示発表できる講座は展示発表。それからギターとかコーラスとかは舞台上で発表できるものは舞台発表。その他バザーとか、併設の仲間たちがそれぞれの形で参加。それからこの風船なんかは、デイサービスの人たちが膨らましてくれたものです。あと行事としましては「COCOへ行こう！」の他に、お茶会をしています(⑥)。お茶会はどうして始まったかという、3月3日を迎えるときに、「ひな祭りよね、なんかお雛様の歌を歌って雛菓子食べて終わるんじゃないかな子供っぽいわね」「じゃあお茶会をしましょう」って言ったことから始まりました。いまではこども教室のメンバーやデイサービスの人たち、立礼席を作って、お茶会をしています。今度は3月7日に行われる予定です。



⑦



⑧



⑨

これは行事の1つで敬老会です(⑦)。子供はピアノ教室の子どもたちです。これも川崎市の最初支援金でやっていました。お弁当買ってくるって言ったら、お弁当買ってくるなら支援金はだめですと。材料買ってきて作るならいいと、ということで40人分のお弁当を私たちが手作りしてやっています。これは勉強会です(⑧)。毎年いろいろ情報を得るため開催します。NPOについて、井之川さんがお話してくれたこともあります。介護保険について、成年後見制度について、グループリビングの暮らし方から老後の生き方、それから改定介護保険、口腔ケアについてとかの勉強を、その筋の方にお話していただいています。その他に私たち自身としても毎年目標を持って生活しています。この3年間は今年が充実した日々を送ろうでした。去年が美味しい食卓豊かな食卓を囲むには、体づくりをするにはと、絶えず勉強しなきゃいけないという精神でやっております。これは消防訓練です(⑨)。向かいの市営住宅のメンバ、式番館の併設の仲間と共にやっています。この他に毎年やっていることとしては、川崎市の市職の方がNPOの人たちがどういうふうなことをやっているのかということで、5日間9時~17時でNPOに勤務するという形で見えたりしています。中原中学の男の子たち女の子たちがボランティアに来てくれる時もあります。

ちょっと理屈っぽくなりますけれども、これはカウンセリングルームの書いてくれた幸せとはという言葉なんです。自分の長所好きなこと得意なことを活かして社会参加していくことで、幸せを勝ち取ろうという気持ちでやっています。

幸せとは？

- 1) ありのままの自分を愛する
- 2) 自分の身近な人々を愛する
- 3) 自分の住んでいる町を愛し、楽しく生活する
- 4) 自分の長所・好きなこと・得意なことを
活かし社会参加をして行く

課題

ひと世代若い人たちの 協力の確保

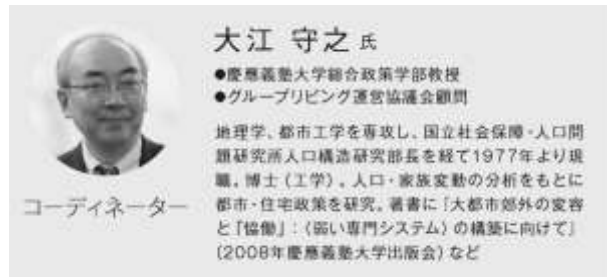
課題です。若い人たちに集まってもらって、やって行きたいと思っています。若い人たちは結構集まるんですけど、なりふり構わず中心人物になってくれるっていう人は見つかりません。これが課題です。

それから、私たちの課題とは別に、全体の課題として、国民年金でも...国民年金をもらっている人でも住めるグループリビングがあったらもっと幅が広がるんじゃないかなと思っています。それから、

川崎市からヒアリングがあったときに、ちょっと唾飛ばして喋ってしまったんですけど、介護保険料を集めるとか、福祉のための税金を集めるとか、お金を集めるんじゃなくて一人ひとりが手を出しあって、お金じゃなくて手を出しあっていかなければ間に合わないんじゃないですか、と。介護している人の意識の中にもすごく自分がやらなきゃっていう意識が減りすぎちゃっていると思うんですね。母が特養に入っている時に、エレベーターに乗り合わせた女性が自分の親御さんの車椅子を押していたんです。で、「原さん、見てください。母はこの間来た時と同じ洋服を来ているんです」っていうから、「え、汚れてないからじゃないですか？」って言ったら負けずとばかり「爪も切ってくれてないんです」っていうから、「爪くらい自分で切ってあげたら？」って言ってしまったんですけど。私は一応特養には提案しました。自分の親の部屋くらいは家族が掃除するように決めたらいいんじゃないですか、って。お金を集めることも必要ですが、社会全体が出来ることを出し合って共に生きる形を実現することが必要だと思います。幼稚園の子だってニコって笑えば人を喜ばせることができるんですよ。それから私は母に食事を三度三度あげに行っていた時期があったんですけど、隣が中学校なんです。昼休みに順番に...まあ難しい食べ方をさせなきゃいけない人もいますけど、中学生がもっと出てきて日常的にそういう人に関わったら、いいんじゃないかなってすごく感じました。以上です。課題です。失礼しました。



2 パネルディスカッション



[大江氏]

それではパネル・ディスカッションの後半のほうに行かせていただきたいと思います。この時間が14時50分までということなので、あと45分間ございます。地域に開くということ巡って、いまご紹介いただいた3つの事例について話を進めて行きたいと思いません。

3つの事例はそれぞれ地域も違いますし、それから運営形態も違います。最初の星川さんと清野さんのところは、JKAの補助事業で作ったものですが、原さんのところは自主事業で作られたものです。COCO湘南台をモデルにして、かなり忠実に再現しようとして作られたのですが、条件が違う中で、いろいろな課題を解決していくプロセスを経て、独自の形になってきているのかなと思っています。そういう違いがある中で、地域に開く、地域と繋がるってということがどういうことかについて、お話を進めていきたいと思いません。まず、清野さんのところは社会福祉法人で、星川さんと原さんのところはNPOという法人格の違いがありますが、星川さんのNPOは、グループリビングの建物を所有していて、賃貸借経営と生活サービス提供を同じNPOがやっているという仕組みなんですね。それに対して原さんのところは、建物が原さんのご主人のところの会社が所有していて、NPOはサービスの部分だけを担っているという形になっている非常に身軽なNPOなんですね。一方、清野さんのところは、建物を所有していて、サービスは一部外のものを使っているということですね。COCO湘南台は昨日見ていただいたり、お話を伺う中でご理解いただけたかと思いますが、居住者の方たちをNPOが包み込むような形になっていて、居住者の意思を反映してNPOが契約主体になっています。つまりNPOが家を借りる、食事サービスを買う、共用部分の清掃サービスを買うというように、消費主体になっているんですね。NPOが買って、その買ったものを居住者が一緒に使うんですね。食事提供サービスを使う、借りた住宅を使う…そういった形のNPOなんです。したがって、同じNPOと言っても、持っている役割が違ったりします。そういう色々な違いが生まれてきている中で、どういふふうに関域に開いていく営みが行われているのか。事業形態の違いが、そこに反映されている可能性はあると思いません。

まず、外に開いていくという意味で、外の資源を使っていくんですが、外の資源を使うことのプラス面マイナス面について考えていきたいと思いません。たとえばCOCO湘南台が食事のサービスをワーカーズ・おり〜ぶさんから買っているわけですね。それに対して星川

いのでそこまではできておりませんが。

[大江氏]

作る方は何人くらいいらっしゃるんですか？

[清野氏]

うちの方は外部委託ということで、シルバーさんの方と地域のお母様方が一部入っております。年代的にはシルバーなので60歳以上の方が。

[大江氏]

昨日行きましたふらっとステーション・ドリーム。今日も午前中だけ島津さん来てくださっていたんですが、島津さんとお昼食べながら話をしていましたら、ふらっとステーションは同じ物が出てくることはないというんですね。つまり同じメニューでやっても、作る人が違うので、たとえば同じ煮物でも違った味のものが出てくるので、それが楽しいっていうふうに言われているんですっていうお話だったんですが、そういう点で言うと、それはよし悪しがあると思うんですけど、割りと安定したものが出てくる形になるんですか？

[清野氏]

味はですね、やはり入居者様の方から、味付けはやっぱり同じ材料でも作る方によっては違うっていうのをお聞きしていますし、作る方によってほしい味がわかるとか、そういったことはあります。ときどき私も行くと味見してくださいとかって話はあるんですけど。

[大江氏]

それを受け止めてらっしゃる？

[清野氏]

そうですね。はい。プラスに。

[大江氏]

原さんのところは、いかがですか？

[原氏]

初めの頃は私も料理作っていました。家庭料理。そうすると涙流すように、「私ね、一人暮らしの時、ドア開けて『ただいま』、ひとりで『おかえりなさい』って言ってね。熱いご飯に生卵かけて食べてたのよ。こんなご馳走…」って言ってたんですけども、しばらくしたら「アンコウを食べたいわ」「伊勢海老食べたいわ」とか言うようになりました。食事っていうのはきりがないところがあるし、飽きるときもあるし、色々だまってそのとき感じました。いまですね、7人くらいの方が食事を作っています。そうすると、やっぱり塩から目に作る人と薄めに作る人と色々です。でも、かえってそれがいいかなって思っています。食べる人も10人、いままでの歴史がありますよね。だから、同じ人が作るとずっとその人

に合わせなければならぬけど、色んな人が作ると、自分に合った味の人になる日もあるわけですよ。それから、去年豊かな食卓ということで一年過ごしたわけです。そしたら、たまたま震災もあったんですね。「豊かな食卓ってなんだろうね」って話した時に、「たとえ塩にぎり一個であっても、皆がニコニコして食べればご馳走だね」って、皆納得しました。ですから、美味しいまずいっていうの、それから食材の高いの悪いのっていうのは無しに、基本的には皆さんどんなものでも一生懸命自分たちのために作ってくれるんだから、美味しいと思おうと思っていると思います。食作りのメンバー会で、「誰々さんがこの頃のお味噌汁がちょっと味が薄いって言っていた」とか、「骨が舌に触ったとか言っている」とか、言う記事は出していただいています。皆さんからこういうことを直接食作りの人に言うと、やはりお気の毒っていうのがあるので、ライフの人とかNPOの人に言ってくださいと、そして改善できるものは改善するけども、無理なものはできませんと。特に家庭料理なので、我が家のカレー作ったって、明日の朝余れば食べるし、そういう考えで食を受け取ってくださいねっていう話し合いを一方向的に言うんじゃないで、しています。そうすると皆さん「そうだよねえ、自分たちに一生懸命作ってくれるんだから。大丈夫、美味しい」って言って、でもやはり一言今日のはこうだった、今日のはこうだったっていう感想は大事だと思う。それをやっぱり言えるのはお互い信頼関係があるから、黙ってないで言えるんだねっていう話も出ています。

[大江氏]

ありがとうございます。食事の作り手が外部の事業体であっても事業体内部であっても、居住者と作り手の間にコーディネートの役割を担う人がいて、日常的に食事内容について話し合っていることで、居住者のニーズに合った食事が提供されていることがわかりました。また、事業体の性格にかかわらず、食事の作り手として主婦の方たちが複数参加し、結果的に味のバラエティがあることが、食事の幅を広げることに繋がっていることもわかりました。グループリビングの食事作りは地域の女性のネットワークを作り出し、また支えられているのですね。

COCO 湘南台は夕食主体って言うことになって、一日二食で、朝ごはんは自分で用意し、夜は作り手がいてっていうことなんですけれども、お昼をどうするかというところで、違いがあるようです。原さんのところはコミュニティ・カフェが併設されているので、居住者が希望されていけば、カフェに食べに行くっていう形になるわけなんですけれども、星川さんや清野さんのところはお昼はどうされているんですか？

[星川氏]

うちはサロンをやっていますので、生活者の方、サロンの方と一緒に食べるようになっております。

[大江氏]

そこは、地域社会とつながっていくひとつの接点になっているっていうわけですか？

[星川氏]

そうですね、先程大事なことを言い忘れたのですが、本当にサロンに来る方たちも生活者の方たちの様子を見て、「本当に元気をもらえるわ」と言って喜んでもらっていたし、生活者の方も、「色々な方が出入りするんで、刺激になるし元気をもらえる」と言っております。生活者の方もサロンには積極的に参加していて、来た人たちと、お友達になっています。

[清野氏]

うちの方はですね、モーニングの方は希望ということで、お昼をとっていない方と自分でお作りになる方、モーニングの方ではいらっしゃいますし、あと Morgenモーニングでデイサービスをご利用されている方いるんですね、それで毎日誰かはデイサービスに行っておりますので、緑光園…本体の方とグループリビングの方とデイサービス、全部メニューが違うんですね。なので、作る人も違うので、Morgenモーニングもありましたように、先程もありましたように、お味とデイサービスに行った時の食器も全部違います。やはり、モーニングはグレード的に一番いい食器を使っていますので、デイサービスの方もやはりおやつも Morgenモーニングさんとおやつも違いますし、そういった意味でいい意味での平等、ランクってということで、デイサービスの方も緑光園の方も Morgenモーニングも、おやつも違います、食器も違います。

[大江氏]

お昼ご飯が地域の方たちと直接触れ合う機会になっているようです。お昼を地域の方たちにも提供して、同時に居住者の方たちが外部と接触できる機会にするというのは大切だと思います。このように地域とつながる第一のポイントは食事だと思いますが、二番目にいま星川さんの話にもありましたが、サロンというか趣味の活動ですね。その部分での接点ってのが、居住者の方にとって、外の世界とつながっていく重要な部分だと思います。サロンとか、趣味活動等通して、単に趣味活動を一緒にやっていますねだけではなくて、そのつながりが他に変わっていく、別のものにつながっていく、そういう機能をどういうふうに持っているかということについて、お話を伺いたいと思います。

[原氏]

私たちアトリエ活動と言いまして趣味の活動があります。12～13講座くらいあります。入居者の方はコーラスに4名、短歌に3名、手芸2名、お茶、ペン習字、ビーズに各一名から二名参加しております。で、それぞれの参加の場所で、地域の新しい友だちを見つけている人もいます。老人クラブ誘われたり、別の体操教室に誘われたり、それからちょっとアトリエ活動とは別なんですけど、編み物教室をやっている入居者の方も地域の人を呼んで、自分が先生になってやったりしています。

だいたいアトリエ活動で年間延べ2,500名くらい。去年はちょっと一昨年の震災のあれで、去年の総会の集計は2,200～2,300名だったと思うんですけど、普段ですと、2,500名くらい。一回どの講座も600円、講師が400円のお持ち帰りで、NPOへ200円いただいています。利用者は正会員、賛助会員またはサポーター会員などになっています。正会員は5,000

円、賛助会員は2,000円、サポーター会員は1,000円。だいたい全部で140名くらいいます。講師の人は、生徒が6人いると6人分だけなんですけど、短歌の先生は自分が短歌が好きだから、それを教えること自体が楽しみで来ているからって言ってくださいます。この方は生命保険会社でお仕事をしていました方ですけども、定年になってから来てくれます。コーラスはですね、一番多くて30名くらい。ババさんコーラスという感じでやっていますけど、お茶の時間が楽しみなんです。そうすると、さつまいもの天ぷらを持ってきたり、私がおしるこ出す日は白菜の漬物を持ってきたりという感じで、お茶飲み場。30分くらい喋っていますね。切り替えるのが大変なくらい。まあこれはほんの一部の紹介なんですけども、アトリエ活動によって、鍵を閉めて暮らす家でなく、鍵を開けて入居者とともに、たとえばコーラスのメンバーがフラダンスに誘ってくれたり、おんなじ人なんですけど、今度ヨガの教室をやりたいって人がいるから誘っても開講させてもらってもいいとか、なんかそんなふうにあトリエ教室では関わりを持っています。まあそれに関しては、私の方でもNPOの方でも印刷を手伝ったり、あと子供の講座が2つあるんですけど、ペン習字とそろばん教室ですけども、集金がね、やっぱり大人でないので、出てそれを手伝ったり、私は先生の荷物持ちをしたり駅への送迎とかをやって、接点を持っています。

[清野氏]

うちの方ですね、アトリエというのは結構広めにあるんですけども、お元気な方はカラオケの方があったり、あと好きな方が笛演奏、そんな活動をしていたり、お花が好きな方がいて、自分の自宅からお花を持ってきて、菊の品評会に出したり、あとお弟子さんたちとかが一緒にお手伝いをしてくれたりとか、そういった自分たちの仲間の方がお出でいただいたりしております。あとはやはり先程もあったように地域のお祭ごとであるとか、地域のボランティアさんが来ていただいたり、あと学生さんが認知症のサポーターとか色々な学校で行われるボランティア活動も来ていただいた時に入っていたり、あと法人の中で介護予防教室とか、いろいろ地域密着型の介護教室とか行なっていますので、その時は入居者の皆様も一緒に入っていて、お教室を聞いていただいたりとか、そういった活動の方もさせて、利用させていただいております。

[大江氏]

それが他の何か活動に変化していくとか転化したりとか、そういうものっていうのは何かあるのでしょうか。

[清野氏]

そうですね、逆にうちの方は併設…敷地内の中にデイサービスとか主体の第一種の事業がありますので、たとえば合同の催し物とかにお誘いをしたりとか、たとえばマジックショーとか、そういった先生方がお見えになった時に、そのグループリビングが主体ではなくて、たとえば施設の方とかデイサービスの方で先生がお見えになった時に、一緒に参加する、そういった一ヶ月間の行事の方のスケジュールがありますので、よろしかったらおいで頂く、お誘いをする、そういった形でやっております。

[星川氏]

サロンから発展していったもの…ですか？

[大江氏]

そうですね。サロンというのは、居住者の方がそれぞれ自分の好きなことを通して新しい人、色んな人に出会っていく、そこで友人関係が作られるという機会が提供されている場だと思うんです。もちろん友達ができる仲間ができるっていうのは、尊いことだと思いますが、それを機会に別のものにつながっていく新しい役割が与えられていくことがあるのかなっていうふうに思ったりしているんですけども。

[星川氏]

リビングの方が直接っていう形ではないんですけども、サロンで布ぞうり教室っていうのをやっていたのですけれども、何人かで作り、生活者の方も作っていましたが、それが発展しまして、「ともかな」で、布ぞうりを作って販売しているっていうのはあるかと思えます。そのようなことでしょうか。

[大江氏]

そうですね。ともかなができたことで、新しい関係性が生まれたのではないのでしょうか。ともかなができていなければ、布ぞうりは趣味の活動で作っただけで終わっていたのが、それを売るということで、さらに広がりが生れたように思います。またもしともかなができていなければ、その 3,000 円の自治会費は自分たちのお楽しみのためだけに使われて、そこから外に出なかった可能性があるのが、駄菓子屋の出資につながることで、外に出るようになったということかなと思います。つまり、グループリビングだけじゃなくて、ともかなを作ったことによって、グループリビングが外の世界につながっていく回路というか、そういうものが新しくできたというふうに理解したんですけれども、そういう理解でよろしいのでしょうか。

[星川氏]

そうですね。生活者の 87 歳の男性が、元、大工さんだったものですから、包丁を研いだりとかが得意で、いま「ともかな」に「研ぎ屋 英ちゃん」をオープンしてもらったんですけれども、包丁を研いで欲しい方一本 350 円で研ぎますというのをやったりしています。

[大江氏]

会場の方が手を挙げていらっしゃる。

[会場]

ともかなって、スリッパの教室をやっていますっていうのを聞いて、友達を募っていきました。それは何か見学もそうですけど、そういうのはまた行きたいねとか、そういう話にもなっているので、それも外の世界につながっているんじゃないのでしょうか。

[星川氏]

それは「ともかな」のものづくりのところで、手芸教室をしまして、スリッパを作り
を募集したんですよね、そこに角谷さんが応募してくださって、作っていただきました。

[大江氏]

サロンの方でやっている趣味活動っていうのは、一種の制度外のデイサービスみたいなもの
のなんですか。

[星川氏]

いや、もう本当に自主的な集まりで、私たちはできるだけ自分たちでできることはしてもら
らおうという趣旨ですので、「場所を開放します、皆さん自由に使ってください」という形
にしているんですね。オープンするときにも、地域に住んでいる会員のおばちゃんたちを
集めて「ここを自由に使って貰いたいんだけど、どうしたらいいかしら？」って相談し
ました。そしたら皆さんが「事務所も近くにあるし、本当は毎日遊びに来たいけれども迷
惑をかけたくないの、やりたいことを決めて集まりましょう」と決めてくれました。そ
したらカラオケをしましょうとか、ちぎり絵を教えたいとかいう人たちが次々に現れて、
いまは先程紹介しましたように何種類でしょうか・・・平日の毎日、サロンがあります。

[大江氏]

つまりそれはたすけ愛の会の 850 人いらっしゃる会員の方がベースにあって、その方たち
のために開放しますっていうふうにも最初からしていたっていうことなんですか？

[星川氏]

サロンを始めましたのは、活動の中で、家に閉じこもっている方がいることに気づき出
かけるところがあったらいいねという発想でした。サロンはグループリビングの前から始
めていました。
そういえば、地域にということであれば、ここで腕を磨いた小話だとか詩吟をやっている
方が、地域でまた同じようにサロンをやっているところに呼ばれて発表するっていうのが
あったりします。

[大江氏]

いぶりさんの場合にはたすけ愛の活動から始まって、その会員組織があるっていうところ
が、ひとつの特徴かと思うんですね。その人たちがいろんな形でベースの部分を支えて
くれているということだと思うんですが、そのことは割と意識されて色んな活動をやっ
ていらっしゃるっていう感じですか。あるいは星川さんがグループリビング運営協議会の他
のメンバーの他の法人の他を見た時に、たすけ愛活動の会員の存在のあるなしっていうの
が、かなりプラスだっているふうにお考えになっているかどうか、その辺りはどうでしょ
う。つまり、地域って言っても、地域の一番近いところに会員がいらっしゃるわけですよ
ね。

[星川氏]

そうですね。どういうふうにお話したらいいかわからないのですけれども。会員制というのは本当に一人ひとりが自分で考えてこの会に入ってほしいと思っています。会員みんなの、お金と知恵と労力を集めてこの会を運営していること、できることはして、できないことは助けてもらう、ということを理解していただいて、参加していただくというのが会員制をとっている理由でもあるのです。サービスを受けたいだけでなく、できることはして気持ちよく助け合うということを理解していただけたらなあと思っています。

たすけ愛活動の会員の存在はとてもプラスだと思っています。

[大江氏]

そのたすけ愛の会は、グループリビングができたことによって、なんかそれをきっかけに進化したり変わっていったことはあるんでしょうか。サロンができたことによって、より集まりやすくなったこともそうかもしれませんし。

[星川氏]

そうですね。場所的なものもありますよね。そこで住んでいる方との交流ができたっていうのもあります。やはり、同じ仲間であおおうっていう意識が、皆さんすごくあるんですよ。たすけ愛の会員同士だというのがあるので、サロンに新しい方が入ってきても、「あなたも会員だったの？一緒にやりましょう」と受け入れてくれますね。

たすけ愛の名前にして良かったと思うことが多々あるのですけれども、最初の生活者で、94歳のすごく頑固なおじいちゃんがいる、ちょっと何かあったりするとすぐ怒鳴ったりするようなどころもある方でした。ある日、まだ若い方でしたが、寝たきりで、手も足も動かさない方がサロンに遊びに来た時に、「いやあ大変だねえ。何かお手伝いしまよ」って一生懸命声をかけてくださるのですね。「だって、たすけ愛だから、助けあわなければだめだろう？」って、その人が言ったのですけれども、その気持ちがすごく嬉しいと思いました。たすけ愛っていう名前のおかげで、助け合うことが皆さんに伝わっているのだと思いました。

[大江氏]

一方で清野さんや原さんのところは、そういう全体を支えてくれる会員組織みたいなおところは無いわけですよね。その辺りはこれからそういうものを作ったり、それに類するものとかなんかそれに代わるものとかっていうものを作ったり、あるいはすでにあたりするようなどころはあるんでしょうか。

[清野氏]

地域の方に直接、今入っていただいているそういった名前、特にサロンということでお集めはしていませんけれども、緑光園っていう本体の方の緑光園があるんですが、緑の会さんっていうボランティアさんがいるのですけれども、そういった方が入ってきているんですが、つい先日、その方がちょっとヘルパー2級…いま64～65歳の方かな、昭和23年生まれなんですけど、21日22日、先週来まして、私もボランティアで〇〇させていただい

ておりますけれども、今度実際介護の方のサポートしてですね、支援の方もボランティアだけでは無くしたいということで申し入れがありまして、地域の方の意識の中にちょっと少しずつ外からいままでボランティアとして入ってきた方が、もしかしたらもっとそれ以上のことができるんじゃないかということで、何人かの方…「私、65歳なんだけど、まだ大丈夫かしら」なんて来てくれる方もいますので、そういった意味では本当によちよちというか、始まったばかりなんですけども、そういったことからもしかしたら何か私たちにもできることがあるんじゃないかしらっていう活動を通して、ボランティアを通して、そういった芽生えをしておりますが、入居者の方が、じゃあ実際地域の方とどうやってつながっていくのかっていうことを考えた時には、やはり入っている方のお仲間がこう来ることによつていまつながっているということで、そういった大きい意味での先程の会員様どうかこうとかっていうところにはつながってはおりません。

[原氏]

私たちも生協で言う「ちょボラ」…ちょっとボランティアを立ち上げようかなんて話は一時期ありましたけれども、ちょっと体制的にもいまは無理だと思います。ただ、繋がりっていうのを形でない部分で感じているっていうことを入居者から聞いています。たとえば、全然違うところから引っ越しては来たけれど、歩いていると軽く誰だかわからない人から会釈をされると、ああ私があそこに住んでいる人だって知っているんだなあと思うと、ほのぼのしてくると、そういう近所の人との弱い繋がり…大江先生がおっしゃる弱い繋がりアトリエを通して、それから毎日カフェに行くことによって、たくさん生まれているかなあと、それでいいかなって私たちは思っています。そしてね、グループリビングっていうのはどなたかもおっしゃっていましたが、開かれている場所、地域とか、集まっている人がどういう人か、住んでいる人たちが今までどういうの歴史を持ってきた人で、それぞれ千差万別、十人十色以上だと思うんですね。ですから、いまも色々…こちらお二人のなさっていることを聞いていますけれど、あまり自分としては見てもないので、イメージが本当言って沸かないんですよ。でもそれぞれのところで頑張っているんだあっていうことだけはよくわかるんです。ですから、私たちも小さい団体ですし、マイペースで、そういった小さい、弱い繋がりがたくさん生まれるっていうことを目指してやればいかなって思っているところです。

[大江氏]

ありがとうございました。COCO 湘南台で「アトリエ」と呼ぶ空間は、JKA 補助のグループリビングにも設置され、様々な趣味活動、習い事の教室として使われています。私は最初、このアトリエの意味がよくわからなかったのです。JKA の補助を受けた団体の中でも理解できていないところもあるように思います。ここが地域の人々にとって新たなつながりをつくる場となり、また居住者が地域の人々につながる場となることが意図されているのです。今日ご紹介いただいたように、ここの可能性はいろいろあると思います。そして、アトリエでの活動に参加したことがきっかけで食事づくりの担い手などに参加していくケースもあると思います。カフェはさらに広がりのある関係性につながると思いますが、これは立地にも左右されるので、どこでもできるものではないかもしれません。いずれに

しても、アトリエやカフェを通して様々な形で地域につながることで、グループリビングでの暮らしを応援してくれる人たちを増やすことにつながりますし、居住者一人ひとりが一市民として暮らすことにつながると思います。地域に開くことがグループリビングを強くするのだと思います。



Ⅶ グループディスカッション



1 課題説明

この運動をより有効なものにしていくためには、グループリビングを地域に開くことによって、高齢者一人ひとりが社会の構成員であることを持続することが必要です。今回のワークショップでは、地域にグループリビングを開くことが地域、地域住民、行政、企業や団体に対して、どのような役割を果たすことになり、それがグループリビング生活者、運営者、サービス提供者にとって、どのような意味を持つのかを議論し、地域に開いたグループリビングの仕組みについて考えて行きたい。昨日から貴重な実践をたっぷり伺ってきて、さあ私達自身が考える番ですよというところになりました。あまり時間がないので、単刀直入に入りたいと思います。

地域に開かなければならないということは、グループリビングをお作りになろうという方、あるいはもう既に始められている方にとっては、これは当たり前のことになっていて、議論する程のこともないのですが、ところが、これが一番難しいところになるのではないかと思います。それで、まず皆さんに各グループの中でお考えいただきたいことは、「地域にとってのグループリビングを開くことが、地域にとってどんな意味があるのか」。そして、「グループリビングにとって、地域に開くということがどんな意味があるのか」という、その2つをまず議論した上で、さあじゃあどういいう開き方があるんだというところを昨日今日で学んだことプラスアルファ、もう既に始められている所ではこういう経験があります、あるいはこれから始めようという所では、こんなふうに考えています、というふうなことを各グループの方でおまとめいただきたい。大変時間が短くて恐縮なんですけど、それをですねこれから短時間の間に皆さんのグループでお決めいただきたいです。



(...人数調整...)

各グループで、司会と記録者と発表者を決めていただきたいと思います。

それからなるべく短い時間でざっと自己紹介、これを始めてしまうとこれだけで終わってしまうことがございますので、くれぐれもお気をつけになっていただきたいと思います。

その上で皆様のテーブルの上で模造紙，それからマーカーとポストイットがございます。この紙の使い方，なるべく大きく使っていただいて，私が先程お願いをしましたテーマをまとめて，皆さんにお見せするときに見せやすいようにしながら，ということでやっていただきたいと思います。

(...ディスカッション...)



2 発表

はい，50分になりました。残念ですが，ここまでです。

ここまででできたところだけで結構です。十分な話し合いの時間がなかったということは，重々承知の上ですので，ともかく皆さんのところでどンドン話し合ってきたことを発表していただきたいと思います。今日は遠くからいらっしゃって最終の飛行機に間に合わない大変なことになりますので，何が何でも定刻には終わらせたいと思いますから，各班2分で発表をお願いします。それでは1班から発表をお願い致します。

[1班]

最初のテーマ，まず地域にとってどのような意味があるのかというテーマでしたけれども，大きく分けて4つぐらいの括りで出てきました。やはり地域住民の交流の場ができること，そして自分の在宅的な同じような暮らしが，自分らしい生活が継続できること，そして自分の持ち味を活かして社会参加ができること，あと交流の場憩いの場ということでフリースペースの場になること。そして，地域の住民がグループリビングに出入りすることによって地域とのつながり，そういったものが芽生えると思います。あと，何かあった時，困ったときに，「あ，あそこがあるんだ」ということで，開かれたというグループリビング。そして，地域の人達が気軽に来れるということです。そういった意義があるのではないかと，第一個目のテーマについて，まとめてみました。

あと2つ目ですが，グループリビングがどのような意味があるのか，運営者とかこれから作られる方を中心に視点に考えてみました。まず作ることによって在宅でのいままでの

暮らしが一人きりではない心強さがあるのではないかと、そして入居者様が安心して暮らせる、選択の一つとしての場のつくりができるのではないかと、日頃より関心を持ってもらって自分たちも自主的に色々地域の困っていることにも参加ができるのではないかと、そして形が整っていても次にできるのは心理的生活者へのサポート、個性的な人間は色々リードするというのも課題にはあるが、最後までやはり自分たちが住むことの努力ができるのか、これは問題提起ですかね、こういったことがあるのではないかとということでした。あとは入居者様が、心豊かに生活を提供できる趣味であるとかお食事の提供、そして交流を通して広がる生活ということですかね。あとは運営者の継続性、サポート体制の充実もグループリビングを作るにあたっては大切ではないかとということでした。そして入居者様自身も住まうことによって住民にとっても色々な実践が育ってくる、そんな波及効果もあるのではないかとということでした。以上まとめてみました。

[2班]



それでは第2班のほうが発表させていただきます。いまの1班の方の発表と全く重複しておりまして、言うことがないくらい全部言っていただきましたので、ただ、その中で共通する部分はやはり地域が活性化されるということですね。グループリビングを地域に開くということは地域にとってどんな意味があるのかということの第一番目は、地域が活性化される、それから地域の老人たちですね、安心して生活で

できるということですね。これは情報が周りの、情報収集できますので、そこに住むお年寄りももしこんなときがあったときは、あそこに行けばいいんだね、行くところがあるんだねっていう安心感が持たれるっていうところです。

それから、地域に開かれるということは、グループリビングにとってどんな意味があるのかということで、これはやはり一つの経営としてもやっていかなければなりませんし、それにボランティアで参加するだけではやはり働く人たちの生きがいとか、そういうこともあまり遠のいていくというのでしょうか、うまく説明できませんけど、ですから地域に住んでいる方たちが、よろこんで自分たちも社会の一員になるということ、お役に立っているという意識があって仕事場が、自分たちの町の中に仕事場ができたという、これもグループリビングにとっては皆さんに協力していただいているということで、大変経営上でもプラスになると思います。もう色々あるんですけども、なんかちょっと重複してしまいましたので、以上終わります。

[3班]

3班です。あの1班2班さんがおっしゃられたのとだいたい同じなんですけれども、その中でも新しいことといえば、村社会からの脱却というのがありまして、古い体制の中から

新しいものが生まれてくるということで、そういう古い考えの中から脱却できるということがあります。それからコミュニティを通して、新しいチャンネルを通してということなんですけども、いまおっしゃられたようにボランティアの場ができるとか、働く場ができるとかいうことになるのではないかと思います。それと、そのグループリビングで、消防訓練とか色々なことをすることで、災害等に強い地域になるということですね。それと、地域にとって小さなまとまりで、物やサービスなどを購入する消費にもつながっていく、それから地域の経済の活力を生むということです。それからカフェなどを作られる中で、色んなそういうところでの飲食ができたり、楽しい場ができるというそういうところもありますし、それから自分たち高齢になってそこで安心して住むことができるとか安心して暮らせる地域につながるという、安心感ができるということ、それだけは地域にとって意味があると。

で、二番目のグループリビングにとっての意味ということなんですけども、自分たちも地域にとって役立つことができること、人とのネットワークができる、それから居住者だけで協力し合うのではなく地域とつながっていくことのほうが喜びが大きいとか、それから社会から閉鎖された生き方ではなく人とのつながりからもらえる喜びというのがあります。自分たちができないことを助けてもらえるということ、それとあと経営層が運営に充実できるということで人材が促進、グループリビングにとってグループリビングが新しいスタッフの人材を発見できるということがありました。以上です。

[4班]

4班です。最初のテーマについて、地域、行政、企業、団体ということに分けて考えてみました。地域に開くことがどのような意味があるのか、住民にとっては仲間ができるということや生き方の参考になる、同世代の仲間が、グループリビングにいない人の仲間ができたりとか、自分たちがこれから歳をとってどういった生き方をしていくかという生き方の参考にできるということで意味があると思いました。行政の方では、行政の主体も色々な側面で共同して色々なことがやりやすくなる、それと共同しているので費用の節減ができるということがありました。企業や団体にとってどのような意味があるのかということですが、消費者の意向の汲み取りをすることでマッチしたものが提供できるとか新しい仕事、ニーズができるということなどがありました。また、企業や団体が援助そういうこともイメージアップなどにつながるということがありました。

そして、グループリビングにとっては何の意味があるのかということですが、マンパワーなどの資源の確保。グループリビングという小さな枠の中ではなくて、もっと広い地域に出て社会性を確保できるということ、またグループリビングのことを知ってもらって認知の向上ができるということと、やはり社会に出て他世代の交流ができるということ、これを具体的にどのようにやっていくかということで、レストランやカフェ、アトリエや会議の場など、共有スペースの利用を提供していくということがありました。また、ホームページの運営や更新をすることで、活動を知っていただくということが大事だとありました。また、具体的なこともあったんですけど、このグループリビング維持をしていくことが大事だという意見もありました。以上です。

[5班]

第5班です。入居者の方もおられたし、今から作って入りたいって言う方もおられたし、サポートしている方もおられましたので、多様な意見が出ましたけれども、簡単に、というか一言ずつだったので、時間がなかったのであれですけど、住みたい人が地域に限定することなく、住みたい人がやって来られるような環境のグループリビングを作ったほうが一番いいかなという人。具体的に入居者の方の話ですけれども、最近雪かきを近所の方がやってくださったということで、やっぱり地域にグループリビングがあるということで、地域の役割も存在するっていうことが非常に重要だということ。それと、それに関わるイベントの開催、これは活性化の一つ。あとグループリビングを作ることもそうなんですけど、地域との交流の場、たとえばカフェという代表的な例が出ましたが、そういったことをシャッター商店街になっているところを活かしながら、グループリビングと交流の場を作ることの提案もありました。まとめてみますと、グループリビングから地域、地域の地域に出て行くってことが大事だし、地域の人が逆にグループリビングに入ってくる、入ってこられる環境を作るといえることですかね。一方通行じゃなくて入ってくる、ですから自治会が回覧板を回すんじゃなくてそこに入って行ってゴミ拾いとか公園の掃除なんかでもできるようなお互いの交流が必要だということもありました。これは私の私見ですけど、グループリビングがあることで、近所の仕事地域の仕事が発生する。それからボランティアを通してそこら辺にいる若い人、中年の人の自分の将来、自分が70、80歳になったときの自分の将来の象が自分の目と体で覚えられる。これが二点目。三点目はグループリビングがあることで、地元で物を買って、地元で消費できるということで、経済の貢献が多少なりにもできるということがまとめとしてはありました。以上です。

[6班]



私ども班は、地域の地域側とかグループリビング側とかで分けること自体に抵抗がかなりあったんです。溶け込んだ同じものではないのだろうか、同じ立場、同じ視点ではなかろうかという考え方で進めてまいりました。お互いに地域を良くするために、どのようにしてお関係し合うかという、一番にグループリビングのテーマである自立と共生の中に人間として地域の生活者としての相互の関わりが軸ではなかろうかということになりました。

子どもたちの...高齢者や認知症の方々の想像でしかなかったかもしれないイメージを日頃から共に地域の中で暮らしあうことで払拭していく効果があるのではないだろうか、また災害やそういう何かあった時に飛んできてくださる、「あそこにああいう場所があるんだよ」という認め合える情報がわかる相互の関係づくり、またグループリビングのほうは野菜供給したり、サロンをしてみたり、地域スペースを広くほっとスペースとして提供してみたりすることによって、またそれを地域に還元してい

くような相互の関係づくりができたらいいのではないかということになりました。で、境目のない交流、じゃあ何をしたらいいのか、具体的に何をしていこうって話になった時、皆わざわざいるんだから地域に、地域を良くするために努力できることはとにかくトライしてみようと、やってからそのうちわかるということになりました。先程言ったような「自立と共生」ということをテーマにしなが、地域と絡み合いながらお互いを知り、また溶けこむような、それで支援しあえるような、そういう関係づくり、またほっとするような楽しいスペースとしての資源としての地域でのあり方、そういうものを作っていただけたいなということになりました。以上です。

[7班]



7組はですね、ちょっとそそっかしい人が多かったみたいで、地域へ開くグループリビングじゃなくて、グループリビングを開くと。そういうふうな捉え方をしてしまったので、地域にグループリビングがたくさんできたら、そういう観点で話し合ってしまったので、そちらのほうの発表をさせていただきます。

そうしますと地域のメリットは、組み立て方で世代間格差をなくすことができるだろうと、そのグループリビングだけでなく、そ

の近辺に小さな子どもたちが施設や色々なものを作ることで世代間格差をなくす、それでもっとすごいのは孤独死を減らすことができるとか、仕事を作り出すことができるとか、北欧のようになれるとかいう話も出て来ました。それからグループリビングのほうのメリット。グループリビングがたくさんできたら、という観点ですので、形態の多様性が生まれ、入る方の選択肢ができる、たくさんできるというようなことと、行政からの支援が受けやすくなる、理想に近づけることができるそのような意見ができました。以上です。

[8班]



8班です。私たちの班は、運営者の方と入居者の方と研究者の方と三者揃っての議論になりました。最初に地域にとっての意味なんですけれども、まずは地域にグループリビングとはなんぞやということを知ってもらえて、高齢期の住まい方の選択肢の一つとして、皆さんに周知してもらってことが大きな意味だということになりました。自然と地域の話題になることで、どうい住まい方なのかということ発信

できると、それが大きな意味ということで、ちょっとその入居者の方、まだ入って5ヶ

月足らずということだったんですけども、まず入ってすごくよかったっていう声をいただきました。なかなかお友達に「グループリビングに入った」と言うと、「もうそんなところに入っちゃったの」と言われることがあるとおっしゃいましたけれども、なんかそういう偏見みたいなものを払拭して、たとえばヘルパーさんなどをやりながら入居される方もいらっしゃるようなんですけども、ちょっと働きながら暮らせるようなそういう生き方、暮らし方みたいなものを皆さんに発信するのがいいことだよねというご意見でした。

それからグループリビングにとっての意味ということなんですけれども、いままで出ましたように、交流が生まれるとか生活者が来るとかスタッフが来るとかそういうことがあるということなんですけれども、入居者として御小遣い稼ぎができるとか、1~2時間働けるような働き方ができるとか、それから...すみませんこれは一番のほうですね。グループリビングから生まれて食事のおり~ぶってという団体のように、地域の新しい担い手と言いますか、高齢者支援の人材として育っていくことができるという、そういうご意見もありました。それから、どんな開き方があるのかということなんですけれども、アトリエとかコミュニティ・カフェとかそういういままでのご紹介があったんですけども、もっと交流スペースみたいなものを活用したり促進するためには、色々もっと考えなければいけないねということで、あとそのこれからの課題にして、特にその交流スペースに来て欲しい人、特に男性の単身者の引きこもっちゃいがちの人たちをどうやって地域に出していくのかって言うことをこれからちょっと考えられればいいねということが出たかと思えます。以上です。

[9班]



9班です。だいたい意見、皆さんと同じようなことで、やはり意見それぞれ発表しますと、まず最初に地域にとってどんな意味があるのかということ、これは大きく言って2つに分けると、高齢者の自立と共生を目指した暮らし方、そういう新しい暮らし方をバザーとか、あるいはサロンコンサートをやったりしていますけど、地域に開くイベントをすることによって、そういう暮らし方がやはり地域の方に触れて、そういうところから情報発信もそうで

すけど、しないといけませんけど、高齢者の一人暮らしというそういう方にとっては安心安全な住まいであるとか、高齢者にとっての将来的な安心材料になるというような側面がひとつあると、それともう一つは地域にとってどういう意味があるかということ、野菜を売ったりすることもありますけど、そこに入る方たちに色んなお手伝いをボランティアとか含めて、そこで働いてみたいとか、あるいはおり~ぶさんのような方たちがそういうサービスを利用するような形、まあライフサポーターもそうですけど、そういう一つの働く場を提供するというような側面、そういう意味も仕事を、大きく言うと雇用の機会を作る

というようなことの意味があると、それもずっといままで出てたと思うんですけど、その辺が地域にとってのいい意味ということの意見です。

それともう一つは、グループリビングにとってどんな意味があるのかという、ここまでは地域と交流することから、地域の方たちのニーズを汲み取るというか、触れ合うことでそういう一つの知識の広がりというか、そういうものがグループリビングには活かせる、暮らしのほうに活かせるというようなこととか、あと空き家ですね、高齢者の空き家をグループリビングに使用できる...そういうことも、グループリビングにとって意味がある。それと、ひとりいるより皆さんと話し合いをして、相談しあったり地域の人との交流含めて、共同の住まいをすることによって、毎日毎日元気になるというような大きな効果が出てくるということですね。あと子供たちがいることでも安心とかいうこと、それと住まわられている方たちが色々イベントの講師になったりとか、持ってらっしゃる知識と経験そういう技能を活かすことができるグループリビングという場を活用してそういうことができるということが、一つの高齢者の活力になるということですね。あと、注文が一つありまして、これが一人、高齢者のお金の...やはりその入居するにはお金が要りますよね。まあグループリビングに入るにはある程度入居金が、COCO 湘南の場合 370~380 万と、そういう金額設定しておりますけれども、高齢者がこれから年金...先程原さんが仰っていたように国民年金だけで、というのがありましたけれど、そういうので、やはり将来に備えて蓄えていこうというようなことは望んでいないということ、そういう意見がグループの意見でした。

[10 班]

10 班ということなので、だいたいがぶってしまうと思うので、簡潔に述べさせていただきます。

グループリビング、今日ご紹介されたものも多くありましたけれども、趣味の場を提供していることによって、地域性を開く、そういった機能があると思います。その中で、趣味という建前や名目ですので、気軽に地域の人に参加できる。そうすることによって、社会的弱者...包括支援センターの方がいらっしゃいましたので、包括支援センターに相談に行く前に、そういった人間関係を築くことによって、知らず知らずのうちに相談できる相手が見つかる、そういったことがあり得るということと、あとはこの趣味の場所で先生になったりとか、あとはスタッフになったりすることによって、たとえば主婦だったりとか後は毎日働くことができない人の中間就労の場所になったりとか、そういった場になることが考えられると思いました。

そして、地域の課題を場で共有することによって、皆でそれを解決する力になれるということと、後孤独死を防げるとか、挨拶からお互いの近況がわかる、伝えられる、そういったことができると思いました。ありがとうございました。

3 まとめ

ご協力ありがとうございました。ほぼ時間通りに進んで参りました。課題の設定はかなり強引ではあると思います。なぜこの設定をしたかという、私の法人に認知症グループホームもあります。グループホームも地域と繋がりなさいと、で、火事なんかがありますと、最近ありましたでしょ、消防署が飛んできて地域の人と繋がりなさい、火事の時に助けて貰いなさい、と言うんですね。地域の人と繋がりたいのは当たり前なだけけれど、そういうあまり直接的なところから入ってしまうのは、微妙なところですね。グループリビングを運営してみて、私も将来入ろうと思っている人間として、皆さんのご意見を聞きながら、まとめるということとはとてもできないんですが、実はですね、私のところの周りに、ほぼ徒歩で行けるとところに、2軒の高齢者専用住宅ができました。で、結構大きいです。ライバル現るって思っちゃったところがあります。でもしばらくして、これはライバルじゃないんだなっていうふうに思いました。グループリビングは、高齢者専用賃貸住宅の指定をとっているところもあるでしょう。私のところはとっておりませんが、将来的にどうしてもとれと言われれば、とります。それでも、「グループリビングえんの森」です。皆さんのところもそうだと思いますが、グループリビングと名付けた時に、何が違ったのかというところから考えないと、失敗をしていくんではないか。一本の筋を立てて、そこから揺らがないようにしないと失敗する。私も長い活動の経験の中で痛い思いをたくさんしていますし、周りでそういうこともたくさん見て参りました。グループリビングというのは、地域に開く、地域から開かれるというところだと位置づけた時に、それを言葉面とか当たり前の事というのではなくて、自分たちの所でそれはどういうことなのか、というところをしっかりとしないといけない、いっぱい出てくる選択肢の中で選ばれないものになっていく可能性もあるように思います。ここは要なんだなというところを、もう一回再確認をするという機会だったのではないかというふうに思います。私自身、お入りになった方が、働きながら入ったという、「もう入っちゃったの?」「まだ早いよ」とかいうことをグループリビングをよく知らない皆さんがおっしゃいますよね。まだ早いって言う人を私たちから見ると大抵ちっとも早くない、というふうに見えるんですけども、そういうところがまだまだ私たちはアナウンスできていない、知られていない、グループリビングとはなんぞやということをしちんとできていないときに、地域との繋がりとこのところをもう一回それぞれが、もう既にできているところ、これから作ろうとしているところが再確認していないと、埋もれていくんじゃないか。やはりこれだけ高齢者の住宅政策が言われ始めた今、「ケアがついた高齢者の住まい」という単純な括りの中に入ってしまうと、強く思います。そこら辺は、今日お帰りになりましたけど、西條さんが「自立と共生」を掲げ、ここで暮らす人々を「生活者」と仰っていることの意味をもう一度深く考え、それぞれが自分の言葉に置き直してみる必要がある。「生活者」とは、地域社会と接点のある人のことです。グループホームも運営しておりますけれども、グループホームに入られた特に後期の認知症の方たちは、やはり生活者というものからはるかに遠くなってしまわざるを得ないところに立たされてしまう。人の人生の終わりにはそういう時期もあるかもしれない、けれども出来る限りそういう時間が短く、生活者であり抜く場としてのグループリビングというものを私たちは目指したい。見学に見える方に、「どこまで面倒見てくれるんですか?」って聞かれますよね、「面倒見ませんよ」って私は言

ってます、ごくあっさり。「あなたはどう生きていたいと思っらっしゃるのか」ということからはじめていただきたいと、「ここで死にたいと思ったら、ここで死ぬような関係をこの中で一緒に作りましょう」と、関係性を創ることから始まるのだというふうに言うと、怪訝な顔をされる方もいるし、納得される方もいる。私も乱暴に言うてしまうこともあるんですけど、そここのところがやはり地域と共生あるいは生活者としての立ち位置をそれぞれが守っていくというところのグループリビングの存在意義がある。「リビング」ですよね、これに非常に大きな意味があると思います。

私、実は30年前にこの話を西條さんから聞いた者です。私はそのころ30代のはじめでした。西條さんもまだとても若くてシャキシャキしてらっしゃいました。その時点で、「私はこういうものを（グループリビング）作る」とおっしゃいました。で、20年ほどたって本当に実現された。それで、「お作りになったんですね」って連絡をしたら、「あなたも作りなさい」って仰ってくださいました。作ることができたのは、ほとんど30年後でした。

これからの超高齢化社会の中で、基調講演の宮本先生からお聞きしたような無縁社会の中で「地域で生活者として生きる」という私たちの立ち位置をぐらつかせてはならない。西條さんの生き方というか、姿勢に、やはり学びたいと思うのは、その辺にあるのかなと。西條さんを神様だとは思いませんけれど、あの揺らぎない姿勢に、もう一回学ばないと昨今の高齢者住宅ブームに埋もれてしまうのかなと私自身がこの2日間で強く感じました。

まとめにもなんにもなりませんでしたが、この2日間お付き合いした皆さんは、これから一緒に悩みを分かち合っていく仲間だというふうに思っております。課題はともたくさんあります。そんなに地域って甘くないし、嫌な人、価値観の合わない人もいっぱいいます。特になんと言うことのない、どこにでもある地域と、どうグループリビングが関わっていくのか、これ結構たいへんですけれども一緒に頑張りましょう。ありがとうございました。



VIII 閉会の挨拶

星川 光子

皆さん今日は最後までお疲れ様でした。ご参加ありがとうございました。

多分、二日間の研修を通しまして、「あ、そうなのか！」とすっきりしたところと、「あれ、どうなのだろう？」とクエッションマークがいっぱいできたところとあるのではないかなと思っています。ぜひこの二日間でできた皆さんとの繋がりを大切にして、分からなかった事は、あの人に聞いてみようといって電話してください。また、「たすけ愛の家」の生活者はお客さんが大好きですので、来てくださると皆さんとても喜びます。ぜひ登別に遊びがてら、来ていただけたら嬉しいなと思っています。この二日間の繋がりを、また繋げていけたらうれしいと思っています。

どうぞ皆様、それぞれの地域で、ご活躍ください。今日は本当にありがとうございました。

Ⅸ アンケート結果

1日目

ふらっとステーション 見学説明会

- ・ NHK のシリーズで各団地の高齢化をとりあげていましたが、ふらっとステーション・ドリームに取り組みに感動しました。
- ・ 自立と共生、地域で暮らすをテーマに2箇所の素晴らしい取り組みを見せて頂きありがとうございました。

できない事を補い合い支え合う仕組みを時代に即して変化しながら実践し形にしていくエネルギーに驚き学ぶ事が多々ありました。特にドリームハイツという集合住宅をベースにした多世代を対象とする地域住民の取り組みは、今後の地域への取り組みに生かしていきたいと思います。

- ・ 初めて見学させて頂きました。自立した住民組織が積極的に地域課題解決に関わっている事例として大変参考になるとともに、個人のボランティア精神によるところが大きい

ため、他の地域で、その地域にあったしくみをつくっていくことの難しさを感じました。“ふらっと”という名称の意味がとても良いと思いました。また居場所、情報、相談相手が欲しいというのは各地で共通の課題だと思いました。

- ・ 幣法人でも週1回ですが、居場所としての簡単なカフェを開いておりますが、定常的なものへと発展させたいと思っております。ボランティアさんへの報酬、運営費等々、ふらっとステーションの運営をよくお聞きしたいです。



COCO 湘南台 見学説明会

- ・ オーナーとして参加しました、「私が決める私の暮らし」いいですね。自分の生き方をしっかりと。
- ・ 高齢化=不安のイメージが消えて、楽しく人生を過ごせる希望と喜びを感じました。自分達もこのような生き方を作りあげていきたいと強く思いました。
- ・ 人が住むこと暮らすことをもう一度考える機会になりました。住むことが老いをすごす



所ではなく、創造の場所になっていることを、もう一度自分なりに考え直すことができました。

- ・ すばらしい施設と運営、住居人の方々の自立ということをきちんと理解した生き方に感動しました。「自立と共生」ということを大切に一人一人を尊重して運営している姿にふれ嬉しく思います。

- ・ 小規模多機能を開設しましたが、COCO を見させて頂き、事業者から見たある意

味押し着せの施設となっていないか、反省しております。利用者からの提案による棲家、すばらしいですね！

- ・ 市民力・地域力で自分が入居者となりたいような住まいを目指すという志しが素晴らしかった。建物が居心地の良い空間をつくろうという配慮が随所に見受けられました。担い手側のメンバーの高齢化、次の世代の育成ということが、ふらっとステーション・ドリームとも共通の課題だと思います。居住者の方の住まい見学座談会での意見交換など、貴重な時間を頂きありがとうございました。

2日目

ワークショップ

- ・ 当初 GL, Gハウスの運営はどの様にとという観点で話を聞き始めたのですが、より良い GLを持ってもらうには、サポートする NPO として何をすべきか、とアプローチの仕方を 180° 変更する必要を感じました。今後の住まいのあり方の参考とさせていただきます。
- ・ 講師陣をはじめ、男性のカゲがうすいような気がしました。何故なのでしょう。パワーポイントの字が（配布資料で）もっとみやすいとよかったです。実際に運営されている方のナマの声をきけて、大変参考になりました
- ・ これから GL を作ろうと考えています。理念に賛同し興味を持ちました。実際に NPO をたちあげ運営していく大変さを感じますが、今日のようなワークショップは参考になります。
- ・ 基調講演は大変勉強になりました。今、そして今後の見通しの中で一瞬目の前が真っ暗になる様な絶望感も感じましたが・・・されどあきらめず現実を受け入れ柔軟に変化し、つながって助け合っていく新しい人間関係の構築の視点が大切と改めて感じました。今、実際に活動されている取り組みについて具体的な話が聞けて参考になりました。やはり腹をくくって取り組んでいくという姿勢が大切だなあと感じました。
- ・ それぞれ素晴らしいリビングだと思いましたが今度じっくり苦労話も聞ける機会があればありがたいです。立ちふさがり難局をいかに乗り越え成長していくか、継続し続ける事の秘訣も知りたいと思いました。
- ・ 今後 ①入居募集の仕方 ②リーダーの育て方 ③採算の確保の仕方をワークショップに入れて欲しい。
- ・ それぞれ特色のあるグループリビングのお話を聞いて、地域により運営も違ってくるものの宮本先生のお話のとおり、グループリビングが必要とされる土壌は十分、というよりこれから高齢となる人々を救う道と確信しました。自然はたくさんあるけれど人が少ない自分の住む地域で、どのようなリビングができていくのか？ 持ち帰って多くの智慧を巻き込んでいきます。
- ・ 他のグループリビングの取り組みについて聞いて良かった。家族のあり様の変化についても興味深く感じた。老人の事も大切であるが、若い世代からの積み重ねであることが大事だなと思いました。
- ・ 次世代人を育てる事の難しさを再認識した。できる範囲でこれからも活動勉強が必要と考えました。グループディスカッションも他グループの方と知り合え良かった。
- ・ 時間厳守！！パネルディスカッションの質問の内容に対する回答が正確でないのが残

念。

- 運営を続ける為には→形を整える。理事の任期を明確にも 1 つの時期の運営陣を育てる手立てになる
- 考えを整理するうえで、新鮮な話を聴かせていただきました。
- 一日夜の懇親会での雑談はよいものでした。
- 地域にとって GL/GL にとっての地域 考えさせられるよい機会でした。
- 地域への展開として、公的賃貸集合住宅の様々な機能付加のあり方として、講演の方々の事例が大変参考になった。グループリビングが弱いつながりをつなぐ役割を果たせるか、又、若い人々の協力を得るためには、ボランティアではなく job の提供が必要ではないかと思いました。
- 様々な方にお会いできてよかったです。リビングの入居者の方と参加しましたが、入居者の方の勉強になってよかったです。このワークショップがいつも真冬ですが、季節のよい時の開催を強く希望します。
- これからの社会、急速な高齢化で様々な問題がとりだされている中で、私も老後のこれから、どう暮らしていくのが良いのか、とても勉強になりました。地域密着のコミュニティでずっと生活するために、大切なもの、それはお互いを思いやり、支えあえる精神をもつことが大切なのだと思います。それを実践しているグループリビング、「自分の居場所があること」「人として生きられること」自立共生の老後組織が大いに盛んとなることを祈っています。
- 宮本先生の基調講演とてもよかったです。改めてこれからの介護や地域づくりについて考えさせられました。
- いつの日かグループリビング的なものを形にできたらいいと思っています。パネルディスカッションもそれぞれの取り組みや思いそして工夫など参考になることがたくさんありました。
- 講演会の現代の若者と家族の形態について改めて実感できることがありました。少しでも共生の形ができるように地域の中でとりくむ必要性を感じました。
- グループリビングをまずしっかり受け止めて、どうそのことをこれから作っていく方向に持っていくか検討したいと思います。又このような機会がありましたら参加したいと思います。
- 宮本みち子氏の基調講演はとても勉強になりました。パネルディスカッション、グループディスカッションは本や報告書を読めばわかるような内容で特に参考になりませんでした。特にグループディスカッションは時間不足で自己紹介で終わってしまう感じで残念でした。
- NPO・社福等の相違や運営者、入居者等の意見大変参考になりました。